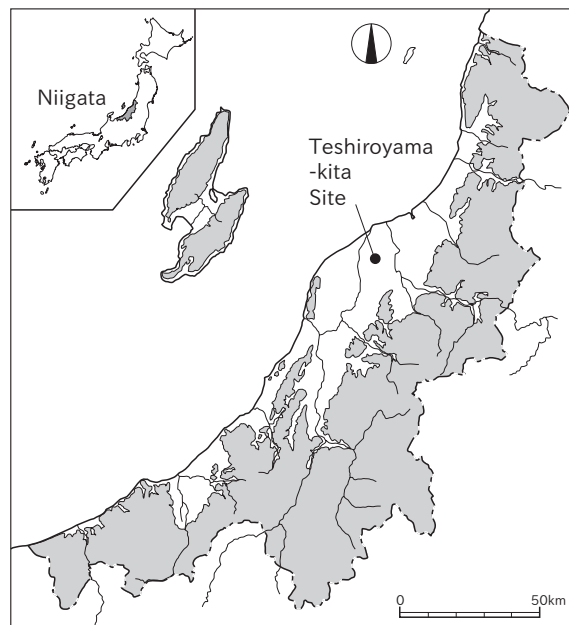


# てしろやまきた 手代山北遺跡 第2・3次調査

—市道亀田南線建設事業に伴う手代山北遺跡第2・3次発掘調査報告書—



2009

新潟市教育委員会





## 例 言

- 1 本書は新潟県新潟市江南区手代山<sup>てしろやまきた</sup>地内ほかに所在する手代山北遺跡発掘調査の報告書である
- 2 調査は市道亀田南線建設事業に伴い、新潟市教育委員会（以下「市教委」という。）が調査主体となり、新潟市文化スポーツ部歴史文化課埋蔵文化財センター（以下「市埋文センター」という。）が補助執行した。
- 3 手代山北遺跡は平成19年に上記事業に伴う試掘調査（以下「第1次調査」という。）によって新たに発見された遺跡で、事業計画の関係から同年秋から緊急調査（以下「第2次調査」という。）を実施することとなった。また平成19年度内では調査対象範囲全ての発掘調査を終えることは不可能であったことから、平成20年度に残った部分について発掘調査（以下「第3次調査」という。）を行なった。
- 4 出土遺物及び発掘・整理事業に係る記録類は、一括して市埋文センターが保管・管理している。
- 5 第2次調査及び第3次調査は市埋文センター現有体制のみでは対応できなかったことから、国際文化財（株）北陸支店（平成20年現在。平成19年度は国際航業（株）新潟支店）に発掘調査・出土品他の整理事業及び報告書刊行作業の支援業務を委託した。発掘調査は平成19年と同20年に実施した。整理事業は平成19年度と同20年度にかけて実施し、平成21年に報告書刊行を行なった。発掘調査と整理事業の体制はⅢ章に記した。
- 6 発掘調査に伴う測量業務は第2次・第3次調査共に（株）イビソク新潟支店に委託した。
- 7 自然科学分析は（株）火山灰考古学研究所に委託した。
- 8 本書の執筆は第Ⅰ章、第Ⅱ章第3節、第Ⅲ章第1節を朝岡政康（市埋文センター主査）、第Ⅱ章第1・2節、第Ⅲ章第2・3節、第Ⅳ・Ⅴ章を丹下昌之（国際文化財（株）主任研究員）、第Ⅵ章を杉山真二（（株）火山灰考古学研究所）、第Ⅶ章第1・2節A・第3節を朝岡・丹下、第Ⅶ章第2節Bを鳥越道臣（国際文化財（株）研究員）が執筆した。
- 9 本書で用いた写真は、遺構写真は朝岡・丹下が撮影し、遺物写真は丹下が撮影した。ただし写真図版1は国土地理院提供による。写真図版2・3は（株）イビソク新潟支店の撮影による。
- 10 遺構図のトレースと各種図版作成・編集に関しては国際文化財（株）北陸支店に委託してデジタルトレースとDTPソフトによる編集を実施し、完成データを印刷業者へ入稿して印刷した。
- 11 調査から本書の作成に至るまで下記の機関よりご指導・ご協力を賜った。厚く御礼申し上げる。  
春日 真実 新潟県教育庁文化行政課 （財）新潟県埋蔵文化財調査事業団 新潟市土木部東部地域土木事務所建設課

## 凡 例

- 1 本書は本文・別表と巻末図版（図面図版・写真図版）からなる。
- 2 本書で示す方位は全て真北である。磁北は真北から西偏7度46分である。掲載図面のうち、既存の地形図などを使用したのは、原図の作成者・作成年を示した。
- 3 引用文献は著者と発行年（西暦）を〔 〕中に示し、巻末に一括して掲載した。
- 4 遺構番号は発掘調査の際に付したものを用了。番号は遺構の種別毎に付さず、通し番号とした。
- 5 土層観察の色調および遺物観察表の遺物の色調は『新版 標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局 1967）を用い、その記号を本書に掲載した。
- 6 土器実測図の断面は、須恵器を黒塗り、須恵器以外を白抜きとした。漆器の朱漆・黒漆、および砥石の砥面、軽石の切断面は網目で表し、網目の濃度を変えて表した。
- 7 土器実測図で全周の1/12以下のような遺存率の低いものについては、誤差があるため中軸線の両側に空白を設けた。
- 8 遺物の注記は「07手代山北」・「08手代山北」とし、出土地点などを続けて付した。
- 9 掲載遺物は通し番号とし、本文・観察表・写真図版の番号は同一番号とした。

# 目次

## 第I章 序 章

- 第1節 遺跡概観 ……………1
- 第2節 発掘調査に至る経緯 ……………1

## 第II章 遺跡の位置と環境

- 第1節 遺跡の位置と地理的環境 ……2
- 第2節 周辺の遺跡 ……………2
  - A 砂丘上の遺跡 ……………2
  - B 自然堤防上の遺跡 ……………5
  - C 低地の遺跡 ……………5
- 第3節 歴史的環境 ……………6

## 第III章 調査の概要

- 第1節 試掘・確認調査 ……………7
- 第2節 発掘調査 ……………8
  - A 調査の方法 ……………8
  - B 調査経過 ……………9
  - C 調査体制 ……………9
- 第3節 整理作業 ……………10
  - A 整理方法 ……………10
  - B 整理経過 ……………10
  - C 整理体制 ……………10

## 第IV章 遺 跡

- 第1節 概 要 ……………11
  - A 第3次調査区 ……………11
  - B 第2次調査区 ……………11
- 第2節 層 序 ……………12
- 第3節 遺 構 ……………12
  - A 第3次調査区 ……………13
  - B 第2次調査区 ……………18

## 第V章 遺 物

- 第1節 出土土器類の概要 ……………24
  - A 土器の記述 ……………24
  - B 出土遺物各説 ……………25

## 第VI章 自然科学分析

- 第1節 手代山北遺跡の土層 ……………30
  - A はじめに ……………30
  - B 土層の層序 ……………30
- 第2節 花粉分析 ……………30
  - A はじめに ……………30
  - B 試料と分析方法 ……………31
  - C 分析結果 ……………31
  - D 花粉分析から推定される植生と環境 ……………32
- 第3節 プラント・オパール分析 ……33
  - A はじめに ……………33
  - B 試料と分析方法 ……………33
  - C 分析結果 ……………34
  - D 考 察 ……………34
  - E ま と め ……………34

## 第VII章 総 括 ……………36

- 第1節 遺 構 ……………36
  - A 遺構の時期 ……………36
- 第2節 遺 物 ……………38
  - A 出土土器の編年的位置づけ ……38
  - B 不明石製品について ……………39
- 第3節 周辺遺跡との関係と手代山北遺跡の性格 ……………39

- 引用・参考文献 ……………41
- 報告書抄録・奥付 …………… 巻末

## 挿図目次

第 1 図	手代山北遺跡周辺地形分類図 ……………3	第 7 図	手代山北遺跡における花粉ダイヤグラム ……………31
第 2 図	手代山北遺跡周辺の遺跡分布図 ……………4	第 8 図	手代山北遺跡におけるプラント・オパール 分析結果……………32
第 3 図	手代山北遺跡確認調査位置図 ……………7	第 9 図	手代山北遺跡の花粉……………35
第 4 図	試掘調査土層柱状図……………8	第10 図	手代山北遺跡の植物珪酸体……………35
第 5 図	タタキメ・あて具痕の細分類図……………24		
第 6 図	手代山北遺跡土層柱状図……………30		

## 表目次

第 1 表	手代山北遺跡における花粉分析結果……………33
第 2 表	手代山北遺跡におけるプラント・オパール分析結果……………34

## 別表目次

別表 1	主要遺構計測表……………43	別表 4	木製品観察表……………46
別表 2	土器観察表……………45		
別表 3	土器転用砥石・石製品観察表……………46		

## 図版目次

図版 1	周辺の旧地形図 (1/25,000)	図版 15	遺構個別図 3 (1/40)
図版 2	遺跡周辺の旧土地利用図 (1/4,000)	図版 16	遺構個別図 4 (1/40・1/80)
図版 3	手代山北遺跡と周辺遺跡 (1/10,000)	図版 17	遺構個別図 5 (1/40)
図版 4	グリッド設定図 (1/2,500)	図版 18	遺構個別図 6 (1/40)
図版 5	遺構全体図 (1/400)	図版 19	遺構個別図 7 (1/40)
図版 6	第 3 次調査区全体図 (1/200)	図版 20	遺構個別図 8 (1/40)
図版 7	第 2 次調査区全体図 (1/200)	図版 21	出土遺物 1 SK125・SK127・P236・ SK141・SD87・SD88
図版 8	第 3 次調査区部分図 1 (1/100)	図版 22	出土遺物 2 SK44・SK38・SK23・ SD42・P171・SD36・SD76・SX67・ SX68・第 3 次調査区遺構外
図版 9	第 3 次調査区部分図 2 (1/100)	図版 23	出土遺物 3 第 3 次調査区包含層・攪乱・ 第 2 次調査区 I 層・II 層・攪乱
図版 10	第 2 次調査区部分図 1 (1/100)		
図版 11	第 2 次調査区部分図 2 (1/100)		
図版 12	第 2 次調査区部分図 3 (1/100)		
図版 13	基本層序・遺構個別図 1 (1/40)		
図版 14	遺構個別図 2 (1/40)		

## 写真図版目次

- 写真図版 1 手代山北遺跡周辺空中写真
- 写真図版 2 手代山北遺跡全景空中写真
- 写真図版 3 第3次調査区全景、第2次調査区全景
- 写真図版 4 基本層序2、SK78 土層断面、SK78 完掘、SK79 土層断面、SK79 完掘、SK139・140 完掘、SK114 土層断面、SK127 遺物出土状況
- 写真図版 5 SK129・130 土層断面、SK129・130 完掘、SD87・88 土層断面、SD87・88 完掘、SB316、SA317・318 検出状況
- 写真図版 6 SE43 土層断面、SE43 完掘、SE41 土層断面、SK38・SD37 土層断面、SK38 遺物出土状況、SK38 完掘、SK33・SD34 土層断面、SK33 完掘
- 写真図版 7 SD42 遺物出土状況、SD42 完掘、SD4・16 土層断面、SD4・16 完掘、SE31 完掘、SE19 土層断面、SE19 完掘
- 写真図版 8 出土遺物1 SK127、SK38、第3次調査区包含層、SK125、P236、SK141、SD87、SD88、SK44、SK23、SD42、SD36、SX67
- 写真図版 9 出土遺物2 第3次調査区遺構外、第2次調査区遺構外、土器転用砥石、石製品、軽石
- 写真図版 10 出土遺物3 木製品

# 第 I 章 序 章

## 第 1 節 遺跡概観

手代山北遺跡は新潟市江南区手代山 2 丁目 627 番地ほか（新潟県埋蔵文化財包蔵地カード）に所在する。本遺跡は平成 19 年（2007）に市道亀田南線建設事業に伴う試掘調査で新たに発見された遺跡である。当該地から約 300 m 南に手代山遺跡があることから手代山北遺跡とされた。

## 第 2 節 発掘調査に至る経緯

市道亀田南線道路改良事業は、旧亀田町時代に計画された事業である。平成 17 年（2005）に亀田町は新潟市と合併し、事業は合併建設計画として新潟市が引き継いだ。平成 17・18 年（2006）は新潟市亀田支所建設課が所管し、平成 19 年からは新潟市土木部東部地域土木事務所建設課が所管している。

事業予定地が一部手代山遺跡に隣接することや、新潟市でも遺跡が多く存在する亀田砂丘周辺部であることから、平成 17 年に、事業予定地内の取得済み用地内において確認調査を実施した。9 月 6 日から 12 日にかけて 28 箇所のトレンチ調査を実施した。調査面積は 411㎡に及んだ。1 か所のトレンチで古代の土師器片が 4 点出土したが、出土した層が水田床土であった事から、原位置を保っていない可能性が高い。調査の結果、当該事業予定地については遺跡の保護上問題ないことが確認された。しかし周辺の遺跡の分布状況と、この確認調査で僅かながら遺物が出土したことも考慮し、残りの事業予定地についても用地の取得後試掘調査が必要な旨所管課に連絡し、以後事業の進捗に合わせ協議することとなった。

平成 19 年に用地の取得が進んだことを受けて、東部地域土木事務所建設課から 4 月 27 日付東土木第 153 号にて事業予定地の未調査部分について試掘調査の依頼を受けた。調査対象面積は 4,776㎡であった。依頼を受け 7 月 10・11 日に試掘調査を実施した（第 1 次調査）。14 箇所のトレンチ調査を実施した。調査面積は 38㎡に及んだ。調査結果については第三章第 1 節に記した。試掘調査の結果、遺構・遺物が発見されたことから、当該地が新遺跡であることが判明し、平成 19 年 7 月 11 日付新歴第 5025 号の 9 にて新潟県教育委員会（以下「県教委」という。）宛に新遺跡発見の通知をし、平成 19 年 7 月 31 日付教文第 508 号にて「手代山北遺跡」として県の埋蔵文化財包蔵地カードに登録された。

第 1 次調査の結果から、事業予定地内の手代山北遺跡に該当する 2,384㎡について、本発掘調査が必要と判断された。事業の緊急性も高いことから、平成 19 年に市道 293 号線の南側 1,384㎡について本調査（第 2 次調査）を実施し、残りの 1,000㎡については平成 20 年（2008）に実施（第 3 次調査）することとなった。

事業主体である新潟市は平成 19 年 8 月 21 日付東土木第 670 号にて文化財保護法第 94 条第 1 項に係る通知を県教委宛に行い、また同日付東土木第 671 号にて市教委宛に調査の依頼を行った。このことを受け市教委は平成 19 年 9 月 27 日から 11 月 27 日かけて本調査（第 2 次調査）を実施した。

平成 20 年は未調査部分 1,000㎡について本調査を実施することとなっており、新潟市は平成 20 年 6 月 4 日付新東土建第 155 号にて県教委宛に通知し、また同日付新東土建第 156 号にて市教委宛に調査依頼を行った。市教委は平成 20 年 6 月 30 日から 8 月 27 日かけて本調査（第 3 次調査）を実施した。

## 第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

### 第1節 遺跡の位置と地理的環境（第1図、図版1・2、写真図版1）

新潟市は信濃川と阿賀野川の運ぶ土砂により形成された越後平野にあり、西に角田山塊、南に新津丘陵が控える。手代山北遺跡の所在する地域は、信濃川・阿賀野川・小阿賀野川に囲まれた低地帯で、江戸時代には横越島、近年においては亀田郷と呼ばれている。亀田郷の地形は北東から南西にかけて海岸線に並行して走る数列の砂丘と、自然堤防などの微高地、砂丘間の後背湿地、鳥屋野潟などの潟湖からなっている。

砂丘列は内陸側から新砂丘Ⅰ・新砂丘Ⅱ・新砂丘Ⅲと3群に大別され、さらに内陸側からそれぞれに枝番が付けられている。この中でも亀田地域をのせた亀田砂丘は、現在の海岸線からおよそ10kmと最も内陸に位置する新砂丘Ⅰに相当する。新砂丘Ⅰ上に立地する<sup>ささやままえ</sup>笹山前遺跡（江南区蔵岡）、<sup>やま</sup>山家遺跡（同区駒込）、<sup>すなくずれ</sup>砂崩遺跡（同区砂崩）、<sup>じょうやま</sup>亀田城山A遺跡（同区城山）から縄文時代前期の土器が出土していることから、新砂丘Ⅰは縄文時代前期（約6,000年前）には形成されていたことが分かる。亀田砂丘は西に向かって低くなっていき、江南区茨曾根や同区茅野山以西では沖積平野に埋没していく。

本遺跡は亀田砂丘以西の平野部に位置する。この地域は昭和25年（1950）頃に亀田郷土地改良区が作成した耕地整理前現形図（図版2）や米軍によって撮影された空中写真（写真図版1）を見ると、遺跡の東を流れる河川（現亀田排水路）左岸隣接地は河川に沿うように水田として利用されているようである。この水田のさらに西側では流路の形状と符合するように畑地が広がる。この畑地部分は周囲より標高が高くなっていることから、この旧河川の自然堤防として発達した地形であると考えられる。手代山北遺跡はこの自然堤防上に立地する。

亀田郷は広大な水田が広がる地域である。これは昭和23年（1948）の栗ノ木排水機場稼働に象徴されるように排水対策が進められた結果、乾田化が進み、現在のような景観になったのである。しかしこのような治水対策が行われる以前は、自然排水が困難な水害常習地帯であり、亀田郷のおよそ70%が湛水田であった。遺跡が営まれた時代もこのような環境であったことが想像され、砂丘や自然堤防は貴重な微高地として利用されたのであろう。手代山北遺跡周辺には<sup>ひみず</sup>日水遺跡〔今井<sup>ほか</sup>2007〕、<sup>うしみち</sup>牛道遺跡〔土橋1999〕、<sup>かわねやちぼしよ</sup>川根谷地墓所遺跡〔江口2001〕など自然堤防上に立地する古代の遺跡が複数所在する（第2図、図版3）。

### 第2節 周辺の遺跡（第2図、図版3）

手代山北遺跡周辺の遺跡は、砂丘上の遺跡、自然堤防上等の低地の遺跡に分かれる。時代別に見ると、縄文・弥生の遺跡は砂丘上に分布し、古墳時代以降になると砂丘上のほか自然堤防上にも遺跡の分布が見られるようになる。以下、亀田地域周辺を中心に時代ごとに概観する。

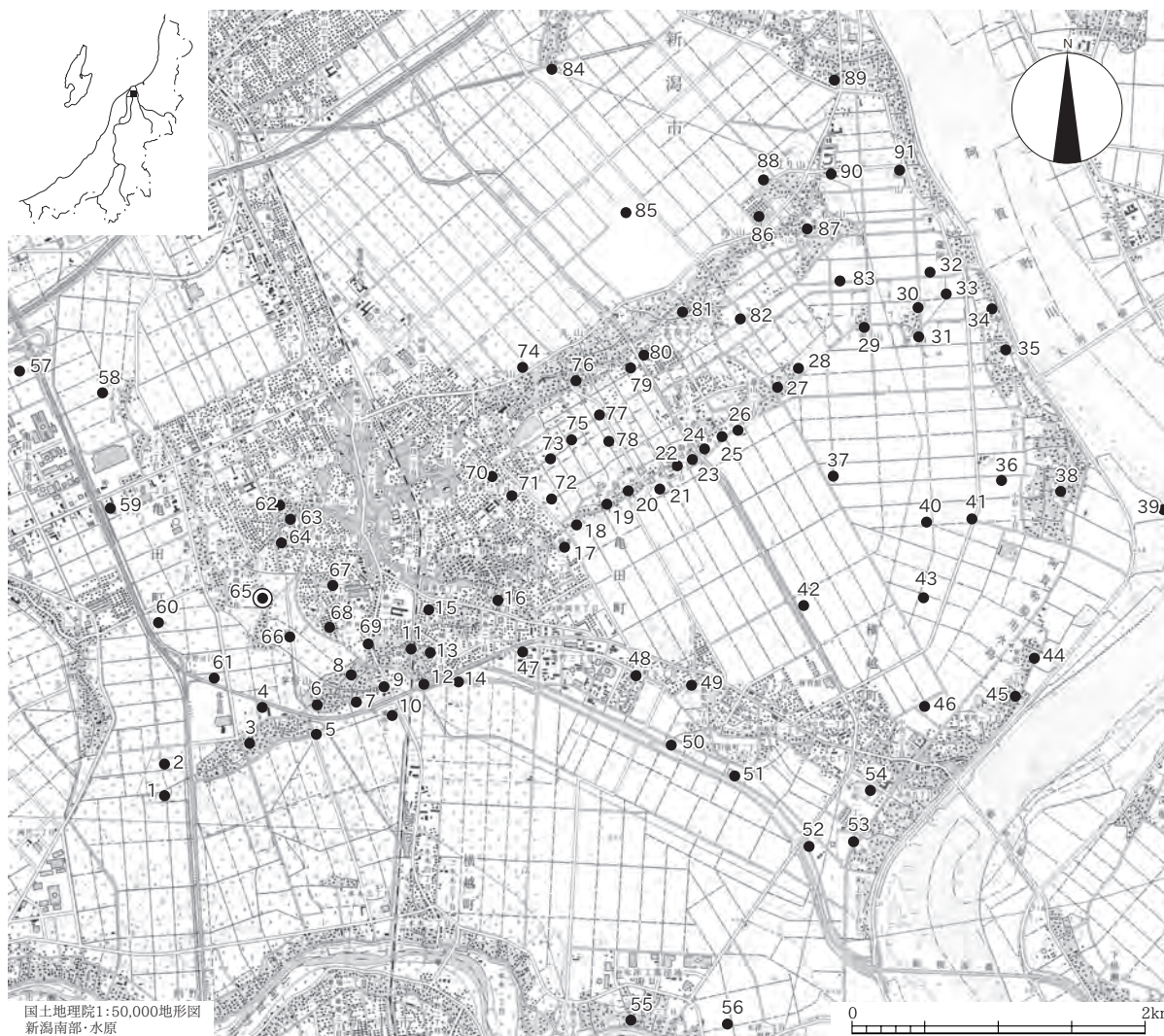
#### A 砂丘上の遺跡

縄文時代 前期には亀田郷最古の縄文前期前葉の土器が出土した<sup>なかも</sup>笹山前遺跡のほか、亀田城山A遺跡、山家遺跡でも前期の土器が出土している。中期に属する遺跡としては<sup>なかも</sup>砂崩遺跡と<sup>なかも</sup>中山遺跡〔酒井・坂井<sup>ほか</sup>1987〕があげられる。両遺跡とも北陸地方と東北地方それぞれの特徴をもつ土器が出土しており当時の人々が交わる中心となる集落の一つであると考えられている。後期及び晩期の遺跡は少ないが、<sup>ひみずみなみ</sup>日水南遺跡、<sup>まえごう</sup>前郷遺跡で後期・晩期を含む遺物が出土している。





第1図 手代山北遺跡周辺地形分類図



No.	名称	時代	No.	名称	時代	No.	名称	時代
1	西前郷遺跡	縄文後期・奈良・平安	32	中山遺跡	縄文中期・奈良・平安	63	川西遺跡	平安・中世
2	早通前遺跡	平安	33	城山遺跡	縄文・古墳・平安・中世	64	狐山遺跡	奈良・平安
3	養海山遺跡	縄文・弥生・古墳・平安	34	居附B遺跡	平安	65	手代山北遺跡	奈良・平安・中世
4	大蔵遺跡	古墳	35	居附C遺跡	平安	66	手代山遺跡	中世
5	八幡前遺跡	平安	36	居附A遺跡	平安・中世	67	貝塚遺跡	奈良・平安
6	武左衛門裏遺跡	古墳	37	江尻遺跡	平安	68	中の山遺跡	奈良・平安・中世
7	日水前遺跡	縄文・弥生・平安	38	松韻寺遺跡	平安	69	荒木前遺跡	中世
8	日水遺跡	奈良・平安	39	小杉中洲遺跡	古墳	70	袋津向山遺跡	縄文
9	日水南遺跡	縄文後期・奈良・平安・中世	40	上田遺跡	縄文晩期・奈良・平安	71	塚ノ山遺跡	平安・近世
10	城所道下遺跡	平安	41	山のハサバ遺跡	平安	72	三條岡遺跡	奈良・平安・中世
11	亀田城山B遺跡	中世	42	新田郷遺跡	奈良・平安	73	前山遺跡	奈良・平安
12	亀田城山A遺跡	縄文中期・弥生中期・奈良・平安	43	宮尻郷遺跡	奈良・平安	74	北山遺跡	平安
13	齊助山遺跡	縄文・弥生・奈良・平安	44	下郷遺跡	平安	75	金塚山遺跡	縄文・奈良・平安
14	牛道遺跡	平安	45	下郷経塚	近世	76	大道外遺跡	平安
15	三王山遺跡	古墳・平安・中世	46	曾我墓跡	平安	77	彦七山遺跡	奈良・平安
16	茨島遺跡	平安	47	岡田遺跡	平安	78	浦ノ山遺跡	平安
17	砂岡遺跡	平安	48	上沼遺跡	奈良・平安	79	清水が丘遺跡	平安
18	砂崩上ノ山遺跡	奈良・平安	49	川根谷内遺跡	平安	80	丸山遺跡	平安
19	砂崩前郷遺跡	縄文・平安・江戸	50	川根谷内墓所遺跡	平安・中世	81	茗荷谷墓地遺跡	平安
20	砂崩遺跡	縄文中期・奈良・平安	51	上郷C遺跡	平安	82	茗荷谷遺跡	縄文中期・平安・中世
21	迎山遺跡	縄文中期・晩期・奈良・平安	52	上郷遺跡	古墳・平安	83	松山向山遺跡	平安
22	前郷遺跡	縄文中期・平安・近世	53	上郷B遺跡	奈良・平安	84	西野遺跡	平安
23	山ノ家遺跡	縄文前期・中期・弥生・奈良	54	横越館跡	中世	85	東岡遺跡	縄文・弥生・古墳
24	駒込居浦郷遺跡	奈良・平安	55	円通寺石仏	中世	86	小丸山遺跡	縄文中期・晩期・弥生中期・後期・奈良・平安
25	駒込墓所遺跡	奈良・平安	56	天王杉遺跡	平安	87	松山遺跡	縄文・中世
26	駒込小丸山遺跡	縄文・弥生・奈良・平安	57	駒首湯遺跡	平安	88	直り山B遺跡	平安
27	上の山遺跡	弥生中期・平安	58	鶴ノ子遺跡	平安	89	直り山A遺跡	平安
28	藤山遺跡	平安・中世	59	下西遺跡	古墳	90	大淵遺跡	平安・中世
29	平山遺跡	平安	60	泥濁遺跡	平安・中世	91	細山石仏	中世
30	神明社裏遺跡	平安	61	西郷遺跡	弥生			
31	笹山前遺跡	縄文前期～晩期・弥生後期・古墳・平安	62	市助裏遺跡	平安・中世			

第2図 手代山北遺跡周辺の遺跡分布図



弥生時代 養海山遺跡<sup>ようかいざん</sup>では縄文時代晩期から弥生時代中期にかけての土器・石器が地下3 mから多く出土している。前郷遺跡では北陸地方の土器と東北地方のものに似た土器が出土している〔新潟市2007〕。また日水南遺跡、山ノ家遺跡でも土器が出土している。

古墳時代 新砂丘I上に立地する城山遺跡、武左衛門裏遺跡<sup>ぶざえもんうら</sup>で古墳時代の土器が出土している。

奈良・平安時代 小丸山遺跡は昭和61年(1986)に住宅地造成に伴い約5,000㎡について発掘調査が実施された。遺構は平安時代(9世紀後半～10世紀前半)頃を中心とした掘立柱建物・井戸・畝状遺構が発見された。遺物は100点を超える墨書土器や緑釉陶器が出土している。これらのことから富裕層の居宅域と想定されている〔小池・本間1995〕。

## B 自然堤防上の遺跡

古墳時代 前期では上郷遺跡<sup>かみごう</sup>、後期では下西遺跡<sup>しもにし</sup>で土器が見つかっている。

奈良・平安時代 日水遺跡は平成17年に土地区画整理事業に伴い約2,416㎡について発掘調査が実施された。亀田砂丘の内陸側に形成された沖積地の自然堤防上に立地し、平安時代(9世紀後半)の掘立柱建物、住居と推測される竪穴遺構が発見された。水田遺構は検出されなかったものの大量のイネ科植物の珪酸体が遺構内から検出され、また籾痕の付いた土器が出土したことから水田耕作を行っていた集落と推測されている〔今井<sup>ほか</sup>2007〕。荒木前遺跡<sup>あらかまへ</sup>は昭和63年(1988)と平成6年(1994)に宅地造成事業に伴い1次・2次合わせて約2,400㎡について発掘調査が実施された。遺構は平安時代の掘立柱建物・井戸・土坑などが発見された。調査面積に比し井戸が多く検出されたことが特徴である〔渡邊1991・川上1996〕。中の山遺跡は昭和56年(1981)に宅地造成事業に伴い約4,100㎡について発掘調査が実施された。平安時代(9～10世紀頃)の遺構は住居跡・小形竪穴・井戸が発見されている〔川上<sup>ほか</sup>1982〕。川根谷地墓所遺跡は平成5年(1993)から平成7年(1995)にかけて道路建設事業に伴い発掘調査が実施された。遺構は平安時代(9世紀後半～10世紀前半)の井戸・土坑・畑の畝とみられる多数の溝状遺構が発見された。遺物は須恵器・土師器が主体を占め、土師質の手づくね土器、砥石などが少量出土している。これらの遺跡は手代山北遺跡と同時期と考えられ、距離も近いことからその性格は特に注目される。

中世 前述の荒木前遺跡では井戸・掘立柱建物・溝・畝状遺構が発見された。出土遺物の年代は13～16世紀で、壺・甕など貯蔵具には珠洲焼・越前焼が最も多く出土している。天目茶碗や貿易陶磁も出土している。前述の中の山遺跡では溝・井戸・火床遺構が発見された。出土遺物から14～15世紀に属すると推測される。特に1号溝は人工の水路と考えられている。この溝の下流につながる排水路と考えられる溝からは9世紀から14世紀の遺物が出土しており、長期にわたって運河的役割を果たしていたとされている。荒木前遺跡と中の山遺跡に加え貝塚遺跡<sup>かいづか</sup>はほぼ同時期であり、隣接していることから一つの遺跡であるという考えも出されている〔川上1996〕。中世の荒木前遺跡・中の山遺跡・貝塚遺跡は在地領主層や諸商人など様々な人が居住した大きな集落の一角と推測されている。『温古の栞』によるとこれらの遺跡を含む一帯には荒木氏の城館跡が存在していた可能性が高いと推測されている〔温古談話会1892〕。

## C 低地の遺跡

弥生時代 西郷遺跡<sup>にしごう</sup>は平成18年から平成19年かけて道路建設事業に伴い4,450㎡について発掘調査が実施された。地下約2.5 mから縄文時代晩期～弥生時代前・中期の土器・石器・炭化米などが出土している〔土橋2007〕。

古墳時代 古墳時代前期の東囿遺跡<sup>ひがしかい</sup>は平成12年(2000)に卸売市場建設事業に伴い8,875㎡について発掘

調査が実施され、竪穴住居・掘立柱建物・井戸・土坑などが発見された。水田跡は発見されなかったが、遺構内から大量の炭化米が検出されたことから水田耕作を行っていた集落と推測される〔朝岡 2003〕。

奈良・平安時代 牛遺跡は平成5年から平成7年にかけて道路建設事業に伴い6,800㎡について発掘調査が実施された。平安時代（9世紀末～10世紀）の畝状遺構・井戸・溝が発見された。建物跡は無かったものの、墨書土器の文字の分布が遺構間接合の範囲と一致するなど、集落内祭祀については興味深い結果が出ている〔土橋 1999〕。

中世 <sup>さんのうやま</sup>三王山遺跡は昭和59年（1979）に宅地造成事業に伴い〔酒井 1980〕、また平成19年には新潟市立亀田中学校の改築工事に伴い発掘調査が実施された。砂丘南斜面に堆積した沖積層上に立地する。遺構は井戸・土坑・溝などが発見された。出土遺物から古代と中世に亘って断続的に営まれた遺跡であると考えられている〔新潟市埋蔵文化財センター 2008〕。

### 第3節 歴史的環境

7世紀末、それまで越国として一国であった北陸地方は、越前・越中・越後のに三国に分割された。この時点での越後国の領域は阿賀野川以北の沼垂郡と岩船郡と出羽を含む地域で北の境界は定まっていなかった。手代山北遺跡のある亀田地域は、蒲原郡に所属すると考えられているが、この段階では越後国には含まれていなかった。その後、大宝2年（702）に越中国より、頸城・古志・魚沼・蒲原の4郡が越後国に編入され、越後国の南の境界が確定した。さらに和銅元年（708）に越後国として出羽郡が新設され、合わせて7郡となった。さらに4年後の和銅5年（712）に出羽国が設置されるに伴い越後国から出羽郡が分離され、6郡となり北の境界が確定した〔小林<sup>ほか</sup> 1995、神田 2003〕。

中世の亀田地域については、史料が無いため詳細が不明である。しかし、明治20年代に刊行された『温故之栞』には「金津荘城所手代山に古城跡あり、孤立せし小山の頂上凡二千坪平坦にして井壺空濠の痕幽に見ゆ、元享年中(1321～1323)国の守護職北条家に於いて蒲原沖日水手代山に柵を構ふと古書に見ゆるは此処なるべし、近辺に日水の地名もあり永禄年中（1558～1569）より上杉家の一将荒木五郎左衛門為久の居城とす」との記述がある。現在、城所や手代山には古城跡らしきものは見当たらないが、城所には「荒木浦」「荒木前」、手代山には「内荒木」「外荒木」といった字があること、さらに前節で述べたように荒木前遺跡では13～16世紀頃の在地領主層の居住域を想定させる遺物が出土していることから、中世にこの地域に在地領主層の拠点があったことが推測される。

近世になりようやく「手代山」周辺も様子が分かってくる。この地の草分けは清水甚兵衛といわれている。清水家伝によれば清水家はもと越前朝倉氏の家臣であったが、戦にやぶれて落ちのびて茅野山に至り、茅野山の草分け遠山家で一時落ち着き、その後、手代山に移ってから財を積んで茅野山・日水・手代山の耕地をほとんど支配する地主となった〔小村 1959〕。元禄年間（1688～1704）の作成と推定される『横越島絵図』（新潟市立図書館所蔵）には幕府領として「茅野山村」、「鶴ノ子村」、「日水村」の名とともに「手代山村」の名も記されている。一方、寛永16年（1639）作の『横越島絵図』（青木正昭氏所蔵）には欠損部があるものの「茅野山新田」、「ひみず」の名はあるが、「手代山」は記入されていない。これら二つの『横越島絵図』により手代山村の開発は17世紀後半頃ではないかと推測される。

明治時代、廃藩置県後は手代山村と茅野山村が合併し茅野山村となり、さらに明治22年（1899）には城所村を加えて茅野城村に、明治34年（1901）には早通村と合併し、早通村となった。大正14年（1925）に早通村は亀田町と合併した。その亀田町も平成17年には周辺13市町村とともに新潟市と合併して現在に至る〔亀田町史編さん委員会 1988、南<sup>ほか</sup> 2003〕。

### 第三章 調査の概要

#### 第1節 試掘・確認調査

市道亀田南線建設事業に伴う試掘・確認調査は平成17・19年度に実施した。平成17年度は事業予定地が手代山遺跡に隣接していることから確認調査を実施した。調査面積は411㎡である。平成19年度は7月10・11日の2日間、試掘調査として同じく道路予定地内の畑地に14か所のトレンチを設定し調査を行った（第1次調査）。試掘調査はバックホウで表土から徐々に掘り下げ、人力により精査を行い、遺構・遺物の有無、土層堆積状況を記録した。6・7・8・9・10・11・14の各トレンチで遺構が確認され、6・7トレンチの溝からは古代の須恵器が各1点出土し、さらに7トレンチでは時期不明の陶器が2点出土した。攪乱により土層が荒ら



第3図 手代山北遺跡試掘調査（第1次調査）位置図

されているところも多かった（第3図）。

遺構から古代の遺物が出土したことなどから、当該部分が未周知の遺跡であることが判明したため、事業実施前に本調査が必要であると判断された。

## 第2節 発掘調査

### A 調査方法

#### 1) 現況

調査区は市道293号線により南北に分断されている。南側が第2次調査区、北側が第3次調査区である。

この市道を挟んで宅地となっており、その裏にはそれぞれ梨・梅などの果樹園が広がっている。調査区北端部は一部水田として利用されていた。標高は1.2m前後である。遺跡のすぐ南西にある現手代山集落には手代山遺跡が所在し、標高2.1～2.3mで当該調査地周辺よりも1m前後高くなっている。

#### 2) グリッドの設定

グリッド網は国家座標に従い、手代山北遺跡周知範囲内を網羅できるように設定した。グリッドの基点をX座標207010.000、Y座標452850.000（世界測地系、平面直角座標8系）、緯度37°45′12″10532、経度143°38′14″83913を1A杭とした。基点に対し10mの方眼を組み、これを大グリッドとした。大グリッドの名称は北西隅の杭を基点として南北方向をアラビア数字で北から南へ1・2・3…とし、東西方向をアルファベットでA・B・C…とし、この組み合わせによって表示した。大グリッドをさらに2m方眼に区分して、北西隅から南東隅に向かって1から25の小グリッドに分割し、「5F15」のように呼称した。基準杭の打設は測量業者に委託した。

発掘調査区の2点の座標は次の通りである。5FはX座標206970.000、Y座標52900.000、杭頭高0.446m、12IはX座標206900.000、Y座標52920.000、杭頭高0.411mである。12I杭で座標北は真北に対し22分10秒東偏し、磁北は真北に対し7度46分西偏する。

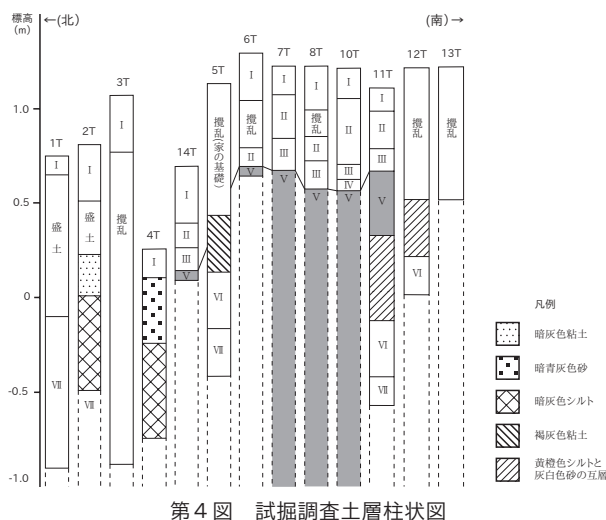
#### 3) 調査方法

調査方法は第2次調査（平成19年度）と第3次調査（平成20年度）ともに同じ方法で実施した。詳細は以下の通りである。

①表土剥ぎ 第1次調査によって遺物の出土が少量であると予想されたことから、遺物包含層（IV層）上面まで、遺物の出土に注意しながら重機（バックホウ）により除去することにしたが、遺物量が非常に少なかったことと遺物包含層がほとんど確認できなかったので遺構確認面まで慎重に掘削した。掘削残土は改良し工事の際、再利用するためダンプトラックで土質改良センターへ搬出した。調査区の境界は安全面を考慮して法面に一分の勾配を付けた。また、湛水防止のために表土剥ぎと平行して調査区の周囲に土側溝を掘り、2時のポンプを設置して強制排水を行った。土側溝は幅20cm、深さ20cm程度で断面形V字の溝を人力で掘削した。

②包含層掘削・遺構検出・発掘 前述のように包含層はほとんど存在しなかった。重機で掘削後、人力で精査を行い、包含層の掘削・遺構の検出にあたった。排土はベルトコンベアにより調査区外へ仮置きし、まとめてダンプトラックで土質改良センターへ搬出した。

③実測・写真 実測図は断面図を1/20で作成した。平面図や各種測量は測量業者に委託してトータルステ



第4図 試掘調査土層柱状図



ーションを用いて作成し、併せて俯瞰写真を撮影した。写真撮影は35mm判・6×7判のカメラを用い、白黒フィルム・カラーポジフィルムを適宜併用した。

④遺物取り上げ 遺構外出土遺物は小グリッド単位で取り上げた。遺構出土遺物は遺構単位・層位ごとに一括で取り上げた。

## B 調査経過

### 1) 第2次調査

平成19年9月24日から諸準備を開始し、9月27日から10月12日まで重機により表土掘削を行った。表土掘削と平行して作業員15名で土側溝掘削、法面仕上げ、遺構精査を行った。10月3日から測量業者による杭打ちを行なった。10月15日にベルトコンベアを設置し、遺構調査を本格的に開始した。10月18日に遺構検出を終え、掘削作業を開始した。11月14日にラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を行った。11月17日に現地説明会を実施し、23名の市民に参加いただいた。その後、攪乱の掘削と下層の確認調査を行い、下層が存在しないことが判明したために11月22日に機材撤収をし、発掘調査を終了した。最終的な発掘調査面積は上端1384.1㎡、下端1304.7㎡である。発掘調査終了後、遺物の洗浄・注記、井戸内覆土の洗浄を現場プレハブにて実施し、12月21日に現地整理作業を終了した。平成20年1月～3月13日に遺物の接合・分類・集計作業、図面類の整理を実施した。

### 2) 第3次調査

平成20年6月23日から諸準備を開始し、6月24日から7月1日まで重機により表土掘削を行った。表土掘削と平行して作業員10名で土側溝掘削、法面仕上げ、遺構精査を行った。6月27日から測量業者による杭打ちを行った。7月2日にベルトコンベアを設置し、遺構調査を本格的に開始した。7月9日に遺構検出を終え、掘削作業を開始した。7月14日に市立南浜中学校3学年3名が職場体験で発掘作業・整理作業体験を行った。8月12日には遺構調査をほぼ終了し、攪乱部のトレンチ掘削などを行いつつ現地説明会準備を行い8月23日に現地説明会を実施し、76名の市民に参加いただいた。8月26日にラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を行った。8月29日に機材撤収を含め全ての調査を終了した。最終的な発掘調査面積は上端896.8㎡、下端851.9㎡である。第2・3次調査の発掘総面積は上端2280.9㎡、下端2156.6㎡である。

## C 調査体制

### 【平成19年度 第2次調査】

調査主体	新潟市教育委員会（教育長 佐藤満夫）
所管課	新潟市歴史文化課（課長 倉地一則 課長補佐 山田一雄 埋蔵文化財係長 渡邊朋和）
事務局	新潟市埋蔵文化財センター（所長 山田光行）
調査担当	新潟市埋蔵文化財センター 副主査 朝岡政康
調査員	丹下昌之（国際航業㈱）
整理補助員	岩寄真由美・清野 環・奥村初枝・中野佳子・小池真理子（国際航業㈱）

### 【平成20年度 第3次調査】

調査主体	新潟市教育委員会（教育長 佐藤満夫）
所管課	新潟市歴史文化課（課長 倉地一則 課長補佐 山田一雄 埋蔵文化財係長 渡邊朋和）
事務局	新潟市埋蔵文化財センター（所長 山田光行）
調査担当	新潟市埋蔵文化財センター 主査 朝岡政康
調査員	丹下昌之（国際文化財㈱）
整理補助員	渡辺妃登美・中野佳子・小池真理子（国際文化財㈱）

## 第3節 整理作業

### A 整理方法

#### 1) 遺物

遺物量は2か年分合わせてコンテナ（内径54.5×33.6×10.0cm）にして36箱である。古代の土器が中心であるが、容器などの木製品や石製品など各種に及ぶ遺物がある。遺物の整理作業は次の手順で行った。①洗浄。②注記。③グリッド別、種別の重量計測。④遺構出土遺物の器種ごとの重量・個体数計測。⑤接合。⑥報告書掲載遺物の抽出。⑦実測図、観察表作成。⑧トレース図作成。⑨版下作成。

実測図は調査員・整理作業員が原寸で作成し、トレース図と版下作成はデジタルトレースで行った。

#### 2) 遺構

遺構断面図を含め測量業務一式は、第2次調査、第3次調査ともに業者に委託した。校正は、業者が観測したデータを基にパソコン上で作成した1/20の遺構平面図と業者が現場実測した1/20遺構断面図原図を使用した。校正後トレース原図1/20、1/40、1/200、1/1000をデータで作成し、報告書中の各図版はこれらを適宜利用してデジタル編集で作成した。

### B 整理経過

発掘調査作業中に、出土遺物の水洗・注記を行った。調査終了後出土遺物の計測・接合・実測と写真・図面整理を行い、併せて測量業者に委託した遺構平面図の校正作業を行った。遺構平面図は測量業者作成のデジタルデータを基に加工・編集した。断面図は測量業者実測原図をデジタルトレースした。この間調査員は調査担当の指示の下、原稿執筆、遺物写真の撮影、図版のレイアウト、報告書の編集にあたった。第2次調査終了後の整理体制については、第2節の調査体制に併せて記した。

### C 整理体制

【平成20年度】

調査主体	新潟市教育委員会（教育長 佐藤満夫）
所管課	新潟市歴史文化課（課長 倉地一則 課長補佐 山田一雄 埋蔵文化財係長 渡邊朋和）
事務局	新潟市埋蔵文化財センター（所長 山田光行）
調査担当	新潟市埋蔵文化財センター 主査 朝岡政康
調査員	丹下昌之（国際文化財㈱）
整理補助員	渡辺妃登美・小池真理子（国際文化財㈱）

## 第Ⅳ章 遺 跡

### 第1節 概 要

手代山北遺跡は亀田郷内の沖積地に位置し、前述したように自然堤防上に立地していると考えられる。全体の地形は中央部、第3次調査区南端と第2次調査区北端が標高0.6～0.7m前後と高く、それぞれ第2次調査区では南に向かって、第3次調査区では北に向かって緩やかに低くなっていく。標高は第3次調査区北端で約-0.3m、第2次調査区南端で約0.5mとなっていることから調査区全体では北に向かって低くなっていく。

発見された遺構は2か年度の調査を合わせて掘立柱建物1棟、柵列2列、井戸4基、土坑79基、溝33条・性格不明遺構11基、ピット315基である。遺物量は古代の須恵器・土師器の他、中世では珠洲焼・貿易陶磁が少量出土し、近世の陶磁器類が多く出土している。また石製品・土製品・鉄製品・鍛冶関連遺物・木製品が少量存在する。出土量はコンテナ（内径54.5×33.6×10.0cm）で36箱である。以下、調査区の北側から南側に向かって調査区ごとに概要を記す。

#### A 第3次調査区

地形は南が高く、北東に向かって低くなっていく。包含層は調査区全域で耕作など後世の攪乱により削平あるいは乱されており、安定して確認ができなかった。しかし地形の低くなった2E・3Eグリッドでは2層の包含層が残っていた（Ⅲ・Ⅳ層）。Ⅲ層は平安時代～中世の遺物をわずかに含む。遺構精査時に中世の遺物も出土していることから、平安時代～中世の包含層と推測される。Ⅳ層は奈良時代～平安時代の遺物が出土していることから該期の包含層と推測される。

発見された遺構は、土坑46基、溝11条、性格不明遺構3基、ピット82基である。遺構出土遺物および包含層出土遺物が少ないため、遺構の時代を特定できるものは少ない。遺構は全体的には4列より北に多くみられるが、古代に属すると推測される遺構はこれより南側に多い。北側には溝を中心に近世以降の遺構が多い。

遺物量はコンテナで、20箱である。出土遺物は奈良時代の須恵器・土師器、平安時代前期の須恵器・土師器のほか、近世の遺物も多く出土している。他に石製品・土製品・鉄製品・鍛冶関連遺物・木製品が少量存在する。

#### B 第2次調査区

地形は北が高く、南に向かって緩やかに傾斜しており、11列～12列にかけて削平されている。包含層は調査区全域で耕作など後世の攪乱により、調査区の一部でしか確認できなかった。

確認された遺構は掘立柱建物1棟、柵列2列、井戸4基、土坑33基、溝22条、性格不明遺構8基、ピット233基である。古代に属する遺構が多いが、中世・近世と推測される遺構も一定数存在する。古代に属すると推測した遺構は9Hグリッドを中心にした場所に集中している。この区域は周囲より10cm程度標高が高くなっている。11列より南の一段低い部分には古代の遺構もみられるが、中世以降と推測した遺構の方が多い。

遺物量はコンテナで、16箱である。遺構内出土遺物は平安時代（9世紀後半が中心）の須恵器・土師器が多いが、一部の遺構や攪乱層から中世・近世の遺物も一定量出土している。また、石製品・鉄製品・鍛冶関連遺物・木製品や井戸の覆土から検出された種実が少量存在する。

## 第2節 層序

基本層序を図版13に示す。大きくI～VII層の7層に分けられ、V層はa・bの2層に細分される。I層は表土と果樹園など耕作土それに伴う攪乱土層である。II層は客土。III層は平安時代～中世の包含層。IV層は奈良時代～平安時代の包含層。III・IV層の面的な広がり無く、第3次調査区の一部2E・3Eグリッドで確認されたのみである。この付近はもっとも地形が低くなっているところであり、包含層が深い場所に堆積していたために残存したものと考えられる(写真図版4)。Vb層は本調査時の遺構確認面であるが、基本土層では上層のVa層から掘り込む遺構が若干確認されている。本来はこのVa層上面が遺構確認面と考えられるが、実際の調査時点においてはVa層は植物根跡による上層土の混入が著しいことや遺物も少量出土することから掘り下げた。第2次調査区はIII・IV層が残っている場所がほとんどなく、またVa層上部まで削平が及んでいる場所が広がったこともあり、遺構が明確に見える層まで掘り下げた。

またVII層は基本土層では確認できていないが、第2次調査区のSK56やSE31の下層や、同じく第2次調査区中央部の試験盛土による攪乱部分で確認できた層である。

日水遺跡の調査結果と比較すると、日水遺跡VI層(古代の遺構確認面)は標高は1.3～1.8mであることに對し、手代山北遺跡V層は約1.2～1.5mとやや低くなっている。

- I層 オリーブ褐色砂質シルト(2.5Y4/4) 現在の表土。果樹園などの耕作による攪乱土層も含む。
- II層 黒褐色シルト(2.5Y3/2) 近世以降の客土層。
- III層 黒色シルト(10YR2/1) 遺物包含層(平安時代～中世)。第3次調査区2Eグリッド付近のみ認められる。
- IV層 褐灰色シルト(10YR4/1) 遺物包含層(奈良時代～平安時代)。第3次調査区2Eグリッド付近のみ認められる。
- Va層 黄色シルト(2.5Y8/8)に黄灰色シルト(2.5Y4/1)が混じる。漸移層。
- Vb層 黄色シルト(2.5Y8/8) 遺構確認面。Va層より黄灰色シルトの混入度合いが低い。
- VI層 黄灰色シルト(5Y6/1)
- VII層 灰白色粘質シルト(7.5Y7/2)

## 第3節 遺構

遺構番号は、調査の進捗に応じて付したため、第3次調査区では北端から南へ向かって、第2次調査区では逆に南端から北に向かってそれぞれ遺構の種類に関係なく通し番号とした。それぞれ遺構精査中に新たに発見されたものもあるため前後する場合もある。またピットの番号は第3次調査終了後に改めて第2次調査区南端から第3次調査区北端に向かって付した。個別の遺構説明は調査年次ごと(第3次→第2次)にそれぞれ遺構の属する時代別に掘立柱建物、柵列、井戸、土坑、溝、性格不明遺構、ピットの順とし、同じ遺構種別内では北から南へ順に記す。

詳しい遺構の計測値などは別表1に記した。遺構の形態分類は平面形を円形・楕円形・不整形・方形・長方形の5種類に、断面形を皿形・半円形・台形状・U字状の4種類に分類した。

遺構の所属時期は遺構確認面の上面がかなり削平されているところもあり、古代に属するものばかりではなく、同じ確認面であってもより新しい時期の遺構がふくまれている。そのため遺構の時期は遺物が出土している場合は出土遺物によって、また出土していない場合は遺物の出土した遺構との切り合い関係・覆土の様相・配置状況により時期を推測した。遺構の覆土は土色・質から大きく次の4種類に分けられる。a類:黒～オリーブ黒



色の粘質シルトで、粘性があり、しまりは強くない。炭化物粒を含むことが多い。b類：黒～黒褐色のシルトあるいは砂質シルトで粘性はあまり強くない、しまりがある。c類：灰色～黄灰色シルト、または褐灰色シルトでしまり・粘性ともにある。d類：灰色あるいは灰褐色で地山土の混入することが多い。これらの覆土と遺物の出土した遺構との対応関係から、a類は奈良時代の遺構、b類は平安時代の遺構、c類は平安時代～中世の遺構、d類は近世以降の遺構に相当すると考えた。

第2・3次調査を通じて調査区の標高のやや高い部分（第3次調査区：4 D・E、5 E・Fグリッド。第2次調査：9・10 G・Hグリッド）の遺構は深度が深く、遺物の出土した遺構が多い。一方、低い部分（第3次調査：1・2 C・Dグリッド。第2次調査：12列以南区）の遺構は浅く、遺物が出土しない場合が多い。このことは全体に包含層のみならず遺構確認面上面まで攪乱がおよんでいるためと考えられる。

## A 第3次調査区

### 1) 奈良時代の遺構

奈良時代の遺構は土坑4基、ピット2基である。遺物の出土した遺構はP314のみである。他は覆土がP314あるいは奈良時代の遺物が出土したIV層と近似している（覆土a類）。遺構数、遺物数共に少なく、詳細な検討は行えなかった。

#### a 土坑（SK）

SK78（図版8・13、写真図版4）

1 C 13・14・18～20に位置する。調査区外へ広がるため全体の形状は不明である。断面形は浅い皿形である。遺物は出土していない。覆土は2層に分かれる。覆土の様相がP314と近似することから奈良時代の遺構と推測する。

SK79（図版8・13、写真図版4）

1 C 20・25、1 D 16・21に位置する。調査区外へ広がるため全体の形状は不明である。断面形は浅い皿形である。遺物は出土していない。覆土は2層に分かれ、色・質はSK78と同様である。覆土a類に相当し、覆土の様相がP314と近似することから奈良時代の遺構と推測する。

SK139（図版8・13、写真図版4）

1 C 20に位置する。北東端を側溝に切られるが平面形は楕円形と推測される。断面形は浅い皿形である。遺物は出土していない。覆土は単層で、SK78・79の1層に近似する。覆土a類に相当することから奈良時代の遺構と推測する。

SK140（図版8・13、写真図版4）

1 C 20・25に位置する。SK139・79に接するが、切り合い関係はない。平面形は不整形、断面形は深さに偏りのある浅い皿形である。遺物は出土していない。覆土は単層で、SK139と近似する。覆土a類に相当することから奈良時代の遺構と推測する。

SK114（図版8・13、写真図版4）

2 E 25、3 E 5、3 F 1に位置する。基本土層IV層上面で確認された。調査区外北方に伸びており平面形は不明、断面形は非常に浅い皿形である。遺物は出土していない。覆土は単層で、SK139・140と近似する。P314の覆土に近似することから奈良時代の遺構と推測する。

#### b ピット（P）

P314（図版8・13）

3 E 5に位置する。平面形は方形、断面形はU字状である。図示していないが奈良時代と思われる土師器の細片が出土している。覆土は単層で、SK139・140・114に近似する。覆土a類に相当することから奈良時代の

遺構と推測する。

P 313 (図版 8・13)

2 E 25、3 E 5 に位置する。平面形は楕円形、断面形はU字状である。遺物は出土していない。覆土は単層で、SK139・140・114 に近似する。覆土 a 類に相当することから奈良時代の遺構と推測する。

## 2) 平安時代の遺構

平安時代の遺構と推測できたのは土坑 26 基、溝 4 条、性格不明遺構 1 基である。遺物が出土した遺構は少なく、所属時期決定には遺構覆土によるところが大きかった。土師器小甕が出土した SK127 や平安時代の土器が出土している遺構の覆土はおおよそ近似しており、それらを覆土 b 類とし、覆土がこの分類に属するものを平安時代の遺構と推測する。

### a 土坑 (SK)

SK85 (図版 8・14)

2 D 8 に位置する。平面形は円形、断面形は皿形である。遺物は出土していない。覆土は単層で、覆土 b 類に相当することから平安時代の遺構と推測する。

SK101 (図版 8・14)

3 D 4・9 に位置する。SD95 に切られており平面形は不明、断面形は浅い皿形である。遺物は出土していない。覆土は単層である。切り合い関係と、覆土 b 類に相当することから平安時代の遺構と推測する。

SK102 (図版 8・14)

3 D 20 に位置する。平面形は楕円形、断面形は浅い皿形である。遺物は出土していない。覆土は単層である。覆土 b 類に相当することから平安時代の遺構と推測する。

SK106 (図版 8・14)

3 E 12 に位置する。SD88 に切られており平面形は不明、断面形は浅い皿形である。遺物は出土していない。覆土は単層である。覆土 b 類に相当することから平安時代の遺構と推測する。

SK107 (図版 8・14)

3 E 12・17 に位置する。平面形は楕円形、断面形は浅い皿形である。遺物は出土していない。覆土は 2 層に分かれる。覆土 b 類に相当することから平安時代の遺構と推測する。

SK108 (図版 8・14)

SK107 と接し、3 E 11・12・16・17 に位置する。平面形は楕円形、断面形は浅い皿形である。遺物は出土していない。覆土は 3 層に分かれる。平面形・断面形・覆土の様相いずれも SK107 と近似する。覆土 b 類に相当することから平安時代の遺構と推測する。

SK111 (図版 8・14)

3 E 18・19・23・24 に位置する。平面形は不整な楕円形、断面形は皿形である。図示していないが、自然礫 1 点が出土した。覆土は 3 層に分かれる。やや大きさは異なるが平面形・断面形・覆土の様相いずれも SK107・108 と非常に良く似ており、ほぼ同時期に存在したと考えられることから平安時代の遺構と推測する。

SK116 (図版 8・14)

3 E 25 に位置する。平面形は長方形、断面形は皿形である。遺物は出土していない。覆土は 2 層に分かれる。覆土 b 類に相当することから平安時代の遺構と推測する。

SK113 (図版 8・14)

3 E 21、4 E 1 に位置する。平面形は楕円形、断面形は皿形である。底面が数か所窪んでいるが、根跡による攪乱である。しっかりと掘り込まれている。遺物は出土していない。覆土は 2 層に分かれる。覆土 b 類に相当することから平安時代の遺構と推測する。

## SK118 (図版8・14)

4 D 9・10・14・15に位置する。SD117に切られる。調査区外へ伸びており、平面形は不明、断面形は皿形である。覆土は単層である。遺物は出土していない。切り合い関係から平安時代の遺構と推測する。

## SK121 (図版8・14)

4 E 16に位置する。平面形は不整形、断面形は台形状である。図示していないが、土師器細片が1点出土した。また底面付近には木片が横位の状態で埋まっていた。木片は腐植が激しく加工されているかどうか判別できなかった。覆土は単層である。出土遺物と覆土b類に相当することから平安時代の遺構と推測する。

## SK125 (図版9・14)

5 E 19・20に位置する。平面形は不整形、断面形は台形状である。覆土は2層に分かれる。1層から須恵器杯蓋(1)と図示していないが、近世陶器が出土した。近世陶器は当該地区の確認面直上層が客土であるため混入したものとする。

## SK126 (図版9・14)

5 E 25に位置する。平面形は円形、断面形は偏ったU字状である。覆土は2層に分かれる。遺物は出土していない。覆土b類に相当することから平安時代の遺構と推測する。

## SK127 (図版9・14、写真図版4)

5 F 9に位置する。平面形は楕円形、断面形は皿形である。覆土は2層に分かれる。1層から土師器小甕(2)が出土した。

## SK128 (図版9・14)

5 F 18・19に位置する。北側をP 262に切られるが、平面形は円形と推測される。断面形は皿形である。覆土は2層に分かれる。1層から図示していないが、土師器細片が出土している。

## SK131 (図版9・14)

5 F 25、6 F 5に位置する。平面形は円形、断面形は皿形である。覆土は単層である。遺物は出土していない。覆土b類に相当することから平安時代の遺構と推測する。

## SK129 (図版9・15、写真図版5)

5 F 15、5 G 11・16に位置する。調査区外へ伸び、南西部をSK130に一部切られる。平面形は長方形と推測される。断面形は皿形で、底面にやや凹凸がある。覆土は単層である。遺物は出土していない。覆土b類に相当することとSK130に切られることから平安時代の遺構と推測する。

## SK130 (図版9・15、写真図版5)

5 F 15・20に位置する。SK129を切る。平面形は楕円形、断面形は皿形である。覆土は3層に分かれる。遺物は出土していない。覆土b類に相当することから平安時代の遺構と推測する。

## SK133 (図版9・15)

5 G 22、6 G 2に位置する。SK134に切られる。調査区外へ伸びる。平面形は長方形と推測される。断面形は浅い皿形である。覆土は2層に分かれる。遺物は出土していない。覆土の様相とSK134に切られることから平安時代の遺構と推測する。

## SK134 (図版9・15)

6 G 2に位置する。SK133・P255を切る。調査区外へ伸びる。平面形は不整形、断面形は浅い皿形である。覆土は2層に分かれる。遺物は出土していない。覆土b類に相当することから平安時代の遺構と推測する。

## SK135 (図版9・15)

6 E 15に位置する。平面形は楕円形、断面形は浅い皿形である。底面にやや凹凸がある。覆土は単層である。遺物は出土していない。覆土の様相から平安時代の遺構と推測する。

## SK144 (図版9・15)

5 G 16・21・22 の調査区東壁際に位置し、調査区外へ伸びる。平面形は円形と推測される。断面形は皿形で、上部を攪乱により削平されている。覆土は単層である。遺物は出土していない。覆土 b 類に相当することから平安時代の遺構と推測する。

SK137 (図版 9・15)

7 F 1 に位置する。遺構の大半が調査区外へ伸びており平面形は不明であるが、方形と推測される。断面形は皿形で、一か所根跡による窪みがある。覆土は単層である。図示していないが土師器細片が出土していることと覆土 b 類に相当することから平安時代の遺構と推測する。

SK138 (図版 9・15)

6 F 21、7 F 1 に位置する。平面形はいびつな楕円形、断面形は台形状である。覆土は単層である。遺物は出土していない。覆土 b 類に相当することから平安時代の遺構と推測する。

#### b 溝 (SD)

SD117 (図版 9・14・15)

4 D、4 E、5 E にかけて位置する。南東-北西を軸に伸び、4 E11 付近で西方向に屈曲し、調査区外へ伸びる。主軸を N -27° -W にとる。南端を SK124 と攪乱により切られる。また SD120 を切る。断面形は皿形で、覆土は単層である。勾配はわずかであるが南が高く北が低くなっている。図示していないが、土師器長甕細片と土師器細片が出土している。

SD120 (図版 9・15)

4 E 11・16・17 に位置する。SD117 と並行するように存在し、SD117 に東半部を切られる。主軸を N -27° -W にとる。断面形は皿形と推測される。覆土は単層である。勾配は SD117 と同じく、わずかであるが南が高く北が低くなっている。遺物は出土していない。切り合い関係と覆土 b 類に相当することから平安時代の遺構と推測する。

#### c 性格不明遺構 (SX)

SX132 (図版 9・15)

5 G 21、6 G 1 に位置する。平面形は不整形、断面形は皿形で、底面にやや凹凸がある。覆土は単層である。遺物は出土していない。覆土 b 類に相当することから平安時代の遺構と推測する。

### 3) 近世以降の遺構

近世以降の遺構と推測できたのは土坑 17 基、溝 8 条、性格不明遺構 2 基である。調査区北端部に多く存在する。第 2 次調査でも少量確認されているが、18 世紀頃の近世陶磁器が多く遺構内外から見つかっていることから、これらの時期のものと考えられる。溝が多く発見された。これらの主軸線は、ほぼ磁北に対し西へ 60 ~ 70 度傾く値に収まることから互いに関連性の高い遺構と推測する。

#### a 土坑 (SK)

SK141 (図版 8)

2 D11・16 に位置する。SD87・88 を切る。平面形は長方形、断面形は台形状である。覆土は単層である。須恵器甕 (4) が出土しているが、切り合い関係から近世以降の遺構と推測する。

SK105 (図版 8・15)

3 E 6・7・11・12 に位置する。SD104 を切る。平面形は楕円形、断面形は台形状である。覆土は 2 層に分かれる。遺物は出土していない。切り合い関係と覆土 d 類に相当することから近世以降の遺構と推測する。

SK119 (図版 8・15)

4 E 11 に位置する。平面形は長方形で角がしっかりしている。断面形は台形状である。覆土は単層である。遺物は出土していない。覆土 d 類に相当することから近世以降の遺構と推測する。

## SK97 (図版8・15)

3 D 3・4に位置する。SD88とSX96を切る。平面形は楕円形、断面形は皿形である。遺物は出土していない。覆土は単層で、切り合い関係から近世以降の遺構と推測する。

## b 溝 (SD)

## SD87 (図版8・15、写真図版5)

2 C、2 D、2 E、3 D、3 E、3 Fにかけて位置する。SD88と並行して存在し、SD88の北側の立ち上がり切る。主軸をN-67°-Wにとる。断面形は皿形である。覆土は3層に分かれる。勾配は北が高く南が低くなっている。遺物の出土層位は全て1層で、須恵器有台杯(5)・無台杯(6~8)・甕(9~12)、土師器無台椀(13)・小甕、近世素焼土器、京焼・肥前磁器、鉄滓、漆器(14)、杓子(15)、桶(16・17)、不明石製品(18)、軽石(19)、泥面子など古代・近世の遺物が多数出土している。特に近世の遺物が多く、時代は17世紀後半から19世紀代のものでみられる。18世紀後半から19世紀にかけてのものも多く、遺構の最終埋没年代も19世紀頃と推測する。遺物量はSD88と比べ非常に多い。これは遺構の埋没の仕方を示しているものと思われる。本遺構はSD88がある程度、自然に埋まった後に掘削され、使用後は一気に人為的に埋められた可能性が高いことを示していると考えられる。したがって出土した遺物も多くが別の場所からもたらされた可能性が高い。

## SD88 (図版8・15、写真図版5)

2 C、2 D、3 D、3 E、3 Fにかけて位置する。SD87と並行して存在し、SD87により北側の立ち上がり切られる。主軸をN-67°-Wにとる。断面形は皿形である。勾配はわずかに北が高く南が低くなっている。覆土は3層に分かれる。遺物は1層に多いが、2層と3層でもわずかに出土している。須恵器横瓶(20)、土師器小甕(21)、肥前磁器、漆器(22)、桶(23)など古代・近世の遺物が出土している。遺物量で比較するとSD87に対して本遺構の遺物量は非常に少ない。これは遺構の埋没の仕方を示しているものと思われる。SD87は自然に埋まったというより人為的に埋められた可能性が強く、SD88は自然に埋まった可能性が高いことを示していると考えられる。遺構の最終埋没年代はSD87をそれほど遡らない時期と推測する。

## SD95 (図版8・14~16)

3 D 3・4・9・10に位置する。SD87・88と並行する。主軸をN-69°-Wにとる。SX96と攪乱に切られ、SK101を切る。断面形は皿形である。覆土は単層である。遺物は出土していない。覆土の様相と主軸方向からSD87・88とほぼ同時期の遺構と推測する。

## SD109 (図版8・16)

3 E 12・13・18・19に位置する。SD95の南東延長線上に位置し、SD87・88と並行する。主軸をN-62°-Wにとる。断面形は台形状である。覆土は3層に分かれる。1層から近世以降と思われる素焼土器細片が出土している。

SD95・104・109は分断されているが、覆土の様相、短軸長さ、主軸方向からみて本来は同一の溝であった可能性が高い。

## SD110 (図版8・16)

3 E 16・17・22・23に位置する。SD87・88と並行するが、細かく蛇行する。主軸をN-61°-Wにとる。断面形は台形状に近い皿形である。覆土は単層である。遺物は出土していない。

## SD115 (図版8・16)

3 E、4 E、4 Fにかけて位置する。SD110の南東延長線上に位置し、SD110より大きく蛇行するがほぼSD87・88と並行する。主軸をN-64°-Wにとる。断面形はSD110と同じく台形状に近い皿形である。覆土は単層である。遺物は出土していない。

SD110と115は分断されているが、覆土の様相、短軸長さ、主軸方向からみて本来は同一の溝であった可能性が高い。さらにSD95・104・109・110・115は主軸の方向からSD87・88とも関連する遺構であった可能



性が高く、ほぼ同時期の遺構と推測する。

c 性格不明遺構 (S X)

SX96 (図版 8・15)

3 D 3・4 に位置する。平面形は楕円形、断面形は皿形である。遺物は出土していない。SD95 を切り、SK97 と攪乱に切られる。覆土は単層で、切り合い関係から近世以降の遺構と推測する。

d その他の遺構

上述した以外のものは覆土の混入物から近・現代のものと考えられる。

## B 第2次調査区

### 1) 平安時代の遺構

平安時代(9世紀頃)の遺構は掘立柱建物1棟、柵列2列、井戸2基、土坑27基、溝12本、その他ピットが多数確認されている。以下概要を述べる。

a 掘立柱建物 (S B)

SB316 (図版 10・16、写真図版 5)

9 G、9 H にかけて位置する。SD39 を切る。主軸を N-15° -W にとる。平面形は東西方向がやや長い、ほぼ正方形で2間×2間である。柱穴間隔は1.3～2.0 mとやや幅があるが、南側の6本の柱穴の間隔は比較的そろっており、1.9 m前後である。攪乱により北辺中央の柱穴は確認できなかったが、総柱の建物と思われる。柱穴はいずれも平面形がほぼ円形で、直径20cm前後、深さ25cm前後である。柱根は確認できなかった。柱穴を構成するP 201 から土師器無台碗の細片が出土していることから、平安時代の遺構と推測する。

b 柵列 (S A)

SA317 (図版 10・16、写真図版 5)

9 H 2・7・12・17・23 に位置する。主軸を N-13° -W にとる。主軸方向はSB316 と一致しない。南北に5つの柱穴が並んで確認された。北からP222・215・211・210・182 である。柱穴は平面形がほぼ円形、直径20cm前後、深さ30～40cmのものである。柱穴の間隔は北側から2.09 m、1.92 m、1.04 m、1.69 mである。柱根は確認できなかった。柱穴間隔は一定せず、中心がほぼ一直線上に並んでいることから柵列と推測した。柵列を構成するP 215 から図示していないが、須恵器無台杯あるいは有台杯の細片が出土していることから、平安時代の遺構と推測する。

SA318 (図版 10・16、写真図版 5)

9 H 7～10 に位置する。主軸は N-85° -E にとる。東西に3つの柱穴が並んで確認された。西からP215・216・219 である。調査区外東方へ伸びる可能性が高い。柱穴の平面形は楕円形ないし円形で、直径20～30cm、深さは中央のP 216 が深く40cmあり、P 215・P 219 は25cm前後である。柱穴の間隔はP215 - P216 間が3.0m、P219 - P215 間が2.4m である。柱根は確認できなかった。SA317 と同様に柱穴間隔は一定しないが、中心がほぼ一直線上に並んでいることから柵列と推測した。ただSA317 と西端の柱穴P215 を共有していること、またP 215 - P216 間の柱穴間隔が、P216 - P219 間のそれと差が大きく、さらにこの間隔がSB316 の柱穴間隔と比較すると著しく差が認められるので、柵列ではなく、調査区外に広がる掘立柱建物の一部である可能性もある。

c 井戸 (S E)

SE43 (図版 10・16、写真図版 6)

9 H 3・4 に位置する。平面形は円形で、断面形は台形状で、中位に段がつく。下段部は平面形が方形を呈する。井戸内に施設は確認できなかったが、素掘りの井戸ではなく何らかの施設があったと考えられる。深さは確

認面から 74cmを計り、底面標高は 0.00 mである。調査時点でも鉄分を含まない比較的良好な湧水が確認できた。覆土は 9層に分かれる。図示していないが、2～4層から土師器の無台椀ほかの細片が出土し、2層から下の層では種子が少量検出された。

SE41 (図版 10・16、写真図版 6)

10 G 9に位置し、西半部が調査区外に広がる。平面形は円形と推測される。断面形はすり鉢状に近い半円形を呈す。SD37に一部を切られる。井戸内に施設は確認できず、素掘りの井戸と考えられる。深さは確認面から 89cmあり、底面標高は 0.03 mである。覆土は 5層に分かれる。図示していないが、2層から土師器の長甕ほかの細片、須恵器杯の細片、釘と考えられる鉄製品小片が出土している。

#### d 土坑 (SK)

SK49 (図版 10・17)

7 G 17に位置する。北半部が調査区外に伸びる。平面形は円形と推測される。断面形は台形状である。覆土は 2層に分かれる。遺物は出土していない。覆土 b類に相当することから平安時代の遺構と推測する。

SK53 (図版 10・17)

8 G 22に位置する。平面形は楕円形、断面形は半円形である。覆土は 3層に分かれる。図示していないが、1層から土師器長甕・小甕の細片が、2層から土師器無台椀の細片が出土している。

SK46 (図版 10・17)

8 G 25に位置する。平面形は楕円形、断面形は台形状である。覆土は 3層に分かれる。遺物は出土していない。覆土 b類に相当することから平安時代の遺構と推測する。

SK45 (図版 10・17)

8 H 22に位置する。平面形は楕円形、断面形は半円形である。覆土は 2層に分かれる。遺物は出土していない。覆土 b類に相当することから平安時代の遺構と推測する。

SK44 (図版 10・17)

8 H 23、9 H 3に位置する。平面形は楕円形、断面形は台形状である。覆土は 3層に分かれる。1・2層から須恵器無台杯 (24)・甕 (25) が出土しているほか、図示していないが土師器無台椀・長甕の細片が出土している。覆土 2層が覆土 b類に相当する。

SK48 (図版 10・17)

9 H 18に位置する。SD42を切る。平面形は楕円形、断面形は皿形である。覆土は 2層に分かれる。遺物は出土していない。覆土 b類に相当することから平安時代の遺構と推測する。

SK38 (図版 10・17、写真図版 6)

9 H 23、10 H 3に位置する。SD37に北半部を切られる。平面形は円形と推測される。断面形は半円形である。覆土は 4層に分かれ、1・4層から土師器無台椀 (26) が出土しているほか、図示していないが、土師器小甕、須恵器無台杯細片が出土している。

SK33 (図版 10・17、写真図版 6)

10 H 13・18に位置する。SD34を切る。平面形は円形、断面形は半円形である。覆土は 5層に分かれる。遺物は出土していない。覆土の様相から SD34との関係が深いとみられ、ほぼ同時期の遺構と推測する。

SK35 (図版 10・17)

10 H 13に位置する。平面形は円形、断面形は皿形である。覆土は 2層に分かれる。図示していないが、2層から土師器細片が出土している。1層が覆土 b類に相当する。

SK32 (図版 10・17)

10 H 14・19に位置する。平面形は楕円形、断面形は台形状である。覆土は単層である。遺物は出土していない。覆土が SK35と近似していることから平安時代の遺構と推測する。

SK56 (図版 10・17)

10 G 20 に位置する。SD36 の底面で確認され、遺構の上部を SD36 に削平されていると考えられる。確認状況での平面形は円形、断面形は台形状である。覆土は単層である。遺物は出土していない。覆土 b 類に相当することから平安時代の遺構と推測する。底面の標高が 0.01m で SE41 の 0.03m と近似していることから井戸の可能性も考えられる。

SK30 (図版 12・17)

13 I 13 に位置する。平面形は楕円形、断面形は皿形である。覆土は単層である。遺物は出土していない。覆土 b 類に相当することから平安時代の遺構と推測する。

SK23 (図版 12・18)

13 J 17 に位置する。平面形は楕円形、断面形は半円形である。覆土は単層である。須恵器短頸壺 (27) が出土している。

SK59 (図版 12・18)

14 I 14・19 に位置する。SX67 に切られており、平面形は不明、断面形は皿形である。覆土は単層である。遺物は出土していない。覆土 b 類に相当することから平安時代の遺構と推測する。

SK20 (図版 12・18)

14 I 15・19・20 に位置する。平面形は楕円形、断面形は皿形である。覆土は 2 層に分かれる。遺物は出土していない。覆土 b 類に相当することから平安時代の遺構と推測する。

SK21 (図版 12・18)

15 I 9 に位置する。平面形は排水用の側溝に切られており不明、断面形は台形状である。覆土は 2 層に分かれ、遺物は出土していない。覆土 b 類に相当することから平安時代の遺構と推測する。

SK66 (図版 12・18)

14 J 24 に位置する。平面形は円形、断面形は半円形である。覆土は単層である。遺物は出土していない。覆土 b 類に相当することから平安時代の遺構と推測する。

SK17 (図版 12・18)

14 J 24 に位置する。SD4 に切られており平面形は不明、断面形は皿形である。覆土は単層で、遺物は出土していない。覆土 b 類に相当することから平安時代の遺構と推測する。

SK13 (図版 12・18)

14 J 25 に位置する。SD4 に切られる。平面形は楕円形、断面形は皿形と推測される。覆土は単層で、遺物は出土していない。覆土 b 類に相当することから平安時代の遺構と推測する。

SK12 (図版 12・18)

14 J 25 に位置する。SD14 に切られる。平面形は楕円形、断面形は皿形と推測される。覆土は単層である。遺物は出土していない。覆土 b 類に相当することから平安時代の遺構と推測する。

SK11 (図版 12・18)

14 J 25 に位置する。SD14 に切られる。平面形は楕円形、断面形は皿形と推測される。覆土は単層で、遺物は出土していない。覆土 b 類に相当することから平安時代の遺構と推測する。

SK9 (図版 12・18)

15 J 5 に位置する。平面形は楕円形、断面形は皿形である。覆土は 3 層に分かれる。図示していないが、1 層から土師器細片が出土している。

SK8 (図版 12・18)

15 J 5 に位置する。平面形は不整形、断面形は皿形である。覆土は単層である。遺物は出土していない。覆土 b 類に相当することから平安時代の遺構と推測する。



## SK7 (図版 12・18)

15 J 5、15 K 1 に位置する。平面形は楕円形、断面形は半円形である。覆土は2層に分かれる。遺物は出土していない。覆土b類に相当することから平安時代の遺構と推測する。

## SK6 (図版 12・18)

15 K 1 に位置する。平面形は楕円形、断面形は半円形である。覆土は2層に分かれる。遺物は出土していない。覆土b類に相当することから平安時代の遺構と推測する。

## SK60 (図版 12・18)

15 J 10 に位置する。SD 5 に切られており、平面形は不明、断面形は台形状である。覆土は単層である。遺物は出土していない。覆土b類に相当することから平安時代の遺構と推測する。

## SK3 (図版 12・18)

15 K 1・6 に位置する。SD 4 に切られており平面形は不明、断面形は皿形である。覆土は2層に分かれる。遺物は出土していない。覆土b類に相当することから平安時代の遺構と推測する。

## SK1 (図版 12・18)

15 K 12・17 に位置する。平面形は楕円形、断面形は皿形である。覆土は単層である。浅いので遺構上面を削平されている可能性もある。遺物は出土していない。覆土b類に相当することから平安時代の遺構と推測する。

## e 溝 (SD)

## SD42 (図版 10・17・18、写真図版 7)

9 H 13・18・23 に位置する。SK48 に切られる短い溝である。主軸を N-3°-W にとる。断面形は半円形である。覆土は2層に分かれる。1層から須恵器甕(28)と図示していないが、土師器長甕の細片が出土している。

## SD40 (図版 10・18)

9 G 23・24、10 G 3・4 に位置する。短い溝で、「へ」の字状に弧を描く。断面形は半円形である。覆土は単層である。図示していないが、土師器無台椀、鉄滓の細片が出土している。遺物が出土していることと覆土b類に相当することから平安時代の遺構と推測する。

## SD37 (図版 10・16・17)

9 H、10 G、10 H にかけて位置する。主軸は N-72°-E にとる。東西へ伸びる。SE41、SK38、SD34・39 を切り、SK77、SD36 に切られる。断面形は台形状である。覆土は単層である。図示していないが、土師器無台椀・小甕、須恵器無台杯、砥石などの細片が出土している。底面標高によると西から東へ低くなる。

## SD34 (図版 11・18)

9 H、10 H、11 H にかけて位置する。主軸は N-16°-W にとる。9 H 17 から南へ一直線に伸び調査区中央付近の攪乱による段差で途切れているが、そのまま南へ伸びるものと考えられる。SK33、SD37 に切られる。断面形は半円形である。覆土は4層に分かれる。図示していないが、2層から土師器無台椀、須恵器無台杯・甕、鉄滓やフイゴの羽口と思われる被熱した土製品などの細片が出土している。底面標高によると北から南へ低くなる。

## SD22 (図版 12・18)

13 I、13 J、14 I にかけて位置する。主軸を N-72°-E にとる。東西両端部が SX67 に切られる。断面形は皿形である。覆土は単層である。遺物は出土していない。覆土b類に相当することから平安時代の遺構と推測する。

## SD69 (図版 12・18)

14 I、13 J、14 J にかけて位置する。東側は調査区外へ続く。主軸を N-74°-E にとる。SX67 底面で確認されたことから遺構上部は削平されている。断面形は台形状で、覆土は単層である。覆土b類に相当することから平安時代の遺構と推測する。

SD16 (図版 12・18、写真図版 7)

14J13・18・19に位置する。主軸をN-46°-Wにとる。SD4に切られる。断面形は皿形である。覆土は単層である。遺物は出土していない。覆土b類に相当することから平安時代の遺構と推測する。

SD15 (図版 12・18)

14J20・25に位置する。主軸をN-46°-Wにとる。断面形は皿形である。覆土は2層に分かれる。遺物は出土していない。覆土b類に相当することから平安時代の遺構と推測する。

SD14 (図版 12・18)

14J、14K、15Kにかけて位置する。主軸をN-44°-Wにとる。SK11・12を切る。調査区外へ続く。断面形は皿形である。覆土は単層である。遺物は出土していない。覆土b類に相当することから平安時代の遺構と推測する。

SD 4 (図版 12・18、写真図版 7)

14J、15J、15Kにかけて位置する。主軸をN-46°-Wにとる。断面形は半円形である。SD16とSK 3・13・17を切る。覆土は単層である。遺物は出土していない。覆土b類に相当することから平安時代の遺構と推測する。

SD 5 (図版 12・18)

15J 5・10にかけて位置する。主軸をN-14°-Eにとる。SK60を切る。断面形は半円形である。覆土は単層である。遺物は出土していない。覆土b類に相当することから平安時代の遺構と推測する。

SD 4・5・14～16は密接して存在し、覆土の様相が近似し、主軸方向・断面形態もほぼ同様であることから、ほぼ同時期で相互に関連した一群の遺構と考えられる。

2) 平安時代・中世の遺構

中世の遺構は、井戸2基、土坑3基、性格不明遺構3基で、溝1本である。遺物が出土した遺構は井戸1基のみで、他は時期決定できる遺物がなく、覆土の様相や切り合い関係から中世に属する遺構と推測する。遺構は古代に属する可能性もある。

a 井戸 (SE)

SE31 (図版 11・19、写真図版 7)

12 I 23・24、13 I 3・4に位置する。平面形は円形、断面形は皿形で、確認面からの深さは24cmで、底面の標高は0.20mである。底面標高は他の検出された井戸が0.03 m以下であることに比べると0.20 mと比較的高い。井戸内に施設あるいはその痕跡が確認できず、素掘り井戸と考えられる。覆土は単層で、種子が検出されている。確認面がVII層であり、後世の土地改良に伴い遺構上部は削平されている。他の時期の明らかとなった井戸との覆土の比較検討から中世の遺構と推測する。他の井戸の規模と比して井戸としたが、掘り込み跡がやや不明瞭であるので土坑の可能性もある。

SE19 (図版 12・19、写真図版 7)

14 I 25、15 I 5に位置する。平面形は円形、断面形は台形状で、中位に段を有する。下段の平面形は方形を呈する。SX68に一部を切られる。井戸内に施設は確認できなかったが、下段の形状や周囲の崩落しやすい土質などから素掘り井戸ではなく、井戸側が存在したものと考えられる。深さは確認面から95cmあり、底面標高は-0.46 mである。調査時点も湧水量は豊富で、また時間が経っても赤茶けることなく、鉄分の少ない良好な水質を維持している。覆土は13層に分かれる。5・9層は炭化物を多量に含む層である。3層で産地不明陶器の天目茶碗、また13層からは内外面黒漆塗の漆器椀細片が出土している。また3・5・9・13層から黒色化したコメを含む、多数の種子が検出された。1・2・3・5・9・13層で自然礫が出土しているが、特に9層からまとまって出土している。大きさは大半が3～5cm大の一握りに納まるくらいで、加工された形跡のない川原

石である。層位的にも出土数からも湧水をろ過する目的のものではないことはいえるが、これらの礫が井戸内から出土した意味は不明である。出土遺物および覆土の様相から中世の遺構と推測する。

#### b 土坑 (SK)

SK26 (図版 12・19)

13 J 8・13 に位置する。SX25 を切る。調査区外に続くが、平面形は楕円形と推測される。断面形は皿形である。覆土は単層である。遺物は出土していない。覆土 c 類に相当することから平安時代・中世の遺構と推測する。

SK24 (図版 12・19)

13 J 17 に位置する。SX27 を切る。平面形は円形、断面形は半円形である。覆土は 2 層に分かれる。遺物は出土していない。覆土 c 類に相当することから平安時代・中世の遺構と推測する。

#### c 溝 (SD)

SD28 (図版 12・19)

12J、13I、13J、14I にかけて位置し、調査区外へ続く。SX27 を切り、SK29・SD76 に切られる。断面形は半円形である。覆土は単層で、遺物は出土していない。覆土 c 類に相当することから平安時代・中世の遺構と推測する。

#### d 性格不明遺構 (SX)

SX25 (図版 12・19)

13 J 8・13 に位置し、調査区外へ続く。一部 SK26 と攪乱に切られているが、西端部で南にほぼ直角に屈曲しており、隣接する SX27 と同様な平面形であると推測する。断面形は皿形である。覆土は単層で、遺物は出土していない。覆土 c 類に相当することから平安時代・中世の遺構と推測する。

SX27 (図版 12・19・20)

12 J、13 I、13 J にかけて位置し、13 J 17 付近でほぼ直角に西方へ屈曲し、北端部は SX73 に切られる。平面形は「L」字状を呈し、断面形は皿形である。覆土は 2 層に分かれ、遺物は出土していない。覆土 c 類に相当することから平安時代・中世の遺構と推測する。

SX18 (図版 12・20)

14 I、14 J、15 J にかけて位置する。平面形は不整形で「コ」の字状をなす。断面形は皿形である。覆土は概ね単層であるが一部 2 層を成す。遺物は出土していない。覆土 c 類に相当することから平安時代・中世の遺構と推測する。

### 3) 近世以降の遺構

近世の遺構は、出土遺物から江戸時代 (18 世紀代) が中心であるが、近代の攪乱が含まれている可能性もある。確認された遺構は性格不明遺構 5 基 (SX67・68・72・73・77)、溝 9 条 (SD36・62～65・70・74～76)、土坑 1 基 (SK71)、ピット 1 基 (P180) である。これらの遺構は出土遺物や切合い関係、覆土の様相から近世と推測する。

SK77 (図版 10・20)

9 H 23・24 に位置する。平面形は楕円形、断面形は皿形である。覆土は単層である。遺物は出土していない。覆土 d 類に相当することから近世以降の遺構と推測する。

## 第V章 遺物

遺物は第3次調査区でコンテナ(内径 54.5 × 33.6 × 10.0cm)で 20 箱である。奈良時代と思われる須恵器・土師器、平安時代前期の須恵器・土師器のほか、近世の遺物が多く出土している。また石製品・土製品・鉄製品・鍛冶関連遺物・木製品が少量存在する。

第2次調査区ではコンテナ(内径 54.5 × 33.6 × 10.0cm)で 16 箱である。平安時代前期の須恵器・土師器が多いが、遺構内および攪乱層から珠洲焼や貿易陶磁も少量出土している。近世の遺物も多く出土している。また、石製品・鉄製品・鍛冶関連遺物・木製品や井戸の覆土土壌から検出された種実が少量存在する。

### 第1節 出土土器類の概要

第3次調査区で遺構内から出土した土器類には奈良時代から近世・近世以降まで含まれる。奈良時代土師器は甕のみで重量は 290 g、点数は 55 点である。奈良時代の土器類は須恵器・土師器である。重量は須恵器 388 g、土師器 221 g で、点数は土師器 7 点、須恵器 14 点であった。6 E グリッドの V a 層から黒色土器が出土しているが小片で図示できなかった。

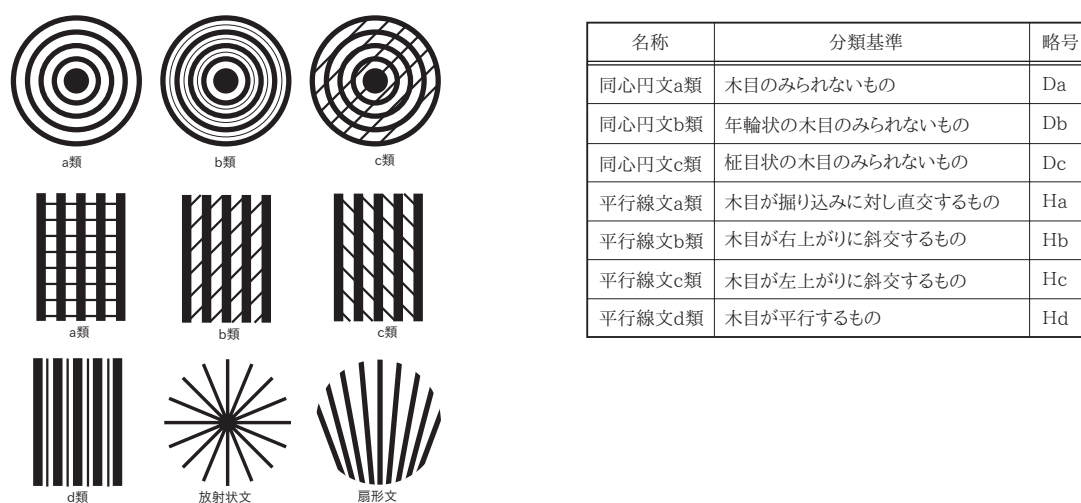
包含層は第IV章でも述べたように限定的に確認できたのみであり、全体の傾向をみることはできなかった。包含層以外の表土層・客土層などを含めると、遺構出土土器類とほぼ同じ割合で出土している。

第2次調査区では古代の土器から近世の陶磁器類がある。古代の土器類は須恵器・土師器である。重量は土師器 253 g、須恵器 570 g であった。

包含層出土遺物はなく、遺構外出土遺物は全て表土層・客土層・遺構確認面のものである。

#### A 土器の記述(第5図)

第2・3次調査区ともに出土土器は少量で器形全体を復元できるものがほとんど無かった。出土土器の特徴などについては文章で記述した。なお、古代の土器については成形・調整の表現・名称を山三賀Ⅱ遺跡〔坂井<sup>ほか</sup> 1989〕の記載を参考に以下のとおりとした。



第5図 タタキメ・あて具痕の細分類図(柿田 2001 をもとに再トレース)

1. 「ロクロナデ」ーロクロ・回転台使用、「ナデ」ーロクロ・回転台未使用。
2. 「ロクロケズリ」ーロクロ・回転台使用、「ケズリ」ーロクロ・回転台未使用。
3. 「カキメ」ーロクロ・回転台使用、「ハケメ」ーロクロ・回転台未使用。
4. 「ロクロミガキ」ーロクロ・回転台使用、「ミガキ」ーロクロ・回転台未使用。
5. 「タタキメ」ー外面、「あて具痕」ー内面。
6. 底部の「ヘラ切り」・「糸切り」はいずれもロクロの回転を利用したものである。回転ヘラ切り・回転糸切りとすべきものであるが、「回転」を省略した。

このほか、法量・胎土・出土地点などの詳細については、巻末の別表2 遺物観察表に記した。貯蔵具に見られる「タタキメ」「あて具痕」の細分類は、内堀信雄氏の分類〔内堀 1988〕、柿田祐司氏の分類〔柿田 2001〕を基本に第5図のようにした。

須恵器の胎土は山三賀Ⅱ遺跡〔坂井<sup>ほか</sup> 1989〕、沖ノ羽遺跡Ⅲ〔春日 2003〕、古代阿賀北地域の土器様相〔春日<sup>ほか</sup> 2004〕などを参考に、A～D群に分類した。

A群：胎土粘土質が強い。粒径1mm前後の石英・長石粒を定量含む。器面は滑らかである。新津丘陵窯跡群の須恵器の可能性が高い。

B群：胎土は砂質が強い。混入物の少ない精白な胎土のものが多いが、粒径1mm以下の白色粒子を多量に含むものもある。佐渡の小泊窯跡群の須恵器の可能性が高い。

C群：胎土は粘土質が強い。石英・長石を多量に含む。雲母が含まれる場合もある。器面はざらついたものが一般的で、小礫が露出する。笹神丘陵の笹神・真木山窯跡群を中心とする阿賀北地方の須恵器の可能性が高い。

D群：A～C以外のものを一括した。

記述は、前章の記述順序に準じ調査年次毎に遺構出土遺物から記述し、その後遺構外出土遺物について調査年次毎に記述する。

## B 出土遺物各説

### 1) 遺構出土遺物

#### a 第3次調査区

##### 奈良時代の遺構

#### P 314

細片のため図示していないが奈良時代と思われる土師器が出土している。

##### 平安時代の遺構

#### ①土 坑 (SK)

#### SK125 (図版 21、写真図版 8)

須恵器無台杯(1)が出土している。底部の破片である。底部外面はヘラ切りののちナデにより、非常に平坦に仕上げられている。胎土はA群である。

#### SK127 (図版 21、写真図版 8)

土師器小甕(2)が出土している。底部の破片である。内外面ともにロクロナデを施す。外面には粘土輪積み痕がわずかに残る

#### ②ピット (P)

#### P236 (図版 21、写真図版 8)



須恵器杯蓋（3）が出土している。頂部の破片である。外面に自然釉が掛かる。胎土はA群である。

これらの他に凶化しなかったがSD92から須恵器無台杯底部破片が1点出土している。胎土はB群である。

#### 近世以降の遺構

##### ①土坑（SK）

SK141（図版21、写真図版8）

須恵器甕（4）が出土している。あて具跡から底部付近の破片と考えられる。外面は平行線文タタキメa類、内面は平行線文a類のあて具痕が残る。焼成が不良で全面赤色ないし薄紫色を帯びる。胎土はA群である。

##### ②溝（SD）

SD87（図版21、写真図版8・9・10）

須恵器有台杯（5）・無台杯（6～8）・甕（9～12）、土師器椀（13）、漆器椀（14）、杓子（15）、桶（16・17）、不明石製品（18）、軽石（19）が出土している。

須恵器有台杯5の杯部底部外面下部にはロクロケズリが施される。胎土はB群である。

6～8は須恵器無台杯である。いずれも底部のヘラ切り痕は不明瞭である。磨耗が著しいこともあるが、それに加えて6はヘラ切りののちナデを施していることにもよる。胎土は6・7がB群、8がA群である。

9～12は須恵器甕である。9は外面が平行線文タタキメa類、内面は同心円文c類あて具痕が残る。胎土はB群である。10は内外面の調整から肩部付近の破片と考えられる。外面は平行線文タタキメa類、内面は同心円文c類あて具痕が残る。外面にはタタキメのちカキメが施される。胎土はA群である。11は調整痕から肩部付近の破片と考えられる。焼成がやや不良で断面の芯が赤みを帯びている。外面は平行線文タタキメc類、内面は同心円文c類のあて具痕が残る。外面には上半部に一部カキメが残る。胎土はA群である。12は調整痕と外面に自然釉が掛かっていることから肩部付近の破片と考えられる。外面は平行線文タタキメa類、内面は同心円文a類のあて具痕が残る。外面にかすかにカキメが残る。胎土はC群である。

13は土師器椀である。径の復元は出来なかった。口唇部がやや外反する。

14は漆器椀である。見込み部は一段低くなっているとともに、平坦面が比較的広く、積み重ね易くしているものと思われる。内外面とも黒漆が塗られている。底部外面中央に「サー」、もしくは「二十一」と読める朱漆による毛筆文字が書かれている。「屋号」であろうか。木取りは縦木取りである。

15は杓子頭部である。口縁部まで残る。外面の1か所に抉り込みがあり、別材が残っており、柄の残欠と考えられる。口縁の高さは柄が付く側から反対側に向かって斜めに傾斜している。また内外面ともにロクロ挽きの際の旋削痕（ロクロ目）が明瞭に残る。

16は桶の側板（樽）である。下端部をわずかに欠く。外面に「山川？」と焼印が押されている。店の屋号あるいは使用者名であろう。味噌か醤油を入れた桶と考えられる。17は桶の蓋（鏡）である。桶ではなく樽の蓋の可能性もある。表面には5か所の釘穴が一行に並んで確認でき、その内2か所は木釘が残存する。さらに釘穴列を挟んで幅1.7cm程の別材の存在した痕跡があることから、蓋の把手として棧木状のものが打ち付けられていたと推測される。これらの木製品は木質の遺存状況から近世の可能性が高いと考えられる。

18は不明石製品である。表裏も上下も不明である。便宜的に凸起のある面を表面とした。両側面は欠損していないようである。左側面は上方で曲線を描くが、反対側は直線のようなものである。また加工痕か使用痕か不明であるが、表裏面ともに細かい擦痕が認められる。裏面は若干断面中央が凹んでいる。詳細を後述するが石造物、石製品で類例を探したが見当たらなかった。

19は軽石でカットされたような平坦面を2面もつ。擦痕は認められない。用途は不明である。

これらの他に泥面子、比較的大きな円礫などが出土している。

SD88（図版21、写真図版8・10）

須恵器横瓶（20）、土師器小甕（21）、漆器椀（22）、桶（23）が出土している。

20 は須恵器横瓶である。外面には自然釉が掛かり、全面カキメが施されている。内面は同心円文 a 類のあて具痕が残り、内面は閉塞部と体部の境が明瞭に認められる。胎土はD群である。

21 は土師器小甕である。口径の復元は出来なかった。口唇端部に面を持つ。

22 は漆器椀である。特に外面は剥離が著しいが、高台の内側のみ黒漆塗りで、他は全面朱漆塗りを施す。さらに高台内側には黒漆の上から朱漆で筆書き文字が書かれている。文字は判読不能である。体部はやや角をもって立ち上がり、高台は外に開く。木取りは縦木取りである。

23 は桶の側板(樽)である。下端部をわずかに欠く。全体的に腐食が進んでいる。外面上から 1/3 位のところに桶を締めていたタガ痕とみられる凹みが認められる。

## b 第2次調査

### 平安時代の遺構

#### ①土坑(SK)

SK53

図化しなかったが土師器小甕底部細片が出土している。

SK44 (図版 22、写真図版 8)

須恵器無台杯(24)・甕(25)が出土している。

須恵器無台杯 24 の器壁は薄く、外面のロクロナデ痕が明瞭である。胎土はB群である。

須恵器甕 25 は外面に平行線文 a 類のタタキメが施され、自然釉が掛かる。内面は被熱による剥離が著しく、あて具痕は観察できなかった。胎土はB群である。図化しなかったが他に須恵器甕体部細片が1点出土している。

SK38 (図版 22、写真図版 8)

土師器無台椀(26)が出土している。完形品である。体部はやや内彎気味に立ち上がり、口縁端部はわずかに外反する。外面の約 1/3 ほどが赤く変色しているが、焼成時に炎が当たったことによると思われる。底部は糸切り痕が明瞭に残る。回転方向は右である。

SK23 (図版 22、写真図版 8)

須恵器短頸壺(27)が出土している。SD36 出土の 30 に比べ口縁部の立ち上がりは緩やかで、口径も小さい。胎土はB群である。

#### ②溝(SD)

SD37

図化しなかったが須恵器有台杯底部細片が出土している。胎土はA群である。

SD42 (図版 22、写真図版 8)

須恵器甕(28)が出土している。内面あて具痕跡から体部下部和考えられる。外面は平行線文 a 類のタタキメ、内面は同心円文 c 類のあて具痕が残る。胎土はA群である。

#### ③ピット(P)

P 192

図化しなかったが須恵器無台杯底部細片が出土している。胎土はB群である。

P 171 (図版 22、写真図版 9)

石錘(29)が出土している。自然礫であるが、上部に紐を括り付けたと思われる窪みが一周する。断面形は三角形で、下端部がやや太くなっている。

### 近世以降の遺構

#### ①溝(SD)

SD36 (図版 22、写真図版 8)

須恵器短頸壺(30)、青磁椀(31)、珠洲焼播鉢(32)が出土している。

須恵器短頸壺30の口縁部は短く屈曲し、短く立ち上がる。外面に細かい剥離が認められる。胎土はA群である。

31は青磁碗で、口径は復元できなかつた。釉は薄く厚さ0.3mmほどで均質である。

32は珠洲焼播鉢で、底径は復元できなかつた。破片には挿り目は残存していない。底面外面には糸切り痕が残る。他に図化しなかつたが土師器小甕細片と肥前磁器丸碗の底部破片が出土している。

SD76（図版22、写真図版9）

砥石（33）が出土している。約1/2破片と推定される。角柱状で端部が太くなる形状である。細い部分の使用によると思われる。4面全てに擦痕が認められる。

## ②性格不明遺構溝（SX）

SX67（図版22、写真図版8・9）

須恵器長頸瓶（34）、砥石として転用された須恵器甕体部破片（35）が出土している。

須恵器長頸瓶34は高台の大きさ、内面の調整痕などから、有台杯ではなく長頸瓶の底部と考えた。胎土はB群である。

砥石転用の須恵器甕体部破片35は外面に平行線文タタキメa類、内面は同心円文あて具痕のa類がかすかに残る。胎土はB群である。両面ともに使用による擦痕が認められる。側面は欠損した部分を敲打により整えているようである。

SX68（図版22、写真図版9）

軽石（36）が出土している。断面は台形状を呈す。カットされたような平坦面には擦痕状のものが認められる。砥石として利用された可能性がある。

## 2) 遺構外出土遺物

### a 第3次調査区

#### ①奈良時代の遺物（図版22、写真図版8・9）

須恵器無台杯（44・45）・土師器甕（37～41）がある。

44・45は須恵器無台杯である。両方とも2D19のV a層から出土した。後述土師器甕と比較的近い場所から出土している。44の底部は丸みを帯び、口縁部は直線的に外傾する。ヘラ切りの回転方向は右とみられる。焼成はやや軟質で全体的に薄い褐色を呈する。胎土はA群である。45は44と同様に底部は丸みを帯び、口縁部はやや内彎気味に立ち上がる。底部ヘラ切りの回転方向は右とみられる。胎土はC群である。

土師器甕（37～41）は2E25グリッド付近のIV層から細片がまとまって出土した。図化したものを含めこれらには胎土中に海綿骨針が多く含まれることや外面のハケメの具合から同一個体も含まれると思ったが、接合しなかつた。37～40は口縁部である。37の口縁部は直立気味に立ち上がり、ゆるく外反する。38は37と同じような立ち上がりで、ゆるく外反するが、37よりやや厚手である。内面にかすかにハケメが残る。39・40は前二者と比べ大きく外反する。内外面にハケメがみられる。41は底部である。厚手のしっかりした作りである。外面に縦方向のハケメと指押さえの痕が確認できる。これらの土師器は口縁部の形態および底部（41）の径が大きいことから8世紀代（奈良時代）の甕と考えられる。

#### ②平安時代の遺物（図版22・23、写真図版9）

須恵器杯蓋（42）・短頸壺蓋（43）・甕（46）、土師器小甕（47）・鍋（48）がある。

須恵器杯蓋42はIV層から出土した。外面頂部はロクロケズリが施される。胎土はB群である。

須恵器短頸壺蓋43はV a層から出土した。外面頂部に同心円の条線が三重に入る。外面に焼成時の降灰痕がある。口縁部は内傾気味に屈曲し、口縁端部はゆるく外反する。胎土はA群である。

須恵器甕46は外面に擦れた痕が確認できたことから底部付近と考えられる。外面は格子目タタキメ、内面は平行線文a類のあて具痕が残る。胎土はB群である。



土師器小甕 47 は口縁部破片で口径は復元できなかった。口縁端部が強く外反する。

土師器鍋 48 は外面が剥離し、磨耗が著しく調整の観察は出来なかった。下端部にわずかに平坦面を成す部分があったため底部付近と推測される。内面は全面にハケメが施されている。

#### b 第2次調査区

##### ①平安時代の遺物（図版 23、写真図版 9）

須恵器有台杯（49・50）、須恵器無台杯（51～61）、土師器鍋（62・63）がある。61のみⅡ層から出土し、他はⅠ層から出土した。

須恵器有台杯 49 は高台と体部の境がほとんど無く、そのまま直線的に立ち上がる。器面は非常に滑らかである。内面の一部に炭化物が付着している。内外面ともにロクロナデ痕は明瞭。胎土はD群である。50は器壁は厚く、底部から体部にかけて緩やかに立ち上がる。胎土はD群である。

51～61は須恵器無台杯である。口径 12.0～12.6cmでロクロナデ痕が明瞭に残る 51・52 と口径が 13cm を超え、ロクロナデ痕が不明瞭な 53・54 とがある。胎土はいずれも B 群である。55～60は口縁部と同様にロクロナデ痕の明瞭な 55・56 と不明瞭な 57～61 とがある。底部はいずれもヘラ切りで、55は左と思われる。胎土は全て B 群である。

62・63は土師器鍋である。62は口縁部の破片である。内外面とも磨耗が著しく調整痕は確認できなかった。口唇部は摘み上げられ、端部は若干肥厚する。63は底部付近の破片である。外面は平行線文タタキメ c 類、内面は同心円文あて具 a 類をハケメ調整で消している。

##### ②中世の遺物（図版 23、写真図版 9）

白磁椀（64）、珠洲焼甕（65）、砥石として転用された珠洲焼甕体部破片（66）がある。65のみⅡ層から出土し、他はⅠ層から出土した。

白磁椀 64 は玉縁口縁部破片である。断面で玉縁の成形方法が観察できる。玉縁の下に突線が一条めぐる。内面には掻き傷様の擦痕が認められる。新潟市東区山木戸遺跡〔諫山 2004〕で非常に類似したものが出土している。

65は珠洲焼甕の体部破片である。外面に平行線文タタキメ、内面はナデを施す。

66は砥石に転用された珠洲焼甕体部破片で、外面にかすかに平行線文タタキメが残る。内面は押さえの痕が残る。使用痕は外面のみに認められる。側面は欠損した部分を敲打により整えているようである。

##### ③時代不明の遺物（図版 23、写真図版 9）

硯（67）がある。Ⅰ層から出土した。赤褐色の泥岩を使用。「海」付近に使用痕と思われる擦痕が認められる。側面にも同様の擦痕が認められるが、加工時の痕跡と考えられる。

## 第VI章 自然科学分析

### 第1節 手代山北遺跡の土層

#### A はじめに

手代山北遺跡では、形成過程あるいは形成環境の詳細が不明な土層が検出された。そこで、地質調査を実施して土層層序の記載を行うとともに、ほかの土層からの混入なく採取された高純度の試料を対象として花粉分析とプラント・オパール（植物珪酸体）分析を実施して、土層形成の過程や環境について調べるようになった。

調査分析の対象となった地点は、A地点（基本層序1）、B地点（基本層序2）、C地点の3地点である（図版8・9）。各地点の土層を次に記載する。

#### B 土層の層序

##### 1) A地点

低地部に位置するA地点では、下位より灰色シルト質砂層（層厚3cm以上）、若干色調が暗い灰色砂質シルト層（層厚9cm）、灰白色シルト質砂層（層厚3cm、以上IV層）、炭化物混じり暗灰色腐植質泥層（層厚9cm）、黄白色シルト層（層厚2cm）、若干色調が暗い灰色泥層（層厚5cm、以上III層）、灰色攪乱土（層厚13cm）、灰色盛土（層厚26cm）が認められる（第6図）。これらのうち、IV層は8世後半～9世紀の遺物が含まれているようであり、SK79の1層に相当する。

##### 2) B地点

低地部に位置するB地点では、下位より灰色シルト質砂層（層厚11cm以上）、若干色調が暗い灰色泥層（層厚11cm）、灰色シルト層（層厚2cm、以上IV層）、炭化物混じり黒灰色腐植質泥層（層厚8cm、III層）、盛土（層厚69cm以上）が認められる（第6図）。

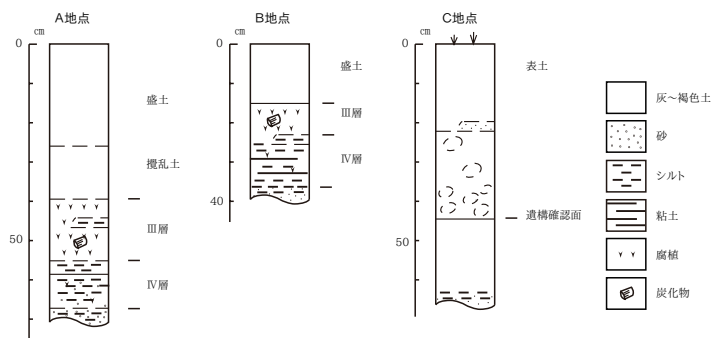
##### 3) C地点

自然堤防上に位置するC地点では、下位より灰色シルト質砂層（層厚3cm以上）、褐鉄鉱（リモナイト）を含み橙色がかかった褐色土（層厚19cm）、橙色がかかった褐色土ブロックを多く含む褐色土（層厚9cm）、橙色がかかった褐色土ブロックを含む褐色土（層厚13cm）、砂混じり褐色土（層厚3cm）、砂混じり褐色表土が認められる（第6図）。

### 第2節 花粉分析

#### A はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構



第6図 手代山北遺跡土層柱状図

内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

## B 試料と分析方法

分析試料は、A地点のⅢ層（平安時代～中世の遺物包含層）とⅣ層（奈良時代～平安時代の遺物包含層）、B地点のⅢ層（平安時代～中世の遺物包含層）とⅣ層（奈良時代～平安時代の遺物包含層）、そしてC地点の自然堤防上の土層から採取された計5点である。A地点とB地点の試料採取層位を分析結果の柱状図に示す。

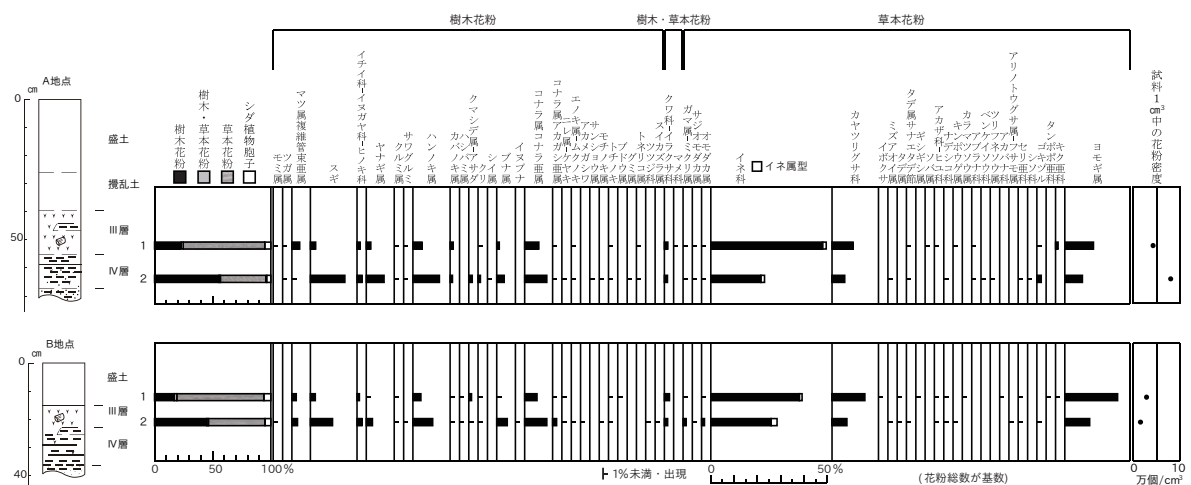
花粉の分離抽出は、中村〔中村 1973〕の方法をもとに、以下の手順で行った。

- (1) 試料から 1 cm<sup>3</sup> を秤量
- (2) 0.5%リン酸三ナトリウム（12 水）溶液を加えて 15 分間湯煎
- (3) 水洗処理の後、0.5mm の篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
- (4) 25%フッ化水素酸溶液を加えて 30 分放置
- (5) 水洗処理の後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸 9：濃硫酸 1 のエルドマン氏液を加え 1 分間湯煎）を施す
- (6) 再び氷酢酸を加えて水洗処理
- (7) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成
- (8) 検鏡・計数検鏡は、生物顕微鏡によって 300～1000 倍で行った。花粉の同定は、島倉〔島倉 1973〕および中村〔中村 1980〕をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示した。イネ属については、中村〔中村 1974・1977〕を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とした。

## C 分析結果

### 1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉 30、樹木花粉と草本花粉を含むもの 2、草本花粉 27、シダ植物孢子 2 形態の計 61 である。分析結果を第 1 表に示し、花粉数が 100 個以上計数された試料については花粉総数を基数とする花



第 7 図 手代山北遺跡における花粉ダイアグラム

粉ダイアグラムを示した。以下に出現した分類群を記載し、主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

〔樹木花粉〕

モミ属、ツガ属、マツ属複維管束亜属、マツ属単維管束亜属、スギ、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、ヤナギ属、クルミ属、サワグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、ハシバミ属、クマシデ属-アサダ、クリ、シ

イ属、ブナ属、イヌブナ、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属-ケヤキ、エノキ属-ムクノキ、アカメガシワ、サンショウ属、モチノキ属、トチノキ、ブドウ属、グミ属、トネリコ属、ツツジ科、スイカズラ属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科-イラクサ科、マメ科

〔草本花粉〕

ガマ属-ミクリ属、サジオモダカ属、オモダカ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、イボクサ、ミズアオイ属、タデ属、タデ属サナエタデ節、ギシギシ属、ソバ属、アカザ科-ヒユ科、ナデシコ科、キンボウゲ属、カラマツソウ属、アブラナ科、ベンケイソウ科、ツリフネソウ属、アカバナ科、アリノトウグサ属-フサモ属、セリ亜科、シソ科、ゴキヅル、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属

〔シダ植物孢子〕

単条溝孢子、三条溝孢子

2) 花粉群集の特徴

a A地点・B地点

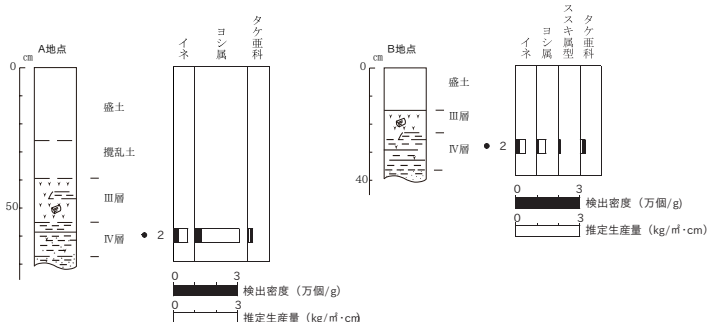
A地点およびB地点のIV層（平安時代の遺物包含層）では、樹木花粉と草本花粉の占める割合が同程度である。樹木花粉ではスギ、ハンノキ属、コナラ属コナラ亜属が多く、ヤナギ属、ブナ属、クリなどが伴われる。草本花粉ではイネ科（イネ属型を含む）が多く、ヨモギ属、カヤツリグサ科、およびガマ属-ミクリ属、サジオモダカ属、オモダカ属、ミズアオイ属、ゴキヅルなどが伴われる。III層では、草本花粉の占める割合が高くなり、イネ科（イネ属型を含む）、ヨモギ属、カヤツリグサ科が増加し、ソバ属も認められた。樹木花粉では、スギ、ハンノキ属、コナラ属コナラ亜属など多くの分類群が減少している。

b C地点

自然堤防上の試料では、花粉がほとんど検出されなかった。

D 花粉分析から推定される植生と環境

A地点およびB地点のIV層（平安時代の遺物包含層）の堆積当時は、イネ科、カヤツリグサ科をはじめ、水田雑草でもあるサジオモダカ属、オモダカ属、ミズアオイ属などが生育する湿地的な環境であり、そこを利用して水田稲作が行われていたと推定される。また、遺跡周辺にはハンノキ属やヤナギ属などの湿地林（河辺林）をはじめ、スギ、ナラ類（コナラ属コナラ亜属）、ブナ属、クリなどの森林植生が分布していたと推定される。III層では水田稲作に加えてソバなどの畑作が行われるようになり、遺跡周辺の森林植生は大幅に減少したと考えられる。



第8図 手代山北遺跡におけるプラント・オパール分析結果

C地点の自然堤防上では、花粉がほとんど検出されなかった。花粉が検出されない原因としては、乾燥もしくは乾湿を繰り返す堆積環境下で花粉などの有機質遺体が分解されたこと、土層の堆積速度が速かったこと、および水流や粒径による淘汰・選別を受けたことなどが想定される。

### 第3節 プラント・オパール分析

#### A はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸 (SiO<sub>2</sub>) が蓄積したものであり、植物が枯れたあとでも微化石 (プラント・オパール) となって土壤中に半永久的に残っている。プラント・オパール分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査が可能である [杉山 2000]。

#### B 試料と分析方法

分析試料は、A地点とB地点のそれぞれIV層 (平安時代の遺物包含層) から採取された計2点である。試料採取層位を分析結果の柱状図に示す。

プラント・オパール分析は、ガラスビーズ法 [藤原 1976] を用いて、次の手順で行った。

(1) 試料を 105°C で 24 時間乾燥 (絶乾)

(2) 試料約 1 g に対し直径約 40 μm のガラスビーズを約 0.02g 添加 (電子分析天秤により 0.1mg の精度で秤量)

(3) 電気炉灰化法 (550°C・6 時間) による脱有機物処理

(4) 超音波水中照射 (300W・42KHz・10 分間) による分散

(5) 沈底法による 20 μm 以下の微粒子除去

(6) 封入剤 (オイキット) 中に分散してプレパラート作成

(7) 検鏡・計数

同定は、400 倍の偏光顕微鏡下で、

第1表 手代山北遺跡における花粉分析結果

学名	分類群	和名	A地点		B地点		C地点	
			1	2	1	2	1	2
Arboreal pollen		樹木花粉						
<i>Abies</i>		モミ属	1				1	
<i>Tsuga</i>		ツガ属	1	1				
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>		マツ属複雑管束亜属	18	1	11		10	
<i>Pinus</i> subgen. <i>Haploxylon</i>		マツ属単維管束亜属	1	1			1	
<i>Cryptomeria japonica</i>		スギ	12	78	12		40	
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae		イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	7	11	6		9	
<i>Salix</i>		ヤナギ属	10	40	3		11	
<i>Juglans</i>		クルミ属	1	3	1		1	
<i>Pterocarya rhoifolia</i>		サワグルミ	1	4			3	
<i>Alnus</i>		ハンノキ属	21	60	20		36	1
<i>Betula</i>		カバノキ属	7	5	4		2	
<i>Corylus</i>		ハシバミ属			1		1	
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>		クマシデ属-アサダ		8	7		3	
<i>Castanea crenata</i>		クリ	3	5	1		4	
<i>Castanopsis</i>		シイ属		2				
<i>Fagus</i>		ブナ属	6	17	4		19	
<i>Fagus japonica</i>		イヌブナ					1	
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>		コナラ属コナラ亜属	33	50	31		40	
<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>		コナラ属アカガシ亜属	2	4	1		7	
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>		ニレ属-ケヤキ		2	1		4	
<i>Celtis-Aphananthe aspera</i>		エノキ属-ムクノキ	4	2			2	
<i>Mallotus japonicus</i>		アカメガシワ					1	
<i>Zanthoxylum</i>		サンショウ属		1				
<i>Ilex</i>		モチノキ属		1			1	
<i>Aesculus turbinata</i>		トチノキ	1	4	1		1	
<i>Vitis</i>		ブドウ属			1			
<i>Elaeagnus</i>		グミ属		1				
<i>Fraxinus</i>		トネリコ属	1	1				
Ericaceae		ツツジ科					1	
<i>Lonicera</i>		スイカズラ属					1	
Arboreal・Nonarboreal pollen		樹木・草本花粉						
Moraceae-Urticaceae		クワ科-イラクサ科	8	7	13		6	
Leguminosae		マメ科		1				
Nonarboreal pollen		草本花粉						
<i>Typha-Sparganium</i>		ガマ属-ミクリ属	1	3	4		6	
<i>Alisma</i>		サジオモダカ属	1	3			1	
<i>Sagittaria</i>		オモダカ属	2	1	3		5	
Gramineae		イネ科	258	113	221		109	
<i>Oryza type</i>		イネ属型	8	8	7		11	
Cyperaceae		カヤツリグサ科	49	29	82		27	
<i>Aneilema keisak</i>		イボクサ			2			
<i>Monochoria</i>		ミズアオイ属		1			1	
<i>Polygonum</i>		タデ属			1		1	
<i>Polygonum sect. Persicaria</i>		タデ属サナエタデ節	1	1			2	
<i>Rumex</i>		ギシギシ属			1			
<i>Fagopyrum</i>		ソバ属	1					
Chenopodiaceae-Amaranthaceae		アカザ科-ヒユ科	2		1		2	
Caryophyllaceae		ナデシコ科		1	1		2	
<i>Ranunculus</i>		キンボウゲ属	1				1	
<i>Thalictrum</i>		カラマツソウ属			2			
Cruciferae		アブラナ科	1	2				
Crassulaceae		ベンケイソウ科		1				
<i>Impatiens</i>		ツリフネソウ属		1				
Onagraceae		アカバナ科			1			
<i>Haloragis-Myriophyllum</i>		アリノトウグサ属-フサモ属					1	
Apiodeae		セリ亜科		2	1		1	
Labiatae		シソ科		1				
<i>Actinostemma lobatum</i>		ゴキツル	1	10			1	
Lactucoideae		タンポポ亜科			2			
Asteroidae		キク亜科	6		2			
<i>Artemisia</i>		ヨモギ属	66	40	132		45	
Fern spore		シダ植物胞子						
Monolate type spore		単条溝胞子	26	16	26		21	
Trilate type spore		三条溝胞子	3	4	11		1	
Arboreal pollen		樹木花粉	130	302	105		200	1
Arboreal・Nonarboreal pollen		樹木・草本花	9	7	13	6	0	
Nonarboreal pollen		草本花粉	398	217	463		216	0
Total pollen		花粉総数	537	526	581		422	1
Pollen frequencies of 1cm <sup>2</sup>		試料1cm <sup>2</sup> 中の花粉密度	4.2	8.0	2.8	1.5	0.7	
Unknown pollen		未同定花粉	4	9	5	8	10	0
Fern spore		シダ植物胞子	29	20	37		22	0
Helminth eggs		寄生虫卵	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Digestion rimcins		明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Charcoal fragments		微細炭化物	(++)		(+++)			

おもにイネ科植物の機動細胞に由来するプラント・オパールを対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中のプラント・オパール個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位： $10^{-5}$ g）をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる〔杉山2000〕。

## C 分析結果

水田跡（稲作跡）の検討が主目的であることから、同定および定量はイネ、ムギ類（穎の表皮細胞）、ヒエ属型、ヨシ属、ススキ属型、タケ亜科の主要な6分類群に限定した。これらの分類群について定量を行い、その結果を第2表および第8図に示した。検出された主要な分類群を第9・10図に示す。

## D 考察

### 1) 水田跡の検討

水田跡（稲作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネのプラント・オパールが試料1gあたり5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している〔杉山2000〕。ただし密度が3,000個/g程度でも水田遺構が検出される事例があることから、ここでは判断の基準を3,000個/gとして検討を行った。

#### a A地点

IV層（試料2）について分析を行った。その結果、イネが検出されたが、密度は2,000個/gと比較的低い値である。イネの密度が低い原因としては、稲作が行われていた期間が短かったこと、土層の堆積速度が速かったこと、採取地点が畦畔など耕作面以外であったこと、および上層や他所からの混入などが考えられる。

#### b B地点

IV層（試料2）について分析を行った。その結果、イネが検出されたが、密度は1,500個/gと比較的低い値である。イネの密度が低い原因としては、やはり前述のようなことが考えられる。

## E まとめ

プラント・オパール分析の結果、A地点とB地点のIV層（奈良時代～平安時代の遺物包含層）では、比較的少量ながらイネが検出され、調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が認められた。

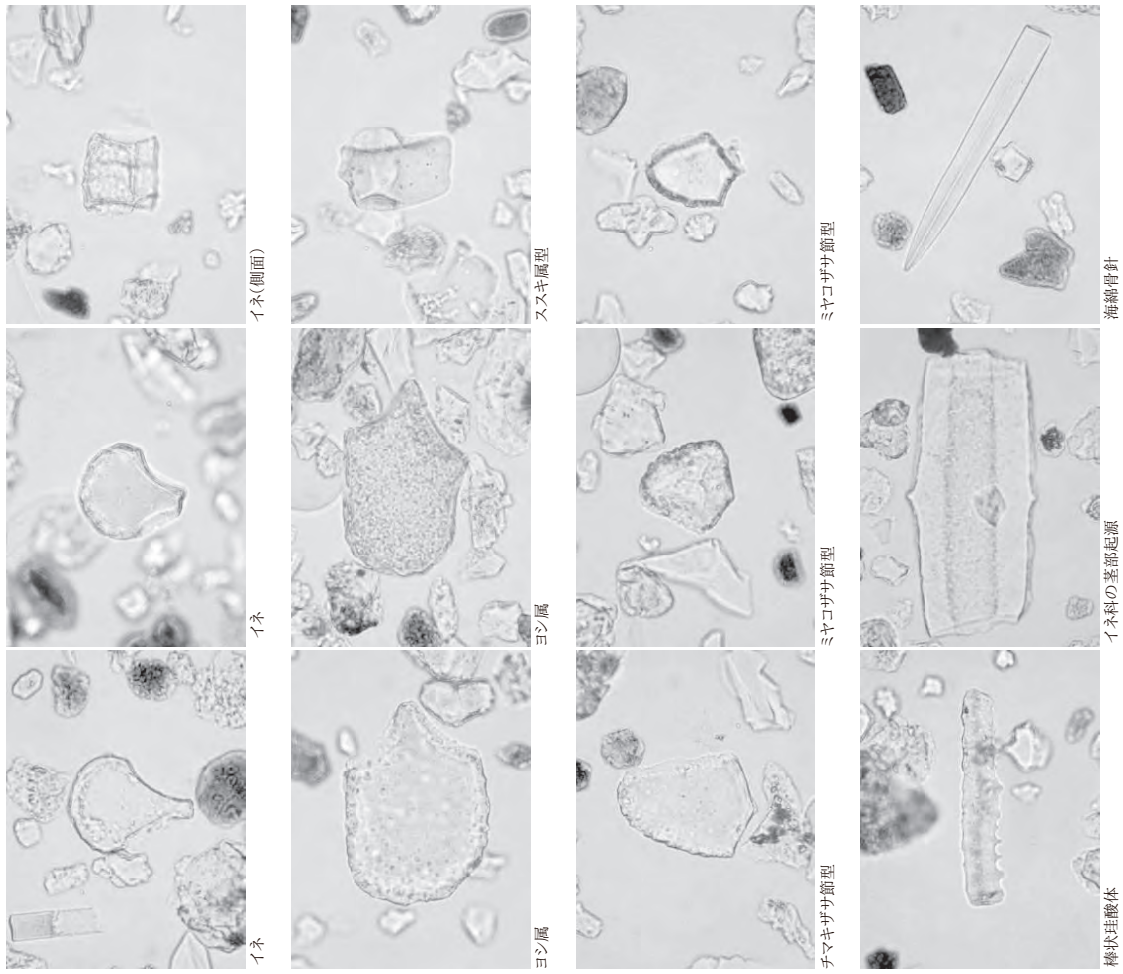
		検出密度（単位：×100個/g）	
		地点・試料	
		A	B
分類群	学名	2	2
イネ	<i>Oryza sativa</i>	20	15
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	34	7
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type		7
タケ亜科	Bambusoideae	20	22

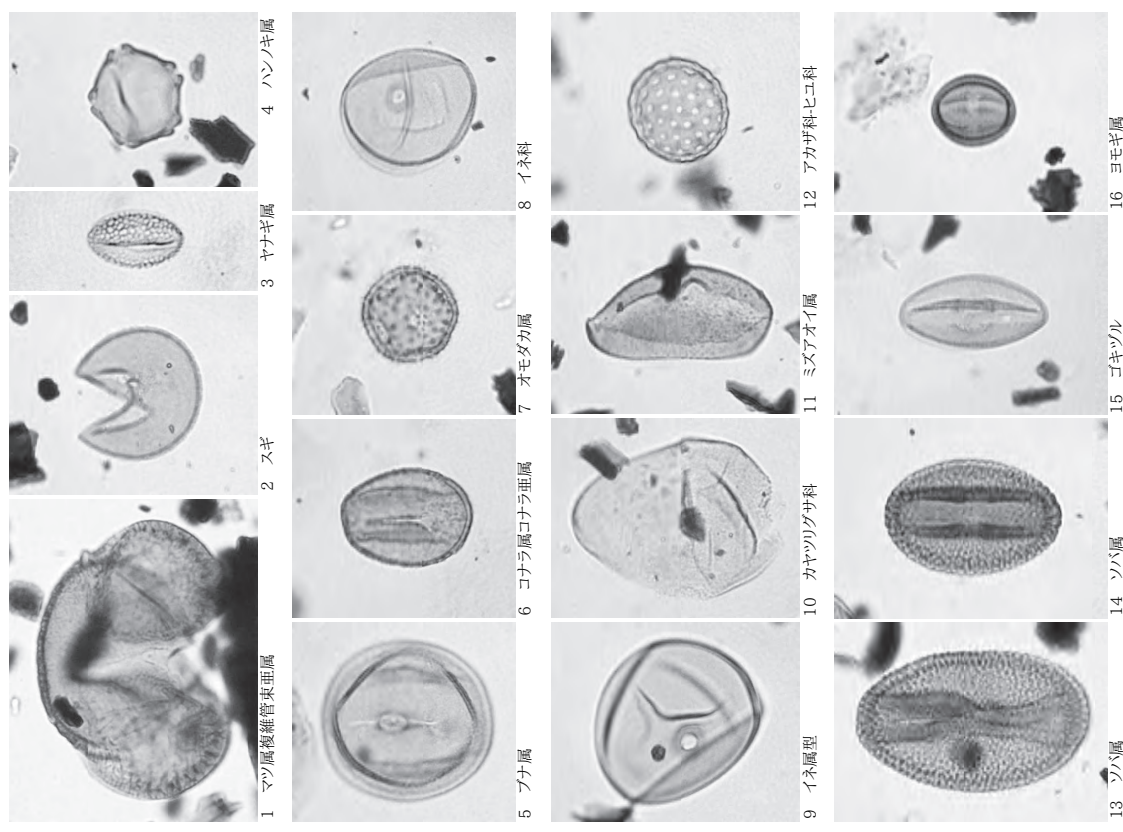
		推定生産量（単位：kg/m <sup>2</sup> ・cm）	
イネ	<i>Oryza sativa</i>	0.60	0.44
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	2.13	0.47
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type		0.09
タケ亜科	Bambusoideae	0.10	0.11

第2表 手代山北遺跡におけるプラント・オパール分析結果





第10図 手代山北遺跡の植物珪酸体(プラント・オパール)写真



第9図 手代山北遺跡の花粉

# 第VI章 総 括

## 第1節 遺 構

### A 遺構の時期

今次調査では第IV章でも述べたが、第2・3次調査区はどちらも安定した包含層がほとんど無く、遺構出土遺物も希薄であった。そのため遺物が出土していない遺構の時期は、遺物が出土した遺構との切り合い関係や覆土の様相を比較検討することにより推測した。遺物時期の詳細な検討は次節で述べるが、中心となる年代は9世紀後半と考えられる。また第3次調査区2E・3Eグリッド付近で確認された包含層からは奈良時代と推測される須恵器と土師器が出土した他、P314から奈良時代と推測される土師器細片が出土している。詳細な状況は不明確であるものの奈良時代にも何らかの営みがあった可能性が指摘できる。これらのことは当遺跡の南東に立地する日水遺跡の調査所見に近似している〔今井<sup>ほか</sup>2007〕。

#### 1) 掘立柱建物・柵列

掘立柱建物1棟(SB316)が確認された。この建物を構成する柱穴P201からは土師器無台椀小片が出土しているのみで、時期推測は困難であるが、上記の遺構の時期の傾向から考えると9世紀代であろうと推測される。攪乱により一部を欠くが2間×2間の総柱建物である。梁行3.4m×桁行3.6m、面積12.24㎡である。山三賀II遺跡ですでに指摘されているように、本建物は柱穴の深さ・規模からみて居住用の建物ではなく倉庫と考えられる〔坂井<sup>ほか</sup>1989〕。

この掘立柱建物のすぐ東には柵列SA317とSA318が確認された。これらの遺構も柵列を構成する柱穴P215から須恵器杯細片が出土しているが時期の特定は出来なかった。しかしSA317はSB316と軸線をほぼ同一にしていることからSB316と同時期と推測される。また機能としてはSB316を囲う塀ではないかと考える。類例として新潟市江南区小丸山遺跡SB6・SA1があげられる〔小池・本間1995〕。

SA318は西端の柱穴P215をSA317と共有し、柱穴間隔はSA1と比べ広い。またSB316・SA317周辺は他所に比べピットが密集しており、調査区外へも広がっていると考えられる。これらのことからSA318は柵列(塀)ではなく建物など別の遺構である可能性も高い。

#### 2) 井戸

4基検出されている。すべて第2次調査区である。これらのうち遺物が出土し時期の推測できるものは、SE19とSE41である。SE41は2層で土師器長甕、須恵器杯細片が出土している。また土師器無台椀を出土したSK38を切る溝SD37に切られていることから平安時代に属すると推測される。

SE19は3層で天目茶碗の細片が出土しているが、覆土の様相から後世に掘り込まれた形跡はなく、中世に属すると推測される。

SE31は上層部を大きく削平されていると考えられる場所に位置しており、掘り込みの深度も浅かった。これらのことからSE31は調査時の確認面よりさらに高い位置から掘り込まれていると想定されるため、古代の遺構ではないであろうと推測する。さらに付近には近世以降と想定される遺構が存在していないことから中世に属すると推測する。また第IV章でも報告したが土坑の可能性もある。

SE43は覆土の様相が先に述べたSE41と類似しており、SB1、SA1に近いことから古代に属すると推測する。したがって今回の調査で確認された井戸は平安時代に属する井戸2基(SE41・43)と中世に属する井戸2基

(SE19・31)に分けることができる。

SE19で注目される点は覆土中位の第5層において炭化物が層状に堆積していたことと、第1・2・3・5・9・13層から、直径3～10cm大の自然礫が合わせて83点・2,913g出土したことである。礫は特に第9層が最も多く65点・2,181g出土した。これらの礫は大きさが直径3～5cm大、重さ15～20g程度のものが多数を占める。中には被熱によると思われる割れがあるものや、脆くなっている礫も確認できる。さらに最下層の第13層は、細い茎状のものを多数含む腐食植物層となっていた。

SE19における炭化物層の堆積、被熱礫が出土したという特徴について周辺遺跡の調査事例と比較し、若干の検討を加える。まず炭化物層の堆積については、中の山遺跡で発見された古代及び中世の井戸遺構35基中26基で覆土上層部が灰で覆われていたことが報告されている〔川上1982〕。日水遺跡で発見された平安時代の井戸SE126・SE245では、覆土中位に炭層があったことが報告されている〔今井<sup>ほか</sup>2007〕。また当該地からやや離れているが、牛道遺跡で発見された平安時代の井戸SE73では覆土上位に木炭小片が多量に入った層、覆土中位に炭化物が多量に入った層が確認され、被熱し赤変した砂岩や安山岩が出土している〔土橋<sup>ほか</sup>1999〕。

地域が離れるが上越市の用言寺遺跡において中世の井戸がまとまって発見されており、検討が加えられている〔加藤・近藤<sup>ほか</sup>2006、小川<sup>ほか</sup>2007〕。用言寺遺跡では本遺跡例よりもサイズが一回り大きい(拳大～人頭大)礫が多数出土する例(SE61・151〔加藤・近藤<sup>ほか</sup>2006〕、SE515・812・825〔小川<sup>ほか</sup>2007〕)が認められ、さらに礫の中には被熱しているものが多い(SE151)と指摘している。また覆土下位から繊維質の腐食植物が検出される例(SE158・159〔加藤・近藤<sup>ほか</sup>2006〕、SE501・812・825〔小川<sup>ほか</sup>2007〕)も確認されている。用言寺遺跡ではこれらの礫、植物遺体ともに廃棄儀礼を意味していると推測している。

新潟県内で発掘された原始から中世の井戸における祭祀の検討を加えた駒見和夫氏によると、本遺構で確認できた炭化物層は古墳時代から中世戦国期の井戸に認められ、その割合は平安時代から室町時代が高いと指摘している〔駒見1992〕。また焼けた礫は平安時代から室町時代に認められ、特に中世の例が顕著であるとするともに、これらは陰陽道の影響を受けた埋井の祭祀に伴うものであらうと考えられている〔駒見1992〕。

一方で新潟県下の井戸で中世では祭祀を行ったと判断できるものはほとんどないという見解もある〔田辺2001〕。

今次調査SE19は先に述べた遺物出土状況と駒見氏の見解、用言寺遺跡例との類似性から中世の井戸と推測するものの、祭祀が行われたか否かについてはさらに検討を深めたい。

### 3) 小溝群

第2次調査区南端部で集中して検出された。遺構出土遺物がないため直接時期を決めることは出来ないが、覆土の様相から古代に属すると推測する。特徴としてはほぼ並行に近接して存在し、浅く短いものである。これらの特徴と覆土から水が流れていた可能性は低い。

これらの小溝と同様の遺構が検出されている周辺遺跡をあげると日水遺跡〔今井<sup>ほか</sup>2007〕、牛道遺跡〔土橋1999〕、川根谷地墓所遺跡〔江口2001〕、上郷遺跡〔上野・春日1997〕、小丸山遺跡〔小池・本間1995〕がある。

日水遺跡例は自然科学分析の結果から田畑の畝溝の可能性は否定されているが、他の周辺遺跡の例は畝跡あるいは畝跡の可能性が高いと推測されている。

今次調査例では自然科学分析等は行っていないが、溝周辺に建物跡等が存在しないことから畑の畝跡ではないかと推測する。

## 第2節 遺物

### A 出土土器の編年的位置づけ

今次調査は出土遺物が非常に少なく、遺構出土遺物はわずかに9点である。このうち4点は、中世以降の遺構に混入していたものである。このような状況から、ここでは奈良～平安時代の遺跡全体の傾向をつかむため時期の検討可能な資料は遺構外出土遺物を含めて全て扱い、先行研究との対比から所属時期の検討を行うこととする。なお器種構成比率と器高指数・底径指数の検討は資料数が少ないので行なわなかった。

信濃川・阿賀野川流域における古代の土器編年は、春日氏によってまとめられている〔春日1997a・1997b・1999、春日<sup>ほか</sup>2004〕ので、時期の名称はこの編年に従って記述する。

#### 1) 古代

##### a 須恵器

出土量が少なかったため資料化できた遺物は少ないが、その各々の特徴から所属時期等について考えてみたい。今次調査で確認できた器種は杯蓋・有台杯・無台杯・短頸壺蓋・短頸壺・長頸瓶・甕である。いずれも全形が復元出来た資料は少ない。

SK44 出土の無台杯(24)は器壁が薄く直線的に開く体部を持つ。口径12.5cm・底径8.7cm・器高3cmで胎土B群であることから小泊産と考えられる。聖籠町の山三賀Ⅱ遺跡SI1167はV2期に比定されるが、ここで出土した小泊産無台杯の一群と器形・法量共に近似している。次期のVI1期に比定される江南区の小丸山遺跡SD2出土小泊産無台杯は器形や器壁が薄いことが良く似ているが、24はこの一群のものより底径が大きい。以上のことから1点のみで時期比定することは難しいが、ここではV2期～VI1期(9世紀中葉)と捉えておきたい。

一方、第3次調査区2D19包含層出土の無台杯(44・45)は24より古い須恵器と考えられる。44は胎土A群で新津丘陵産、45は胎土C群で阿賀北地方産と推測される。44は口径12.2cm、45は口径11.2cmである。同じく山三賀Ⅱ遺跡SI60出土無台杯の一群と似ていることからIV3期(8世紀末～9世紀初頭)と捉えておきたい。第2次調査区出土の有台杯(49)も同じ時期に属す可能性があるが、攪乱層出土であり他所から流入している可能性も高い。

##### b 土師器

今次調査で確認できた器種は無台碗・小甕・長甕・鍋である。出土状況は須恵器と同様希薄かつ断片的であった。

SK38 出土の無台碗(26)は遺構底面で逆位の状況で出土した。出土状況からこの土坑に廃棄されたものと考えられる。口径11.5cm・底径5.4cm・器高3.6cm・器高指数41.7・底径指数47である。器形や法量から小丸山遺跡SD4・5や上郷遺跡SD2・22などと対比できることから、VI2～VI3期(9世紀後半～末葉)と捉えておきたい。SK38周辺は遺構密度の高い区域であるので、今次調査の中心となる時期と考える。

一方3次調査区2Eグリッドの包含層からまとまって出土した甕(37～41)は、非ロクロ成形で外面にはハケメを施し、内面はナデを施す。口縁部はナデのみ確認できる。胎土は薄手で海綿骨針が多量に含まれることから、同じ胎土で作成された一群と考えられる。またP314出土の土師器片も胎土の特徴が近似していることから、これらに含まれると考えられる。非ロクロ成形であることから古手の須恵器と同じ時期のもと考えられる。また44・45とも出土位置に近い。

鍋は62や63のように須恵器技法による調整痕が観察できるものと、48のようにハケメ調整が明瞭なものがある。



## 2) 中世

今次調査で確認できた器種は珠洲焼甕・播鉢、青磁碗、白磁碗である。いずれも出土量少なく細片のため詳細は不明である。

## B 不明石製品について

SD87の1層で出土した用途不明石製品(18)について若干の検討を加える。所属時期についてはSD87からは古代の須恵器も出土しているが、近世陶磁器が多く出土しているため、近世以降の遺構と推測している。出土状況と加工の状況から、この石製品も近世、古く見ても中世以降のものとして推測される。

用途については形態的な特徴、使用痕・加工痕の付き方、石材に注目し、推測される所属年代から可能性を指摘できる石臼・砥石・石塔の部材との比較検討を行なった。

しかしそれぞれに類似点は見出せたものの、石臼とは形態的特徴が異なること、砥石とは使用痕が存在しないこと、五輪塔・宝篋印塔・板碑など石塔の部材とは形態的な特徴および石材や整形の技法が異なっていることなどから、比較検討した用途のものとは合致しなかった。非常に特徴的な遺物であるが用途は不明である。今後の類例の報告をまって再検討をしたい。

## 第3節 周辺遺跡との関係と手代山北遺跡の性格

今次調査で確認された手代山北遺跡の平安時代・中世・近世について、周辺事例との比較から遺跡の性格について考えていくこととする。

**平安時代の様相** 本遺跡周辺の調査事例として、日水遺跡・中の山遺跡・荒木前遺跡とやや離れるが牛道遺跡や川根谷内墓所遺跡、上郷遺跡などが挙げられる。手代山北遺跡と日水遺跡は現亀田排水路の西側(左岸)に位置し、中の山遺跡と荒木前遺跡は東側(右岸)に位置する。亀田排水路は、丁度、亀田砂丘が沖積平野部へ埋没する際に位置することや、耕地整理前原形図を見ると排水路の両岸に自然堤防が発達していることが窺えることから、古代において河川であった可能性が高いと推測する。

日水遺跡では調査区外であるが付近で水田耕作を行っていた可能性が高いこと、階層性を示す遺物が出土していないことなどから農民層の集落と考えられている〔今井<sup>ほか</sup>2007〕。中の山遺跡は、古代の様相はあまりはっきりしていないが、井戸が多数発見されている〔川上<sup>ほか</sup>1982〕。荒木前遺跡では発見された遺構・遺物から、古代においては一般集落、中世においては在地領主層の居住地と推測されている〔渡邊1991、川上1996〕。また第Ⅱ章で触れたように、中の山遺跡と荒木前遺跡は、貝塚遺跡を加え一つの遺跡であるという考察もなされている〔川上1996〕。貝塚遺跡を除く上記3遺跡では、掘立柱建物・井戸・土坑・溝などが発見され、特に井戸は調査面積に比し多数発見されているといえる。

手代山北遺跡の様相を振り返ると、掘立柱建物・井戸・土坑・溝などが発見されているが、上記3遺跡と比べると全体として遺構数が少ない。掘立柱建物も倉庫の可能性が高く、井戸の数は明らかに少ない。これらのことから本遺跡は集落の縁辺部に位置していると考えられる。本遺跡の遺構密度が高い区域は、地形から考えると第2次調査区の東～北東にあるものと推測する。また、自然科学分析の結果から、調査地内で水田耕作が行われていた可能性は低いと考えられる。小溝群があるので小規模ながら畑作は行われていたものと推測する。

以上のことから、遺跡の中心域は未調査で不明な部分も多いが、今次調査地が遺跡の縁辺部に当たること、日水遺跡と同様に亀田排水路左岸自然堤防上に立地し、かつ同時期に営まれていることから日水遺跡と同じ集落を構成していた遺跡の縁辺部である可能性が高いと考える。調査地のすぐ南には手代山遺跡があり、日水遺跡より

もはるかに近いが、手代山遺跡は発掘調査事例が少なく詳細が不明であるので、手代山遺跡との関係は現在のところ分からない。亀田排水路右岸の中の山遺跡・荒木前遺跡での調査成果と比較すると、右岸側の方が掘立柱建物や井戸などの生活に直結している遺構が多く発見されているようである。

また牛道遺跡では畠跡の可能性が高い畝状遺構でイネなどが栽培されていた可能性が指摘され、井戸覆土から食物残滓なども見つかった。

今次調査結果と周辺遺跡の調査事例から、9世紀に入ると亀田砂丘縁辺の沖積地でも活発な生産活動が行われるようになった様子が分かってきた。また牛道遺跡以外の遺跡からは奈良時代の遺物も見つかっていることから、砂丘縁辺の沖積地への進出は8世紀後半頃から動きがあり、9世紀に入ってから活発化し10世紀に入ると縮小化もしくは廃絶していった様子が推測される。

中世の様相 日水遺跡では14世紀後半と推測される井戸、土坑、溝などが確認されているものの出土遺物が非常に少ないため詳細は不明である〔今井<sup>ほか</sup>2007〕。中の山遺跡で運河と推測される溝、貿易陶磁の出土などから流通都市的な様相を示している〔川上<sup>ほか</sup>1982〕。荒木前遺跡は遺構・出土遺物から在地領主層の居住地と推測されている〔渡邊1991、川上1996〕。中の山遺跡、荒木前遺跡で遺跡の性格が示されているものの、本遺跡では中世と確定できる遺構は井戸のみで、他に中世と推測した土坑、性格不明遺構、溝が少数確認されたに過ぎないので、この時代の詳細な状況は明らかではないが、今次調査地を含め周辺遺跡でも中世に活動がおこなわれていたことは間違いないと考えられる。

近世の様相 最後に本文では図示していないが、近世の陶磁器類が特に第3次調査区SD87・88で多くみつまっている。ほとんどが破片である。時期は古いものは17世紀後半まで遡るものもあるが、多くが18世紀から19世紀にかけてのものである。歴史的環境で述べた手代山村の開村期がちょうど17世紀後半頃であるので、これらの新しい遺物も注目される。

今次調査の結果、古代を中心にこの地域の歴史を考える上で大きな示唆を与えてくれる成果をあげることが出来たと考える。



## 引用・参考文献

- ア 朝岡 政康 2003 『東国遺跡 卸売市場建設に伴う市道東8-273 建設事業用地内発掘調査報告書』 新潟市教育委員会
- イ 諫山えりか 2004 『新潟市山木戸遺跡マンション等建設予定地内発掘調査報告書』 新潟市教育委員会
- 今井さやか<sup>ほか</sup> 2007 『日水遺跡 第3次調査』 新潟市教育委員会
- ウ 上野一久・春日真実 1997 『横雲バイパス関係発掘調査報告書上郷遺跡Ⅱ』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 内堀 信雄 1988 「須恵器甕に見られる叩き目文について」『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題』報告編  
石川考古学研究会・北陸古代土器研究会
- 宇野 隆夫 1991 『律令社会の考古学研究 北陸を舞台として』 桂書房
- 宇野 隆夫 1992 「食器計量の意義と方法」『国立歴史民俗博物館研究報告』第40集 国立歴史民俗博物館
- エ 江口友子<sup>ほか</sup> 2000 『釈迦堂遺跡』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 江口 友子 2001 『川根谷内墓所遺跡』(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- オ 小川真一<sup>ほか</sup> 2007 『用言寺遺跡Ⅱ』(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 小村 弼 1959 『亀田町史』 亀田町公民館
- 温古談話会 1892 『温古之葉』第32編 温古談話会
- カ 柿田 祐司 2001 「須恵器甕の叩き目から」『北陸古代土器研究』第9号 北陸古代土器研究会
- 春日 真実 1991 「古代佐渡小泊窯における須恵器の生産と流通」『新潟考古学談話会』8号 新潟考古学談話会
- 春日 真実 1997a 「越後・佐渡における9世紀中葉の画期」『北陸古代土器研究』第6号 北陸古代土器研究会
- 春日 真実 1997b 「越後における10・11世紀の土器様相」『北陸古代土器研究』第7号 北陸古代土器研究会
- 春日 真実 1997c 「第七章 まとめ 1. 土器」『上郷遺跡Ⅱ』7号 (財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日 真実 1999 「第4章古代第2節土器偏年と地域性」『新潟県の考古学』高志書院
- 春日 真実 2003 『沖ノ羽遺跡Ⅲ(C地区)』(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真実<sup>ほか</sup> 2004 『越後阿賀北地域の古代土器様相』 新潟古代土器研究会
- 加藤 学・近藤慎子<sup>ほか</sup> 2006 『用言寺遺跡Ⅰ』(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 金原正明 1993 「花粉分析法による古環境復原」『新版古代の日本』第10巻 角川書店
- 亀田町史編さん委員会 1988 『亀田の歴史』通史編上巻 亀田町
- 亀田町史編さん委員会 1990 『亀田の歴史』資料編 亀田町
- 鴨井幸彦<sup>ほか</sup> 2006 「越後平野における砂丘列の形成年代と発達史」『第四紀研究』第45巻2号 日本第四紀学会
- 川上貞雄<sup>ほか</sup> 1982 『中の山遺跡発掘調査報告書』 亀田町教育委員会
- 川上貞雄・木村宗文・鈴木郁夫 1989 『新津市史』資料編第1巻原始・古代・中世 新津市
- 川上 貞雄 1996 『荒木前遺跡第2次調査 新潟県中蒲原郡亀田町・荒木前遺跡発掘調査報告書』 亀田町教育委員会
- 神田 一正 2003 「第二章 古代」『横越町史通史編』 横越町
- キ 北村 淳・菊池康一郎<sup>ほか</sup> 2004 『中谷内遺跡Ⅲ・沖ノ羽遺跡Ⅱ・細池寺道上遺跡発掘調査報告書』 新津市教育委員会
- ク 小池義人・須藤高志<sup>ほか</sup> 1994 『磐越自動車道関係発掘調査報告書 細池・寺道上遺跡』 新潟県教育委員会
- 小池邦明・本間圭吾 1995 『小丸山遺跡 直り山団地建設事業用地内発掘調査報告書』 新潟市教育委員会
- 駒見 和夫 1992 「井戸をめぐる祭祀一地域的事例の検討から一」『考古学雑誌』第77巻第4号 日本考古学会
- クサ 酒井 和男 1980 『三王山遺跡』 亀田町教育委員会
- 酒井和男・坂井 陽一<sup>ほか</sup> 1987 『大江山地区の遺跡』 新潟市教育委員会

- 酒井 和男 2003 『横越町史』資料編 第1章原始・古代 横越町
- 坂井秀弥<sup>ほか</sup> 1989 『新新バイパス関係発掘調査報告書 山三賀Ⅱ遺跡』新潟県教育委員会・建設省北陸地方建設局  
新潟県国道工事事務所
- 坂井秀弥<sup>ほか</sup> 1991 「佐渡の須恵器」『新潟考古2』新潟考古学会
- 島倉巳三郎 1973 「日本植物の花粉形態」『大阪市立自然科学博物館収蔵目録』第5集
- ス 杉山真二 2000 「植物珪酸体（プラント・オパール）」『考古学と植物学』同成社
- タ 田辺早苗 2001 「越後の様相」『中世北陸の井戸』第14回北陸中世考古学研究会資料集 北陸中世考古学研究会
- 田中久男<sup>ほか</sup> 1996 「新潟砂丘の形成史」『第四紀研究』第35巻3号 日本第四紀学会
- ツ 立木宏明・澤野慶子<sup>ほか</sup> 2005 『沖ノ羽遺跡発掘調査報告書Ⅲ』新津市教育委員会
- ト 土橋由埋子 1999 『国道49号横雲バイパス関係発掘調査報告書Ⅲ牛道遺跡』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 土橋由埋子 2007 「平成19年度発掘調査遺跡の紹介 西郷遺跡」『埋文にいがた』No.59 （財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
- ナ 奈良国立文化財研究所 1985 『木器集成図録』近畿古代篇奈良国立文化財研究所史料第27冊 奈良国立文化財研究所
- 中村 純 1973 『花粉分析』古今書院
- 中村 純 1974 「イネ科花粉について、とくにイネ（*Oryza sativa*）を中心として」『第四紀研究』13
- 中村 純 1977 「稲作とイネ花粉」『考古学と自然科学』第10号
- 中村 純 1980 「日本産花粉の標徴」『大阪自然史博物館収蔵目録』第13集
- ニ 新潟市編 2007 『新・新潟市双書2 新潟市の遺跡』文久堂
- 新潟市史編さん原始古代中世史部会 1994 『新潟市史』資料編1原始古代中世 新潟市
- 新潟市史編さん原始古代中世史部会・新潟市史編さん近世史部会 1995 『新潟市史』通史編1原始古代中世・近世（上）  
新潟市
- 新潟市埋蔵文化財センター 2008 『平成19年度新潟市遺跡発掘調査速報会資料』新潟市埋蔵文化財センター
- 新潟古砂丘グループ 1979 「新潟平野をめぐる地形と地質－5砂丘と平野」『アーバンクボタ』17 久保田鉄工（株）
- ハ 藤原 宏志 1976 「プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析－」  
『考古学と自然科学』9
- 藤原宏志・杉山 真二 1984 「プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)－プラント・オパール分析による水田址の  
探査－」『考古学と自然科学』17
- ヨ 横越町史編さん委員会 2003 『横越町史通史編』横越町
- ワ 渡邊朋和<sup>ほか</sup> 2001 『寺道上遺跡発掘調査報告書』新津市教育委員会
- 渡邊ますみ 1991 『荒木前遺跡』亀田町教育委員会

別表1 主要遺構計測表

図版 No.	遺構	調査 回数	グリッド	時代	確認面	主軸方位	規模 (m)					底面 標高 (m)	形 態		遺物の 有無	遺物 図版 頁
							上 端		下 端		深度		平面	断面		
							長軸	短軸	長軸	短軸						
8・13	SK78	3次	1C13・14・18～20	奈良	V b層						-0.35		皿形			
8・13	SK79	3次	1C20・25,1D16・21	奈良	V b層					0.12	-0.38		皿形			
8・13	SK139	3次	1C20	奈良	V b層	N-10° -E	0.68	0.21	0.56	0.15	0.07	-0.40	(楕円形)	皿形		
8・13	SK140	3次	1C20・25	奈良	V b層	N-5° -E	0.72	0.73	0.55	0.53	0.11	-0.39	不整形	皿形		
8・13	SK114	3次	2E25,3E5,3F1	奈良	V b層						0.08	-0.18		皿形		
8・13	P314	3次	3E5	奈良	V b層		0.25	0.24	0.13	0.12	0.18	-0.29	方形	U字状	○	
8・13	P313	3次	2E25,3E5	奈良	V b層		0.32	0.19	0.18	0.12	0.05	-0.16	楕円形	U字状		
8・14	SK85	3次	2D8	平安	V b層	N-17° -E	0.45	0.41	0.29	0.27	0.10	-0.30	円形	皿形		
8・14	SK101	3次	3D4・9	平安	V b層	N-10° -E	(0.31)	0.38	(0.26)	0.28	0.06	0.10		皿形		
8・14	SK102	3次	3D20	平安	V b層	N-74° -E	0.79	0.27	0.67	0.17	0.05	0.09	楕円形	皿形		
8・14	SK106	3次	3E12	平安	V b層	N-14° -W		0.37		0.31	0.04	0.11		皿形		
8・14	SK107	3次	3E12・17	平安	V b層	N-48° -W	1.12	0.61	0.92	0.43	0.09	0.09	楕円形	皿形		
8・14	SK108	3次	3E11・12・16・17	平安	V b層	N-26° -W	0.91	0.52	0.73	0.32	0.13	0.06	楕円形	皿形		
8・14	SK111	3次	3E18・19・23・24	平安	V b層	N-0°	1.50	0.56	1.27	0.54	0.13	0.07	楕円形	皿形	○	
8・14	SK116	3次	3E25	平安	V b層	N-31° -W	0.58	0.40	0.46	0.26	0.07	0.11	長方形	皿形		
8・14	SK113	3次	3E21・4E1	平安	V b層	N-29° -E	1.30	1.21	1.17	0.99	0.12	0.16	楕円形	皿形		
8・14	SK118	3次	4D9・10・14・15	平安	V b層			0.99		0.60	0.14	0.21		皿形		
8・14	SK121	3次	4E16	平安	V b層	N-62° -W	0.81	0.28	0.70	(0.11)	0.16	0.27	不整形	台形状	○	
9・14	SK125	3次	5E19・20	平安	V b層	N-13° -W	0.55	0.32	0.29	0.14	0.11	0.40	不整形	台形状	○	21
9・14	SK126	3次	5E25	平安	V b層	N-24° -W	0.56	0.37	0.35	0.19	0.30	0.17	円形	U字状		
9・14	SK127	3次	5F9	平安	V b層	N-8° -E	0.57	0.32	0.46	0.31	0.08	0.37	楕円形	皿形	○	21
9・14	SK128	3次	5F18・19	平安	V b層	N-10° -E	(0.35)	0.40	0.72	0.61	0.12	0.32	(円形)	皿形	○	
9・14	SK131	3次	5F25・6F5	平安	V b層	N-0°	0.65	0.56	0.53	0.47	0.09	0.43	円形	皿形		
9・15	SK129	3次	5F15,5G11・16	平安	V b層	N-82° -W					0.13	0.35	(長方形)	皿形		
9・15	SK130	3次	5F15・20	平安	V b層	N-77° -W	1.55	1.11	1.25	0.84	0.16	0.33	楕円形	皿形		
9・15	SK133	3次	5G22・6G2	平安	V b層	N-90°		0.46		0.26	0.07	0.44	(長方形)	皿形		
9・15	SK134	3次	6G2	平安	V b層						0.09	0.43	不整形	皿形		
9・15	SK135	3次	6E15	平安	V b層	N-72° -E	0.46	0.33	0.17	0.12	0.11	0.44	楕円形	皿形		
9・15	SK144	3次	5G16・21・22	平安	V b層						0.12	0.46	(円形)	皿形		
9・15	SK137	3次	7F1	平安	V b層	N-44° -W		0.80		0.63	0.12	0.41	(方形)	皿形	○	
9・15	SK138	3次	6F21・7F1	平安	V b層	N-38° -E	0.79	0.68	0.28	0.15	0.15	0.40	楕円形	台形状		
9・14-15	SD117	3次	4D9・10・15,4E6・11・12・16・17・22・23,5E3	平安	V b層	N-27° -W					0.12	0.30		皿形	○	
9・15	SD120	3次	4E11・16・17	平安	V b層	N-27° -W					0.13	0.33	(皿形)			
9・15	SX132	3次	5G21・6G1	平安	V b層	N-80° -E	1.42	0.97	1.30	0.78	0.07	0.42	不整形	皿形		
8	SK141	3次	2D11・16	近世以降	V b層	N-20° -W	0.66	0.25	0.46	0.20	0.51	-0.74	長方形	台形状	○	21
8・15	SK105	3次	3E6・7・11・12	近世以降	V b層	N-90°	0.92	0.45	0.81	0.36	0.06	0.07	楕円形	台形状		
8・15	SK119	3次	4E11	近世以降	V b層	N-87° -W	0.43	0.42	0.39	0.33	0.07	0.32	長方形	台形状		
8・15	SK97	3次	3D3・4	近世以降	V b層	N-5° -W	0.81	0.45	0.55	0.31	0.11	0.03	楕円形	皿形		
8・15	SD87	3次	2C～E,3D～F	近世以降	V b層	N-67° -W					0.22	-0.24		皿形	○	21
8・15	SD88	3次	2C・D,3D～F	近世以降	V b層	N-67° -W					0.49	-0.36		皿形	○	21
8・14-16	SD95	3次	3D3・4・9・10	近世以降	V b層	N-69° -W	(4.06)	0.44	(3.97)	0.33	0.06	0.13		皿形		
8・16	SD109	3次	3E12・13・18・19	近世以降	V b層	N-62° -W	4.68	0.37	4.41	0.27	0.15	0.00		台形状	○	
8・16	SD110	3次	3E16・17・22・23	近世以降	V b層	N-61° -W	4.26	0.41	4.11	0.34	0.06	0.17		皿形		
8・16	SD115	3次	3E23・24・4E4・5,4F1	近世以降	V b層	N-64° -W	4.66	0.45	4.51	0.32	0.07	0.17		皿形		
8・15	SX96	3次	3D3・4	近世以降	V b層	N-71° -W					0.05	0.11	楕円形	皿形		
10・16	SB316	2次	9G10・15・20,9H6・7・11・12・16・17	平安	V b層	N-15° -W	3.52	0.34							○	
10・16	SA317	2次	9H2・7・12・17・23	平安	V b層	N-13° -W	(5.72)								○	
10・16	SA318	2次	9H7～10	平安	V b層	N-85° -E	(5.44)									
10・16	SE43	2次	9H3・4	平安	V b層		1.34	1.29	0.67	0.54	0.74	0.00	円形	台形状	○	
10・16	SE41	2次	10G9	平安	V b層	N-19° -W	1.05	(0.97)	0.36	(0.15)	0.89	0.03	(円形)	半円形	○	
10・17	SK49	2次	7G17	平安	V b層	N-50° -E	0.52	(0.41)	0.35	(0.23)	0.30	0.40	(円形)	台形状		
10・17	SK53	2次	8G22	平安	V b層	N-26° -W	0.67	0.58	0.38	0.33	0.48	0.16	楕円形	半円形	○	
10・17	SK46	2次	8G25	平安	V b層	N-57° -E	0.59	0.47	0.34	0.22	0.27	0.41	楕円形	台形状		
10・17	SK45	2次	8H22	平安	V b層	N-45° -E	0.53	0.48	0.22	0.18	0.26	0.44	楕円形	半円形		
10・17	SK44	2次	8H23,9H3	平安	V b層	N-4° -W	1.10	0.87	0.42	0.38	0.44	0.28	楕円形	台形状	○	22
10・17	SK48	2次	9H18	平安	V b層	N-12° -E	0.56	0.47	0.33	0.26	0.12	0.63	楕円形	皿形		
10・17	SK38	2次	9H23,10H3	平安	V b層	N-21° -E	(1.12)	0.86	(0.58)	0.58	0.30	0.39	(円形)	半円形	○	22
10・17	SK33	2次	10H13・18	平安	V b層	N-49° -E	1.08	1.02	0.43	0.40	0.62	0.03	円形	半円形		
10・17	SK35	2次	10H13	平安	V b層	N-20° -W	0.37	0.35	0.27	0.25	0.08	0.52	円形	皿形	○	
10・17	SK32	2次	10H14・19	平安	V b層	N-83° -E	0.60	0.56	0.50	0.25	0.12	0.54	楕円形	台形状		
10・17	SK56	2次	10G20	平安	V b層	N-24° -W	1.07	0.93	0.76	0.73	(0.20)	0.01	円形	台形状		
12・17	SK30	2次	13I13	平安	V b層	N-62° -W	0.64	0.43	0.50	0.32	0.08	0.39	楕円形	皿形		
12・18	SK23	2次	13J17	平安	V b層	N-71° -W	0.49	0.41	0.17	0.14	0.19	0.38	楕円形	半円形	○	22
12・18	SK59	2次	14I14・19	平安	V b層	N-22° -W	(0.76)	0.37	(0.63)	0.29	0.06	0.43		皿形		
12・18	SK20	2次	14I15・19・20	平安	V b層	N-9° -E	0.90	0.68	0.57	0.41	0.21	0.31	楕円形	皿形		
12・18	SK21	2次	15I9	平安	V b層	N-44° -W	0.66	0.63	0.19	0.14	0.29	0.16		台形状		
12・18	SK66	2次	14J24	平安	V b層	N-12° -W	0.32	0.27	0.13	0.10	0.16	0.45	円形	半円形		
12・18	SK17	2次	14J24	平安	V b層	N-28° -E	(0.20)	0.32	(0.17)	0.21	0.05	0.58		皿形		
12・18	SK13	2次	14J25	平安	V b層	N-51° -E	(0.19)	0.24	(0.10)	0.12	0.04	0.58	(楕円形)	(皿形)		
12・18	SK12	2次	14J25	平安	V b層	N-49° -W	0.45	(0.31)	0.23	0.14	0.06	0.53	(楕円形)	(皿形)		

別 表

図版 No.	遺構	調査 次数	グリッド	時代	確認面	主軸方位	規模 ( m )				底面 標高 (m)	形 態		遺物 の有無	遺物 図版 頁	
							上 端		下 端			深度	平面			断面
							長軸	短軸	長軸	短軸						
12・18	SK11	2次	14J25	平安	V b層	N-46° -W	0.47	(0.14)	0.28	(0.12)	0.03	0.53	(楕円形)	(皿形)		
12・18	SK9	2次	15J5	平安	V b層	N-63° -W	0.74	0.58	0.47	0.46	0.09	0.55	楕円形	皿形	○	
12・18	SK8	2次	15J5	平安	V b層	N-64° -W	0.90	0.52	0.71	0.37	0.09	0.53	不整形	皿形		
12・18	SK7	2次	15J5,15K1	平安	V b層	N-3° -E	0.71	0.43	0.61	0.29	0.13	0.50	楕円形	半円形		
12・18	SK6	2次	15K1	平安	V b層	N-9° -E	0.29	0.21	0.13	0.11	0.13	0.48	楕円形	半円形		
12・18	SK60	2次	15J10	平安	V b層	N-83° -W	(0.26)	0.27	(0.22)	0.17	0.13	0.48		台形状		
12・18	SK3	2次	15K1・6	平安	V b層	N-46° -W	0.69	(0.38)	0.43	0.25	0.10	0.53		皿形		
12・18	SK1	2次	15K12・17	平安	V b層	N-24° -E	0.90	0.42	0.70	0.33	0.08	0.52	楕円形	皿形		
10・17・18	SD42	2次	9H13・18・23	平安	V b層	N-3° -W	(4.14)	0.39	(3.95)	0.20	0.18	0.58		半円形	○	22
10・18	SD40	2次	9G23・24,10G3・4	平安	V b層			0.31		0.16	0.17	0.52		半円形	○	
10・16・17	SD37	2次	9H22 ~ 24,10G4・5・8・9, 10H1・2	平安	V b層	N-72° -E	(10.74)	0.67	(10.74)	0.35	0.30	0.40		台形状	○	
11・18	SD34	2次	9H17・22,10H2・3・7・8・13・ 18・23・24,11H3・4・9	平安	V b層	N-16° -W	(14.18)	0.76	(14.58)	0.28	0.24	0.45		半円形	○	
12・18	SD22	2次	13I25,13J18・19・21 ~ 23, 14I4・5	平安	V b層	N-72° -E	(9.14)	0.40	(9.00)	0.26	0.06	0.48		皿形		
12・18	SD69	2次	14I5・8 ~ 10,13J23・24, 14J1 ~ 4・6	平安	V b層	N-74° -E	(13.39)	0.68	(13.34)	0.54	0.22	0.23		台形状		
12・18	SD16	2次	14J13・18・19	平安	V b層	N-46° -W	(2.80)	0.22	(2.69)	0.11	0.06	0.56		皿形		
12・18	SD15	2次	14J20・25	平安	V b層	N-46° -W	1.47	0.50	1.38	0.27	0.16	0.45		皿形		
12・18	SD14	2次	14J20・25,14K21,15K1・2	平安	V b層	N-44° -W	(5.13)	0.53	(4.99)	0.38	0.06	0.55		皿形		
12・18	SD4	2次	14J18・19・24・25,14K21, 15J5,15K1・6・7	平安	V b層	N-46° -W	(10.18)	0.27	(10.20)	0.13	0.09	0.55		半円形		
12・18	SD5	2次	15J5・10	平安	V b層	N-14° -E	2.13	0.23	1.76	0.11	0.08	0.54		半円形		
11・19	SE31	2次	12I23・24,13I3・4	中世	V b層	N-15° -E	1.96	1.65	1.57	1.42	0.24	0.20	円形	皿形		
12・19	SE19	2次	14I25,15I5	中世	V b層	N-19° -W	1.81	1.60	(0.87)	0.76	0.95	-0.46	円形	台形状	○	
12・19	SK26	2次	13J8・13	中世	V b層	N-43° -E	(1.19)	7.39	(1.12)	0.59	0.08	0.48	(楕円形)	皿形		
12・19	SK24	2次	13J17	中世	V b層	N-50° -W	0.56	0.54	0.29	0.16	0.13	0.42	円形	半円形		
12・19	SD28	2次	12J22・23,13I10・14・15・19・ 20・23・24,13J1・2・6,14I1・2	中世	V b層	N-45° -E	(17.01)	0.48	(17.01)	0.35	0.10	0.41		半円形		
12・19	SX25	2次	13J8・13	中世	V b層			0.50		0.33	0.09	0.47		皿形		
12・19・20	SX27	2次	12J16・21,13I20・25,13J1・6 ・7・11・12・16・17	中世	V b層			0.80		0.59	0.07	0.42		皿形		
12・20	SX18	2次	14I15・20,14J11・12・16 ~ 18・22 ~ 24,15J1 ~ 4・7・8	中世	(V b層)			0.97		0.82	0.12	0.46	不整形	皿形		
10・20	SK77	2次	9H23・24	近世	(V b層)	N-60° -W	0.62	0.31	0.50	0.13	0.13	0.50	楕円形	皿形		

別表 2 土器観察表

凡 例

- 出土位置：遺構名・グリッド名・調査区名を記した。
- 器高指数：器高/口径×100
- 底径指数：底径/口径×100
- 法 量：口径・底径・器高を示す。活弧付の数値は残存値である。
- 胎 土：須恵器・土師器について胎土中に含まれる鉱物・小礫などについて記した。「石」は石英粒、「長」は長石粒、「雲」は金雲母あるいは黒雲母、「チ」はチャート、「焼」は焼土粒、「白」は白色凝灰岩、「角」は角閃石、「海」は海綿骨針を表す。  
分類は、A：新津丘陵産の可能性が高いもの、B：佐渡小泊産の可能性が高いもの、C：笹神丘陵を中心とした阿賀北地域産の可能性が高いものを表す。
- 色 調：『新版標準土色帖』（2003年版）[小山・竹原 1967]の記号を記した。
- 焼 成：酸化炭焼成・還元炭焼成の区別を記した。須恵器で酸化としたものは褐色あるいは褐色の色調で軟質なものを表す。白色・灰白色のものは含めていない。
- 手 法：特徴的な手法のみを記し、網羅的な記載は行っていない。底部の「糸切り」「へら切り」はいずれも回転台を用いたものである。「無調整」はそれが認められないもの。回転方向は回転台の回転方向を表す。底部調整やロクロズリ・ロクロナデから判断した。
- 遺 存 率：分数表示で遺存割合を示した。

版 No	報告書 No	出土位置		種別	器種	法 量 (cm)			器高 指数	底径 指数	胎 土		色 調	焼 成	手 法				遺 存 率			備 考		
		遺構名	グリッド			口径	底径	器高			含有物	胎土			外 面		内 面		底部	回転 方向	口縁部		底部	全体
21	1	SK125	5E19	須恵器	無台杯			(0.8)			石・白	A	灰白(2.5Y8/2)	還元 硬	ロクロナデ		ロクロナデ		へら切り					
21	2	SK127	5F9	土師器	小甕		8.3	6.1			石・長・雲		橙(7.5YR6/6)	酸化 硬	ロクロナデ		ロクロナデ						25/36	
21	3	P236	7F1	須恵器	杯蓋	(10.4)		(1.0)			海・白	A	灰(N4/)	還元 硬	ロクロケズリ		ロクロナデ							
21	4	SK141	2D16	須恵器	甕			(3.9)			石・長・白	A	灰黄褐(10YR5/2)	還元 硬	タタキメ		Ha	あて具痕		Ha				
21	5	SD87	2D16	須恵器	有台杯		8.5	(1.7)			石・雲・白	B	暗灰(N3/)	還元 硬	ロクロナデ		ロクロナデ						7/36	
21	6	SD87	3E8	須恵器	無台杯		(8.3)	(2.0)			雲・白	B	灰(N6/)	還元 硬	ロクロナデ		ロクロナデ		へら切り				12/36	
21	7	SD87	3E8	須恵器	無台杯		(6.9)	(1.2)			長・雲・白	B	灰(7.5Y6/1)	還元 硬	ロクロナデ		ロクロナデ		へら切り				8/36	
21	8	SD87	3E1	須恵器	無台杯		8.4				雲・白	A	灰白(7.5Y7/1)	還元 硬	ロクロナデ		ロクロナデ		へら切り				12/36	
21	9	SD87	3E14	須恵器	甕			(3.4)			石・白	B	灰(N6/)	還元 硬	タタキメ		Ha	あて具痕		Dc				
21	10	SD87	3E3	須恵器	甕			(3.4)			雲・白	A	灰(7.5Y6/1)	還元 硬	タタキメ・カキメ		(Ha)	あて具痕		Dc				
21	11	SD87	2D16	須恵器	甕		(4.4)				石・長・海・白	A	灰(5Y6/1)	還元 硬	タタキメ・カキメ		Hc	あて具痕		Dc				
21	12	SD87	3E4	須恵器	甕		(4.7)				石・長・白	C	灰(5Y6/1)	還元 硬	タタキメ		Ha	あて具痕		Da				自然釉
21	13	SD87	3E10	土師器	椀		(2.4)				石・長		橙(5YR6/6)	酸化 硬	ロクロナデ?		ロクロナデ?							
21	20	SD88	2D17	須恵器	横瓶		(6.1)				海・白	D	黒(5Y2/1)	還元 硬	カキメ			あて具痕		Da				自然釉
21	21	SD88	3E16	土師器	小甕			(2.5)			石・長・雲		にぶい褐(7.5YR6/3)	酸化 硬	ナデ									
22	24	SK44	9H3	須恵器	無台杯	12.5	8.7	3.0	24.0	69.6	長・海・白	B	灰(10Y6/1)	還元 硬	ロクロナデ		ロクロナデ		へら切り			4/36	8/36	6/36
22	25	SK44	9H3	須恵器	甕			(5.2)			石・長・雲	B	灰オリーブ(7.5Y5/3)	還元 硬	タタキメ		Ha	あて具痕						自然釉かかる。肩部破片
22	26	SK38	9H23	土師器	無台椀	11.5	5.4	4.8	41.7	47.0	石・長・雲		橙(7.5YR7/6)	酸化 軟	ロクロナデ		ロクロナデ		糸切り	右		36/36	36/36	36/36
22	27	SK23	13J17	須恵器	短頸壺	(9.1)		(2.0)			長・白	B	灰(N4/)	還元 硬	ロクロナデ		ロクロナデ						3/36	
22	28	SD42	9H18・23	須恵器	甕			(15.2)			石・長・白	A	暗オリーブ灰(2.5GY4/1)	還元 硬	タタキメ		Ha	あて具痕		Dc				
22	30	SD36	10G9	須恵器	短頸壺	(9.0)		(2.2)			長・白	A	灰(N5/)	還元 軟	ロクロナデ		ロクロナデ					5/36		断面中心部やや焼成不良
22	31	SD36	10G8	青磁	椀			(2.1)					灰白(N8/)		ロクロナデ		ロクロナデ							
22	32	SD36	11H1	珠洲焼	掃鉢			(3.6)			長・海		灰白(N7/)	還元 硬	ロクロナデ		ロクロナデ		糸切り					
22	34	SX67	14I8	須恵器	長頸瓶		10.0	(2.0)			石・長・白	B	灰(5Y5/1)	還元 硬	ロクロナデ		ロクロナデ		へら切り				7/36	
22	37	IV層	2E25	土師器	甕	(15.6)		(3.2)			長・海		橙(5YR6/8)	酸化 硬	ロクロナデ									
22	38	IV層	2E24	土師器	甕			(2.7)			長・海・白		灰黄褐(10YR6/2)	酸化 硬	ナデ			ハケメ・ナデ						
22	39	IV層	2E25	土師器	甕			(1.6)			石・雲・海・白		にぶい黄褐(10YR7/3)	酸化 硬	ハケメ?			ナデ?						
22	40	IV層	2E25	土師器	甕			(2.1)			石・長・雲・海・白		にぶい黄橙(10YR7/4)	酸化 硬	ハケメ			ナデ?						
22	41	IV層	2E25	土師器	甕		9.0	(2.6)			石・長・雲・海・白		にぶい黄橙(10YR7/3)	酸化 硬	ハケメ・指オサエ			ハケメ?・ナデ					3/36	
22	42	IV層	1D21	須恵器	杯蓋	(12.1)		(1.2)			石・雲・白	B	灰(N5/)	還元 硬	ロクロケズリ									
22	43	V a層	7F8	須恵器	短頸壺蓋	(12.2)		(2.2)			雲・白	A	灰黄(2.5Y6/2)	還元 硬	ロクロケズリ		ロクロナデ						2/36	
22	44	V a層	2D19	須恵器	無台杯	12.2	8.4	3.4	27.9	68.9	チ・白	A	にぶい黄橙(10YR7/3)	還元 硬	ロクロナデ		ロクロナデ		へら切り	(右)		17/36	26/36	
22	45	V a層	2D19	須恵器	無台杯	11.2	8.2	2.9	25.9	73.2	長・白	C	灰(N6/)	還元 硬	ロクロナデ		ロクロナデ		へら切り	(右)		1/36	14/36	
22	46	攪乱	5F16	須恵器	甕			(3.0)			石・白	B	灰(N4/)	還元 硬	タタキメ			あて具痕		Ha				
22	47	V a層	6F1	土師器	小甕			(2.0)			石・チ・海		橙(2.5YR6/8)	酸化 硬	ナデ									
23	48	V a層	7F6	土師器	鍋			(12.6)			石・長・雲		浅黄橙(7.5YR8/6)	酸化 硬	ハケメ									外面剥離著しい
23	49	I層	9G2	須恵器	有台杯	16.3	9.8	5.6	34.4	60.1	石・長	D	灰(10Y6/1)	還元 硬	ロクロナデ		ロクロナデ		へら切り			3/36	8/36	5/36
23	50	I層	10H13	須恵器	有台杯			(2.7)			石・長・白	D	灰(N5/)	還元 硬	ロクロナデ・ロクロケズリ		ロクロナデ		へら切り				6/36	
23	51	I層	9G2	須恵器	無台杯	12.0		(2.5)			長・白	B	暗オリーブ灰(2.5GY3/1)	還元 硬	ロクロナデ		ロクロナデ						4/36	
23	52	I層	9G3	須恵器	無台杯	12.6		(2.9)			長・白	B	灰(7.5Y6/1)	還元 硬	ロクロナデ		ロクロナデ						4/36	

図版 No.	報告書 No.	出土位置		種別	器種	法量 (cm)			器高 指数	底径 指数	胎土		色調	焼成	手法				遺存率			備考		
		遺構名	グリッド			口径	底径	器高			含有物	胎土			外面		内面		底部	回転 方向	口縁部		底部	全体
23	53	I層	9G2	須恵器	無台杯	13.0	(2.9)				石・長・白	B	灰(5Y6/1)	還元 硬	ロクロナデ						5/36			
23	54	I層	9G2	須恵器	無台杯	(13.5)	(2.5)				長・白	B	灰白(7.5Y7/1)	還元 硬	上半部ナデ・下半部ナメ	ロクロナデ					3/36			
23	55	I層	9G3	須恵器	無台杯		8.6	(2.3)			長・白	B	灰(7.5Y6/1)	還元 硬	ロクロナデ				ヘラ切り	左		9/36		
23	56	I層	9G2	須恵器	無台杯		7.5	(1.9)			長・白	B	オリーブ灰(5GY5/1)	還元 硬	ロクロナデ				ヘラ切り			5/36		
23	57	I層	9G2	須恵器	無台杯		8.0	(2.3)			長・白	B	灰(7.5Y6/1)	還元 硬	ロクロナデ				ヘラ切り			9/36		底面にヘラ起こし痕あり
23	58	I層	9G2	須恵器	無台杯		7.5	(1.2)			長・海・白	B	オリーブ灰(5GY5/1)	還元 硬	ロクロナデ				ヘラ切り			6/36		
23	59	I層	9G2	須恵器	無台杯		8.1	(1.5)			石・長	B	灰(10Y6/1)	還元 硬	ロクロナデ				ヘラ切り			7/36		
23	60	I層	9G2	須恵器	無台杯		8.0	(2.3)			石・長	B	灰(5Y6/1)	還元 硬	ロクロナデ				ヘラ切り			8/36		
23	61	II層	14J19	須恵器	無台杯		8.2	(1.9)			長・白	B	灰白(N7/)	還元 軟	ロクロナデ				ヘラ切り			6/36		
23	62	I層	9G2	土師器	鍋	38.0	(7.6)				石・長・雲・チ		浅黄橙(7.5YR8/4)	酸化 軟	ロクロナデ						6/36			
23	63	I層	9G2	土師器	鍋			(5.4)			石・長・チ		褐灰(10YR4/1)	酸化 硬	タタキメ		(Hc)		ハケメ・あて具痕	(Da)				
23	64	I層	9G2	白磁	玉縁椀	(14.7)	(3.4)						灰白(10Y8/1)		ロクロナデ						3/36			
23	65	II層	13I15	珠洲焼	甕			(5.0)			石		灰(N5/)		タタキメ									

別表3 土器転用砥石・石製品観察表

図版No.	報告書No.	出土位置		層位	時代	器種	石材など	法量				備考
		遺構名	グリッド					長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	
22	35	SX67	14J4	I	古代?	砥石	須恵器転用	(9.5)	(3.8)	1.3	65.0	須恵器甕片を転用。両面使用痕あり。内面が特に明瞭。
23	66		14I10	I	中世?	砥石	珠洲焼転用	(8.1)	(5.5)	1.2	82.0	珠洲焼甕片を転用。外面のみ使用痕あり。
22	29	P171	10H10	I		石錘		9.9	5.4	3.7	331.0	上部にくびれがあり、ヒモズレ痕か?。砥石の可能性もある。
22	33	SD76	12I12	I	古代	砥石	凝灰岩	(9.7)	(6.2)	(4.6)	304.0	4面とも使用
23	67		12I10	I	近世	硯	泥岩	(8.4)	(3.6)	(1.3)	41.0	「海」から「陸」部分にかけての破片。
21	18	SD87	3E15	I	中世?	不明石製品	凝灰岩	(15.6)	(14.5)	(5.5)	(1,138)	表面に擦痕があるが、使用痕ではないようである。
21	19	SD87	3E14	I		加工軽石	軽石	6.3	3.5	2.0	14.0	
22	36	SX68	14I8	I		加工軽石	軽石	(4.5)	(2.8)	(3.0)	18.0	切断面に擦痕と思われる痕あり。砥石として利用した性能もある。

別表4 木製品観察表

図版No.	報告書No.	出土位置		層位	時代	器種	法量			備考
		遺構名	グリッド				口径・長さ (cm)	底径・幅 (cm)	器高・厚さ (cm)	
21	14	SD87	2D25	I	近世	漆器椀	口径(11.4)	底径 8.8	器高(2.0)	底部に「サー」屋号?記す。
21	15	SD87	3E9	I	近世	柄杓頭部	口径 9.4	底径 4.7	器高 2.5	内外面ともにロクロ目(ロクロ挽き痕)明瞭。
21	16	SD87	3E2	I	近世	桶側板	長さ(18.0)	幅 4.9	厚さ 0.7	表面に「山川」の焼印あり
21	17	SD87	2D25	I	近世	桶蓋板	長径(20.4)	短径 20.3	厚さ 0.9	把手が付いていた痕跡あり。
21	22	SD88	2D16	I	近世	漆器椀	口径(9.6)	底径 4.9	器高(3.2)	底部に屋号?記す。
21	23	SD88	2D23	I	近世	桶側板	長さ(16.1)	幅 7.2	厚さ 1.0	



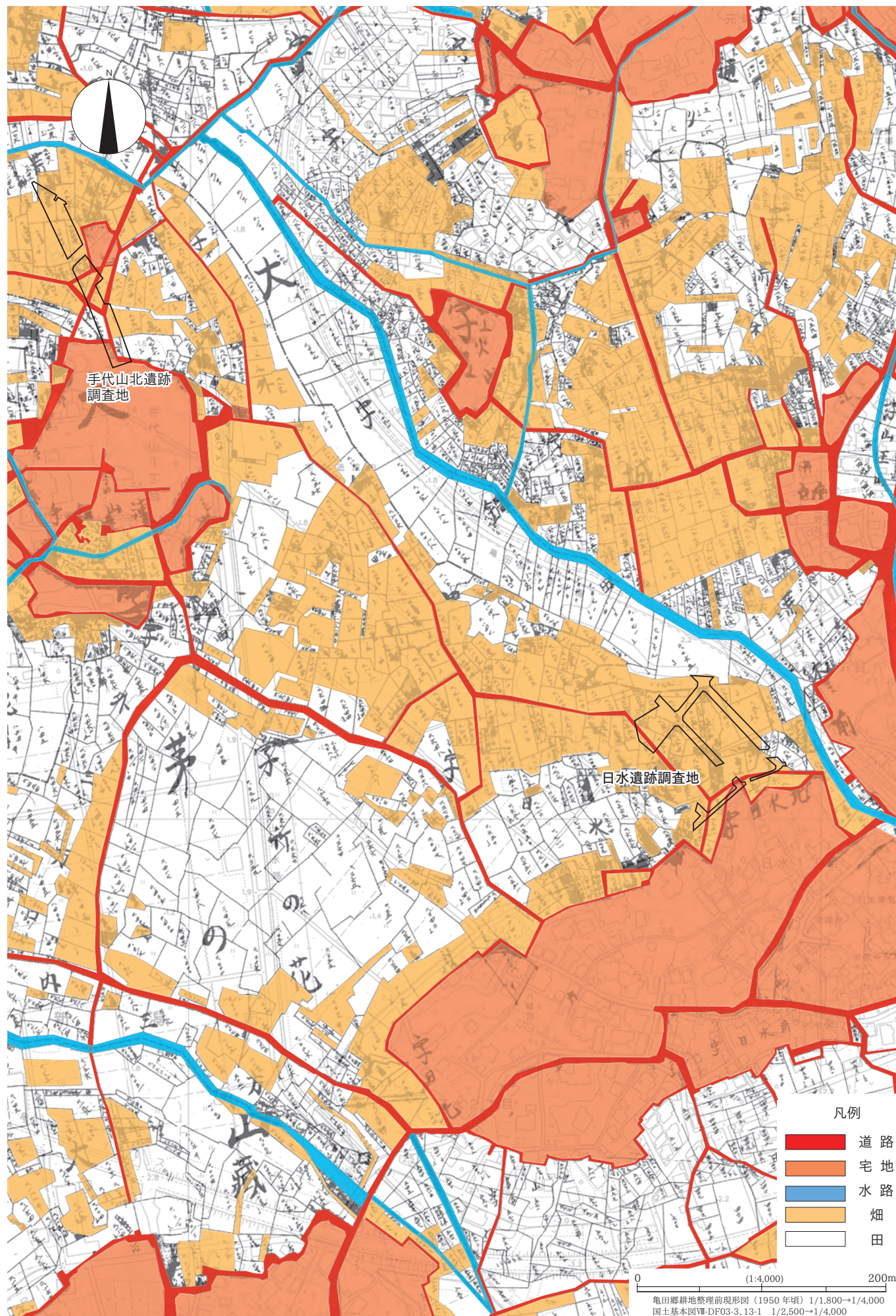
# 図 版



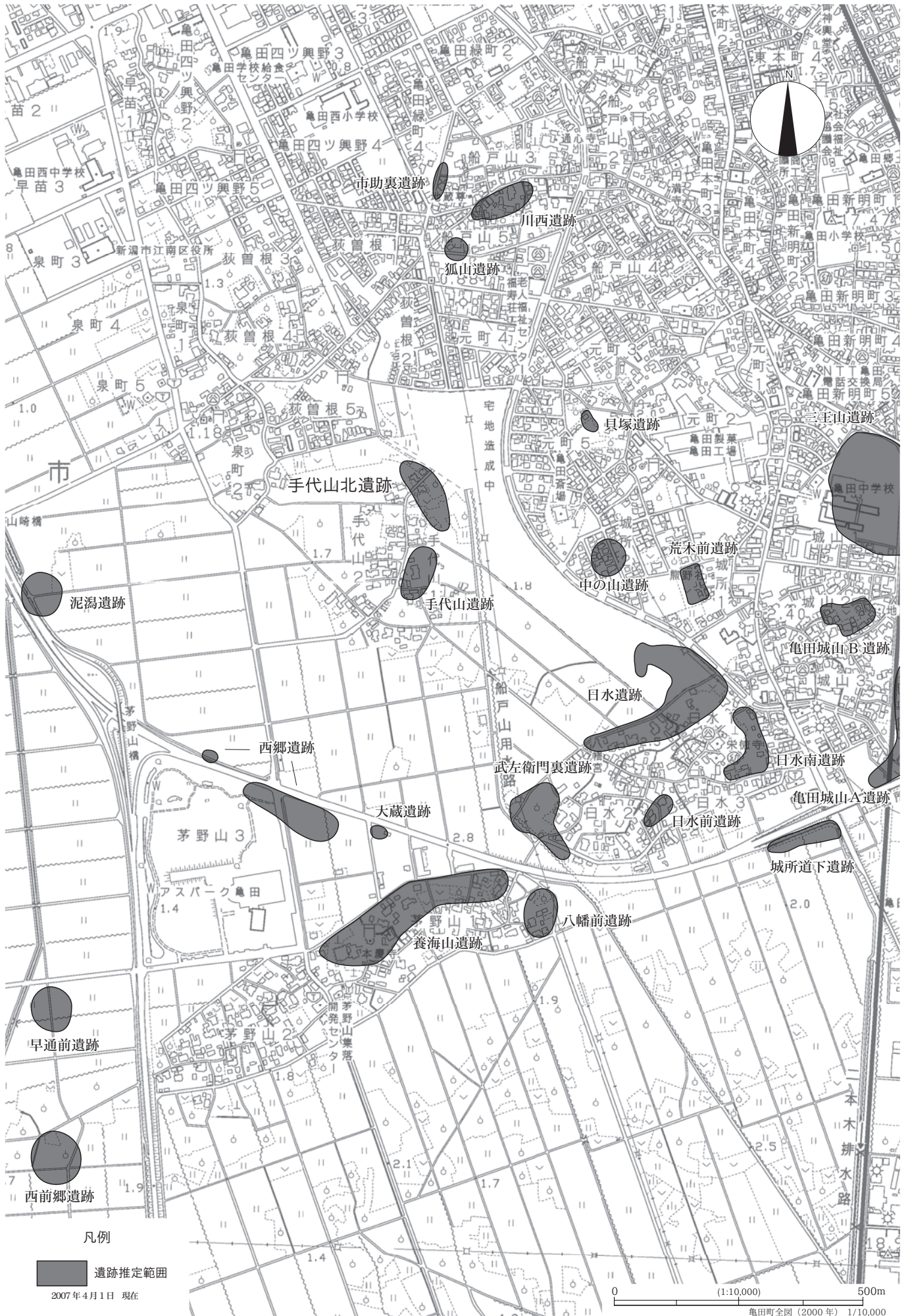












凡例

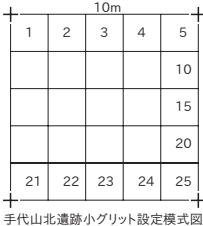
遺跡推定範囲

2007年4月1日 現在


0 (1:10,000) 500m

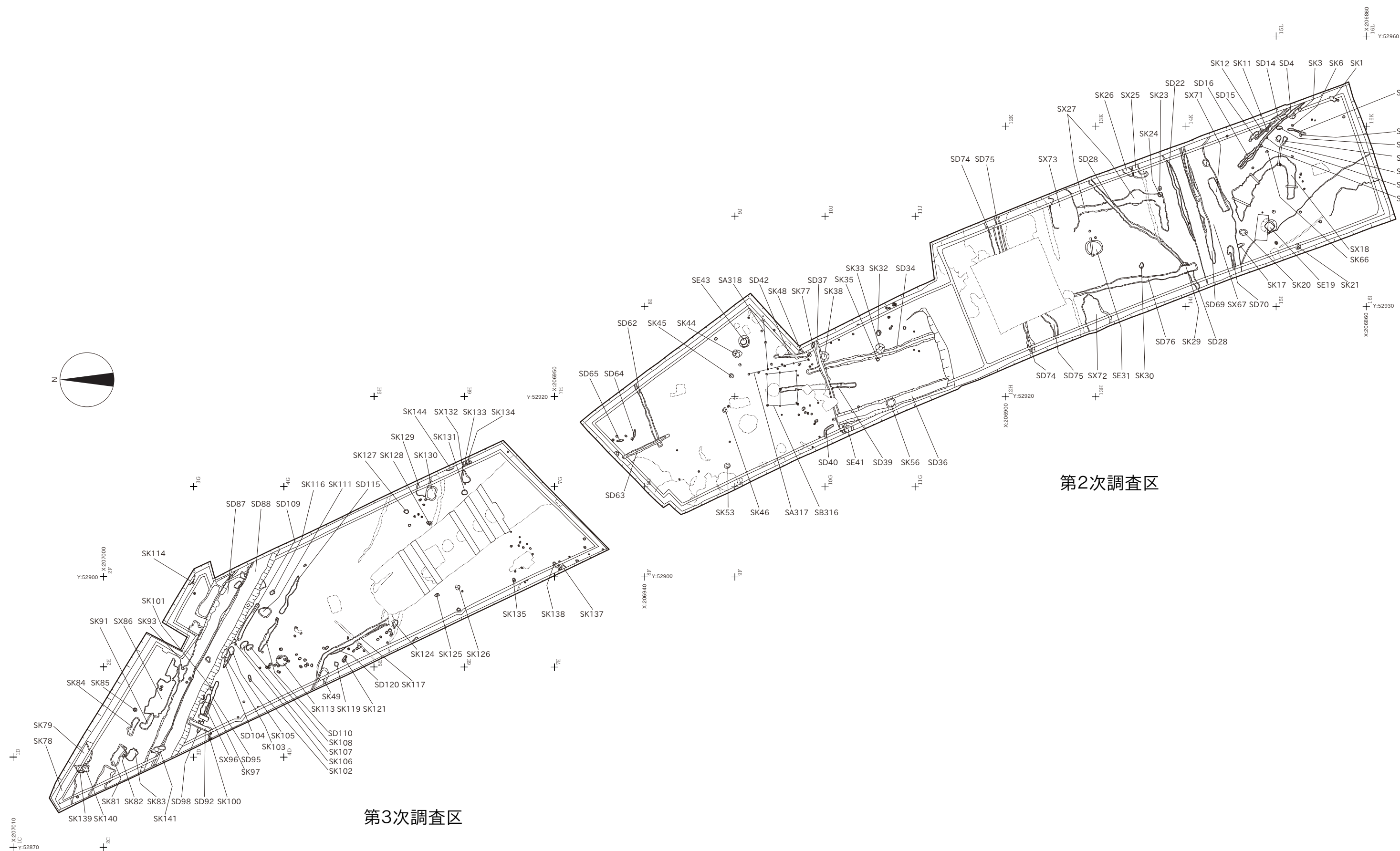
亀田町全図 (2000年) 1/10,000





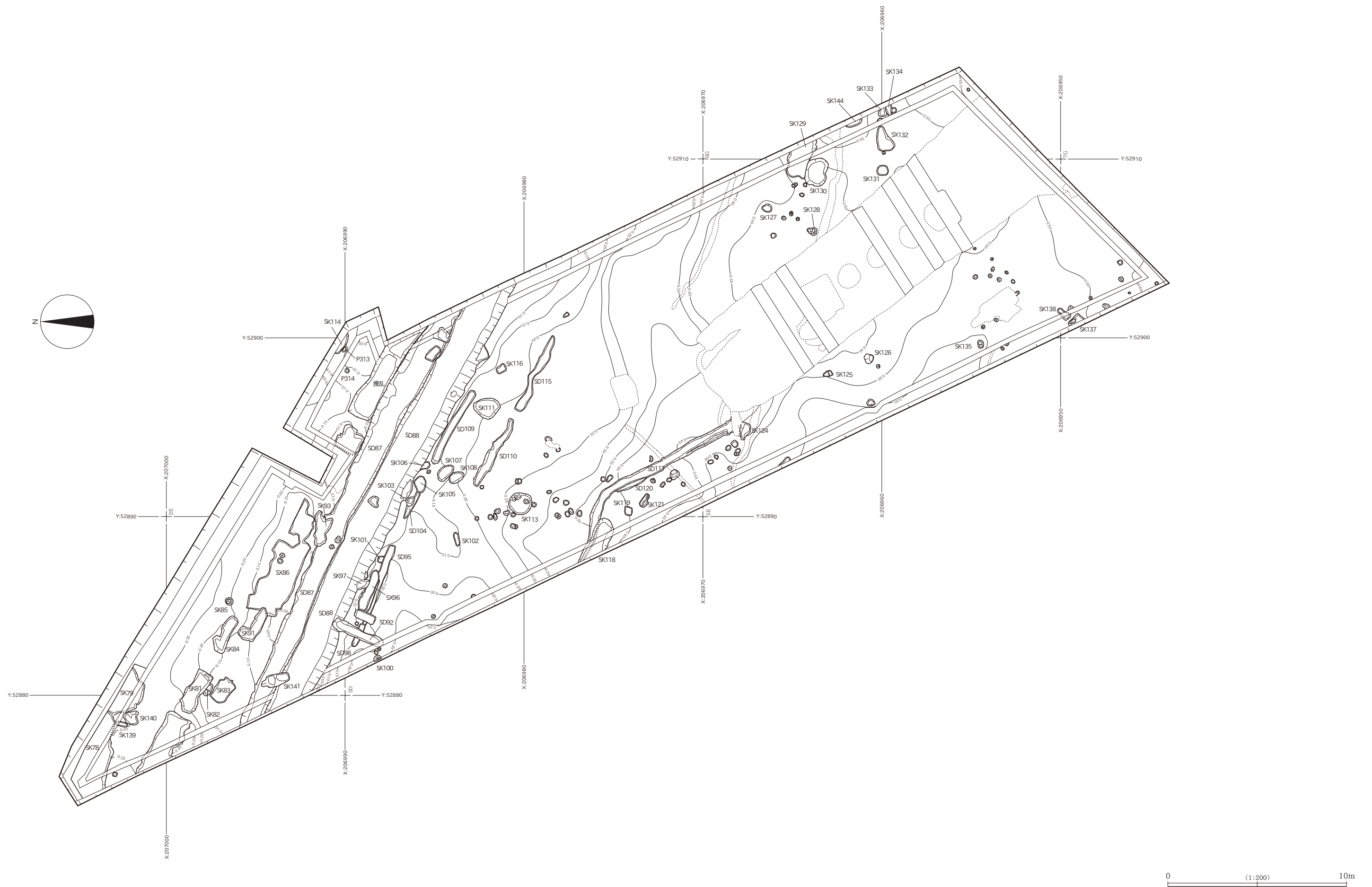
凡例

 手代山北遺跡  
発掘調査範囲

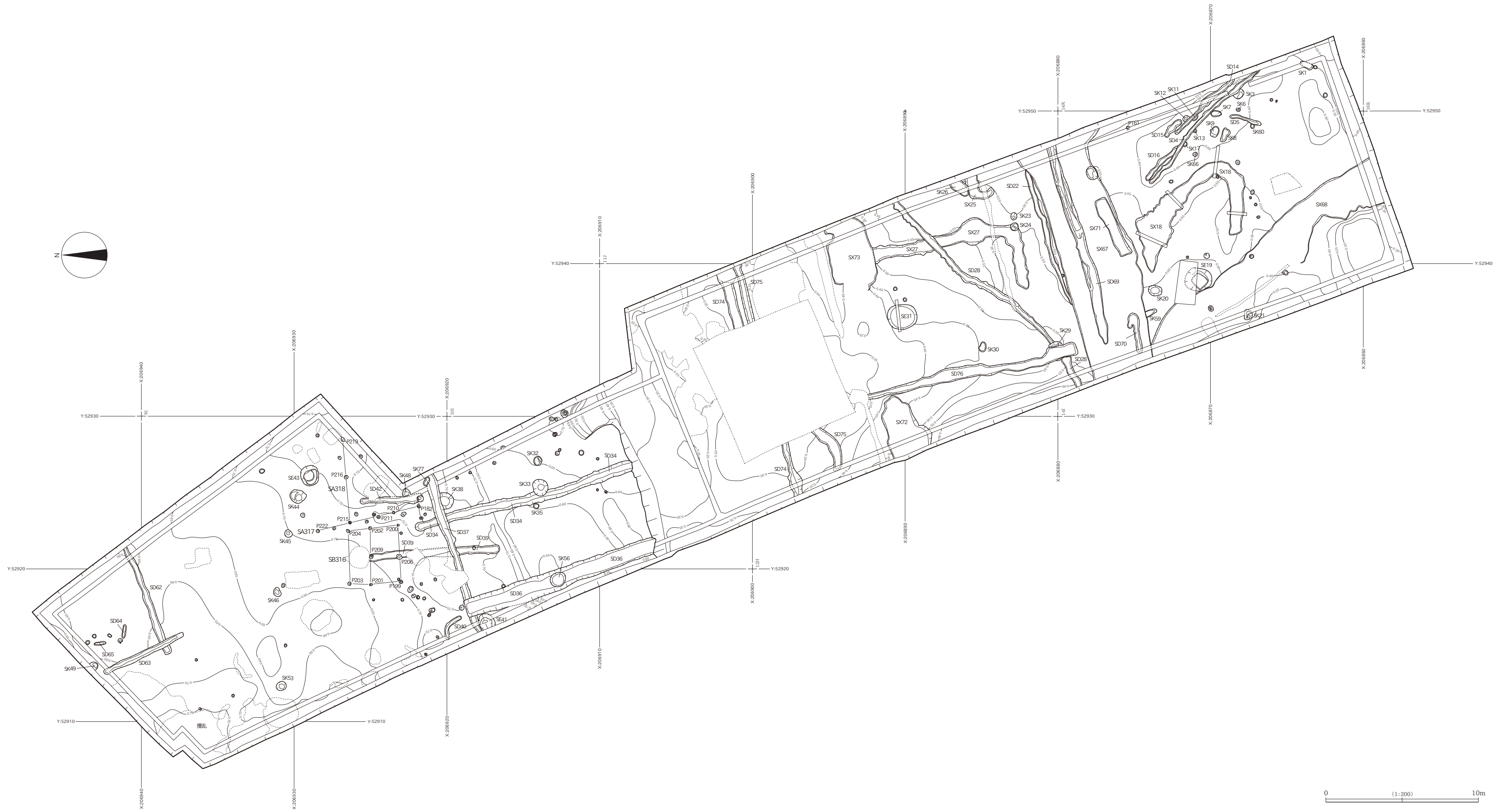


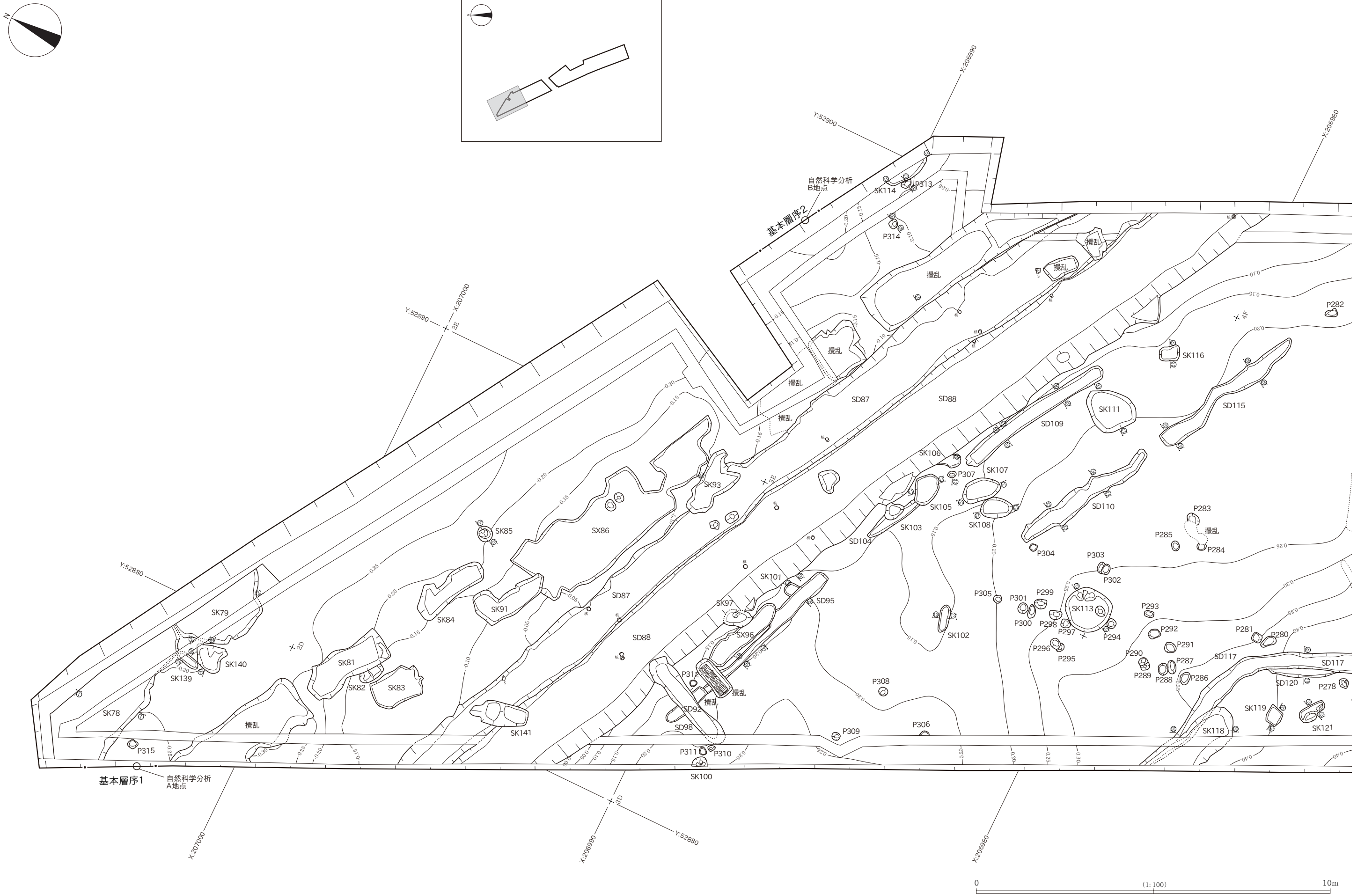
第2次調査区

第3次調査区

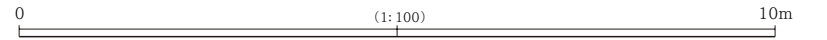
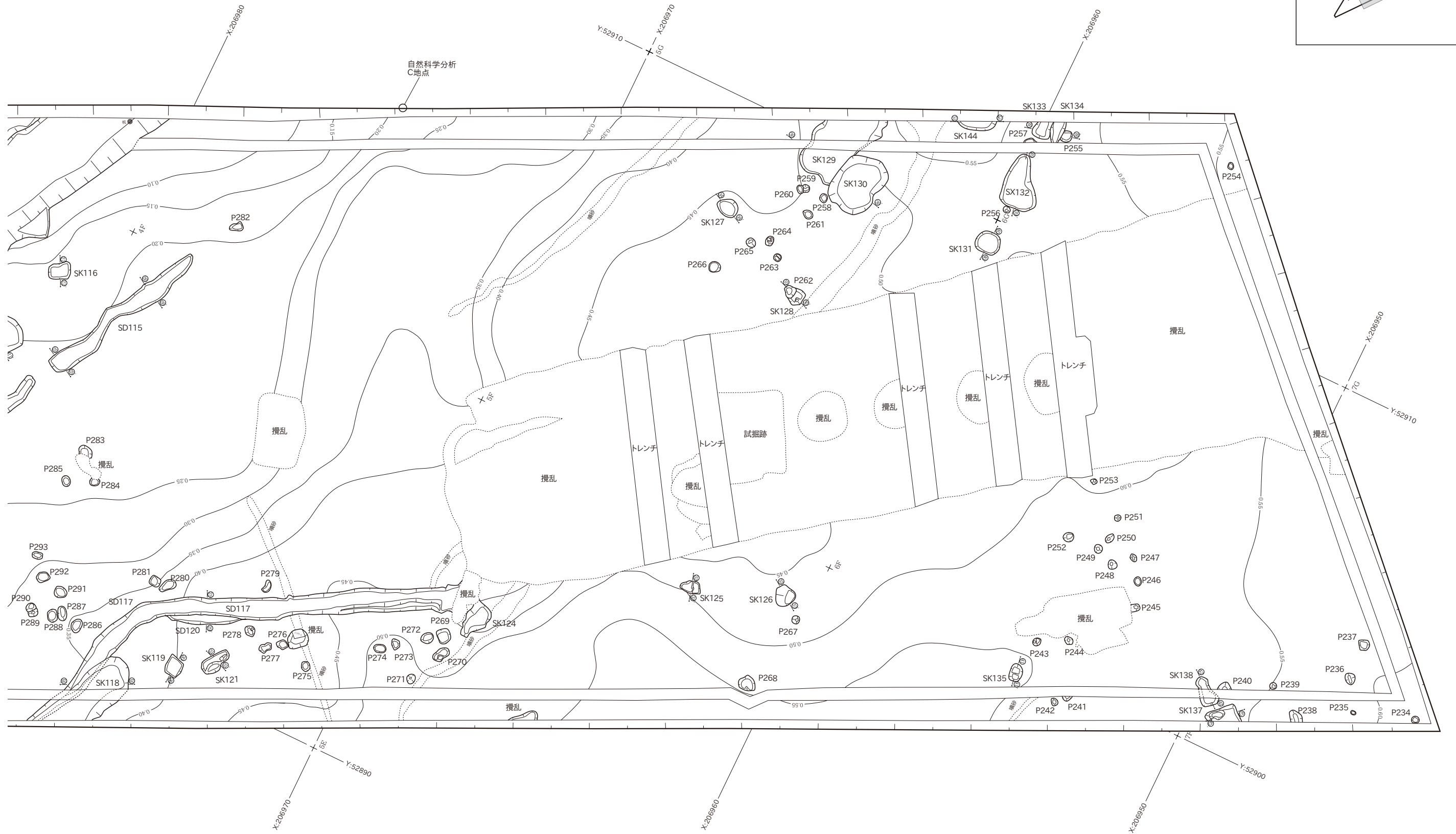
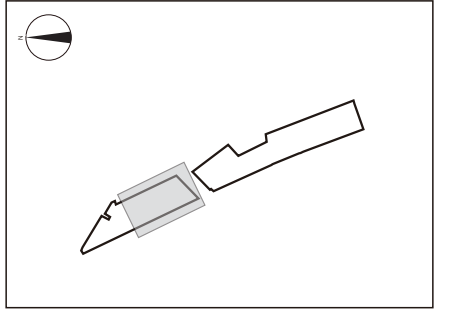
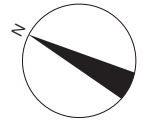


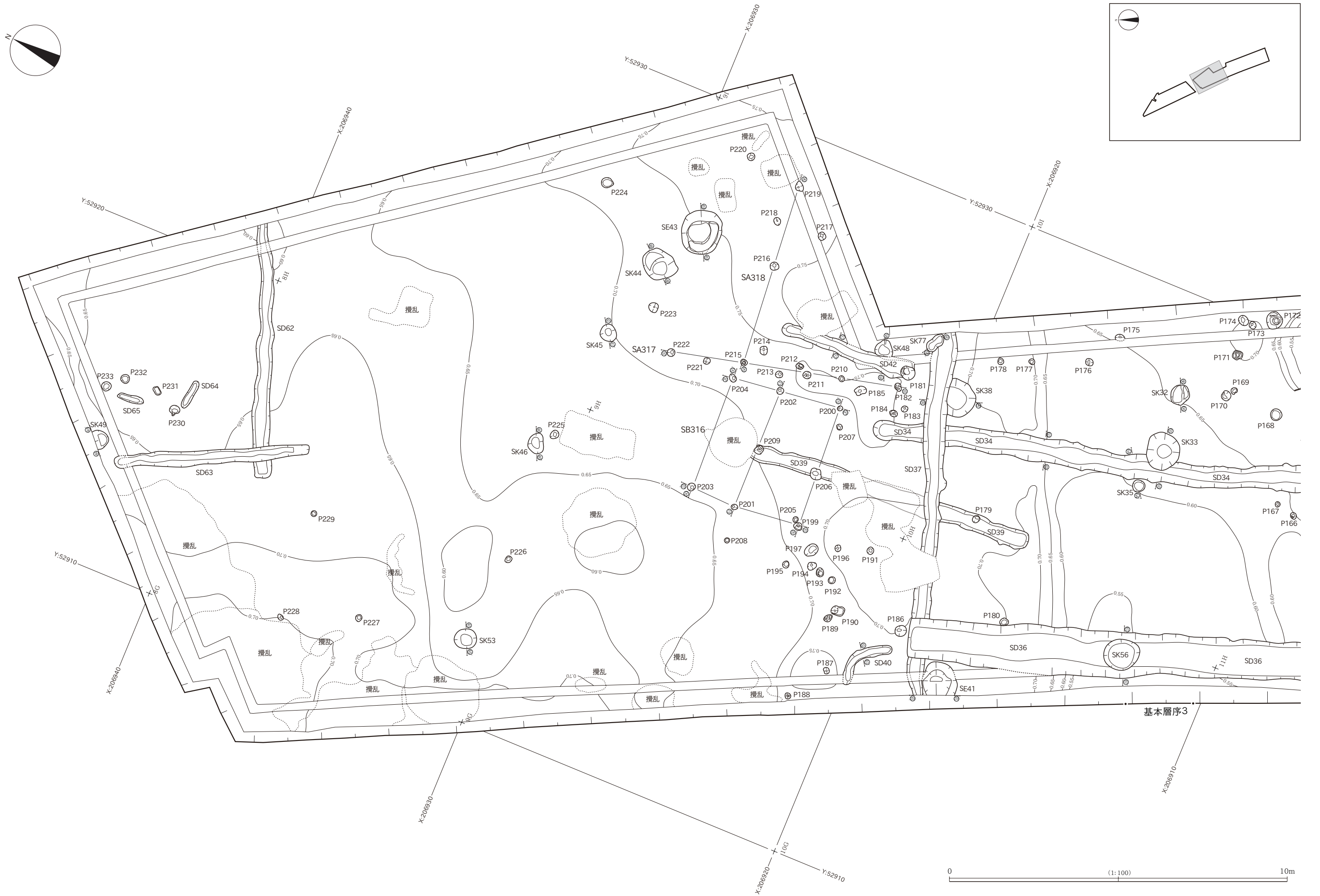


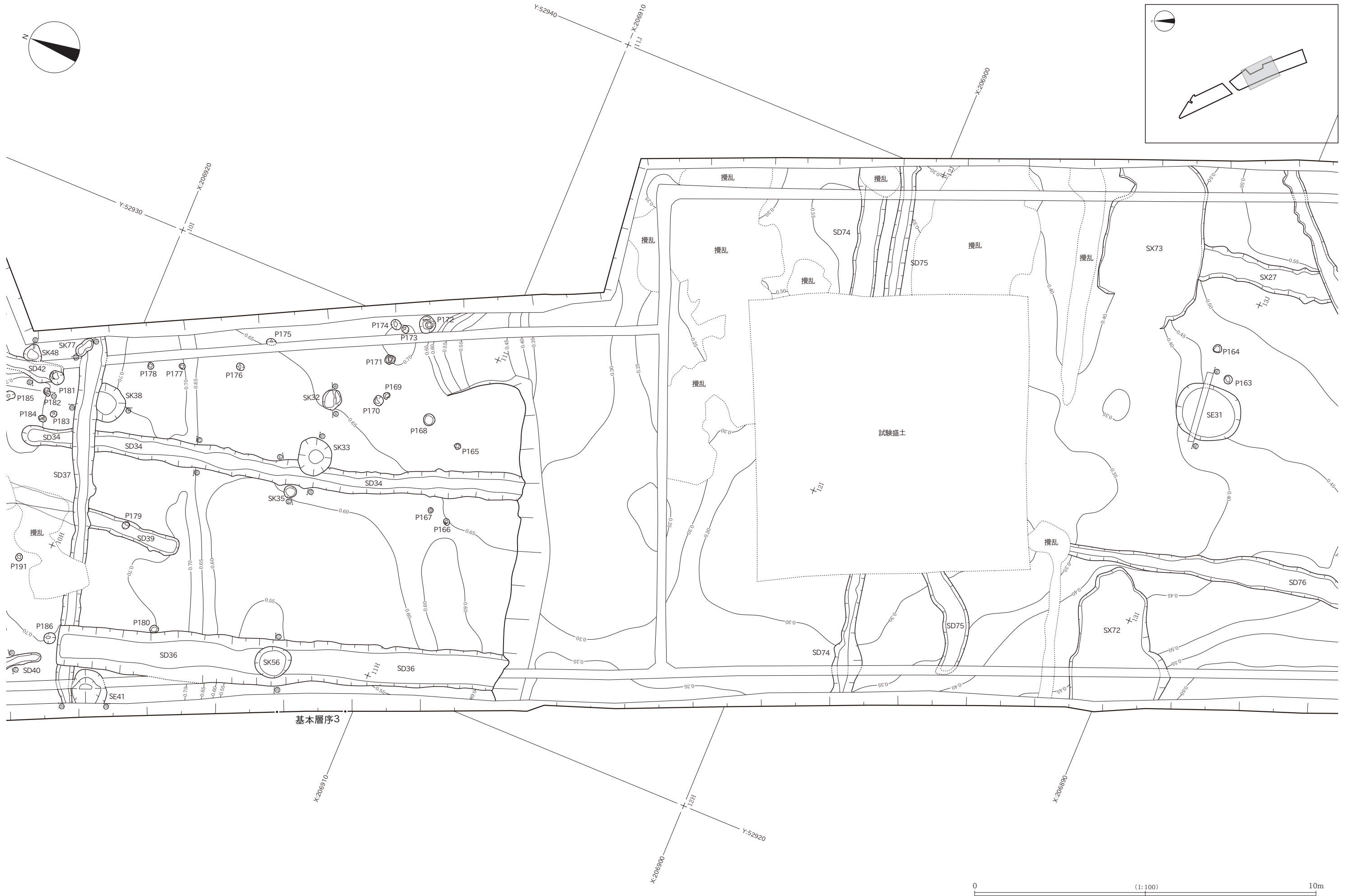


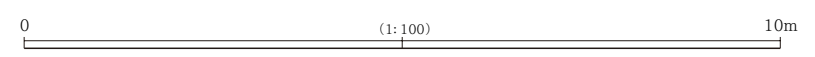
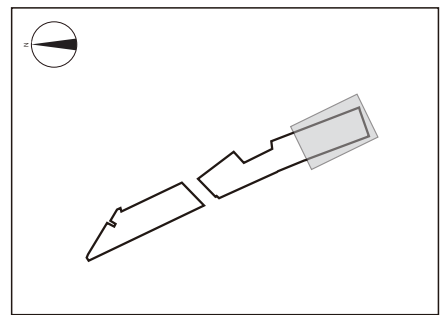
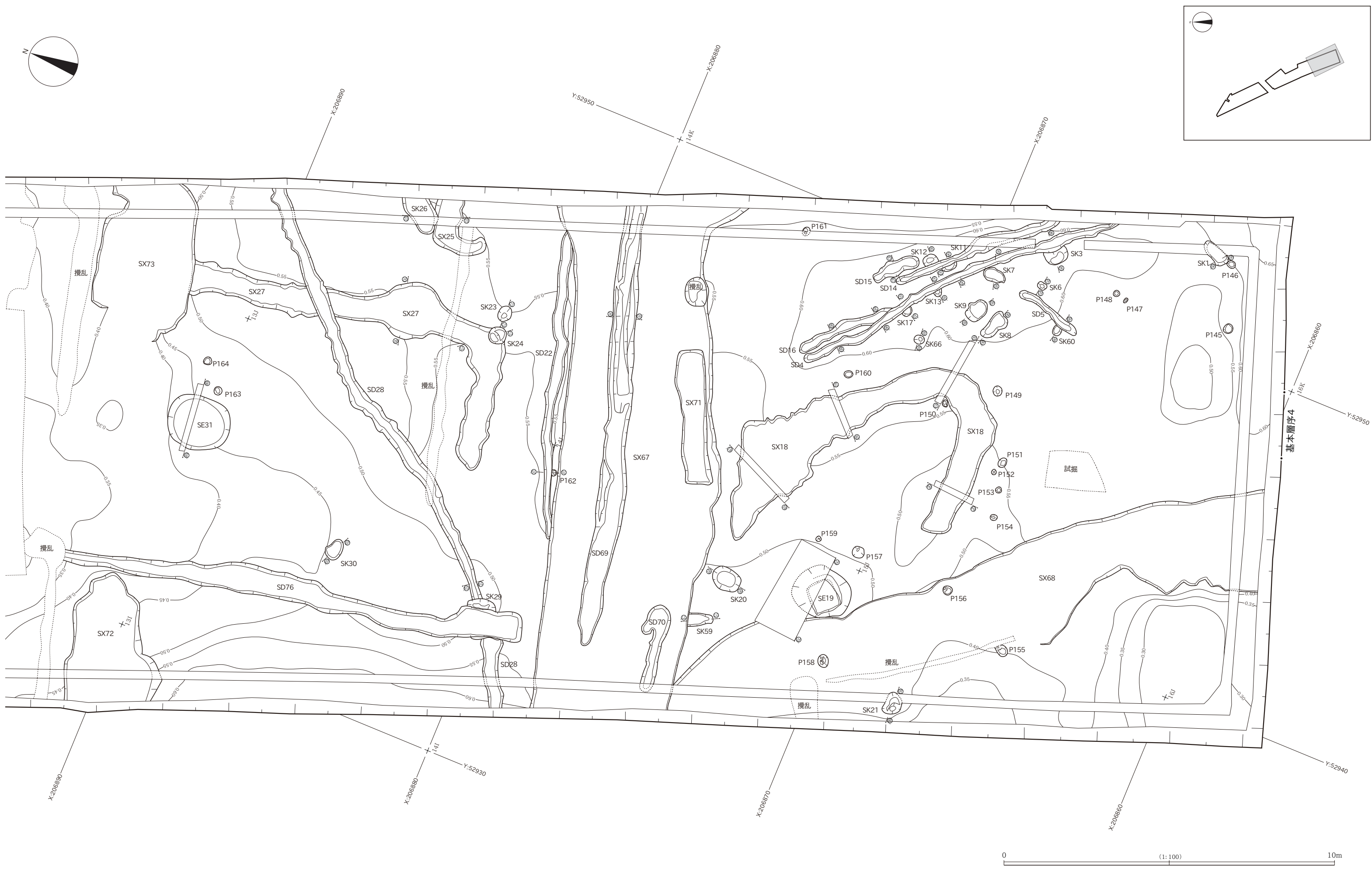




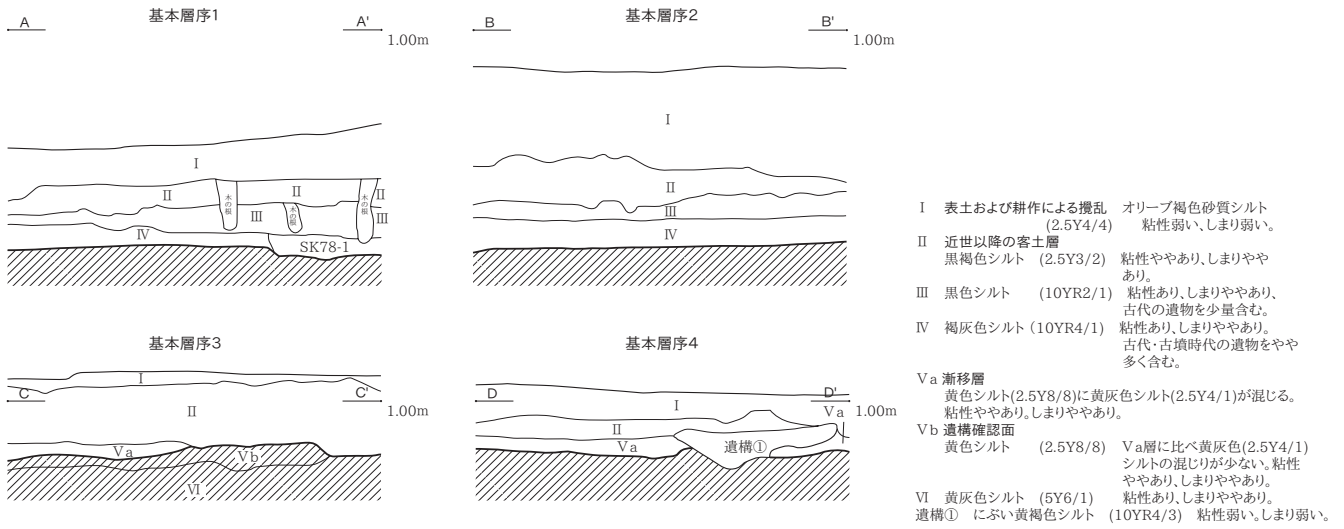




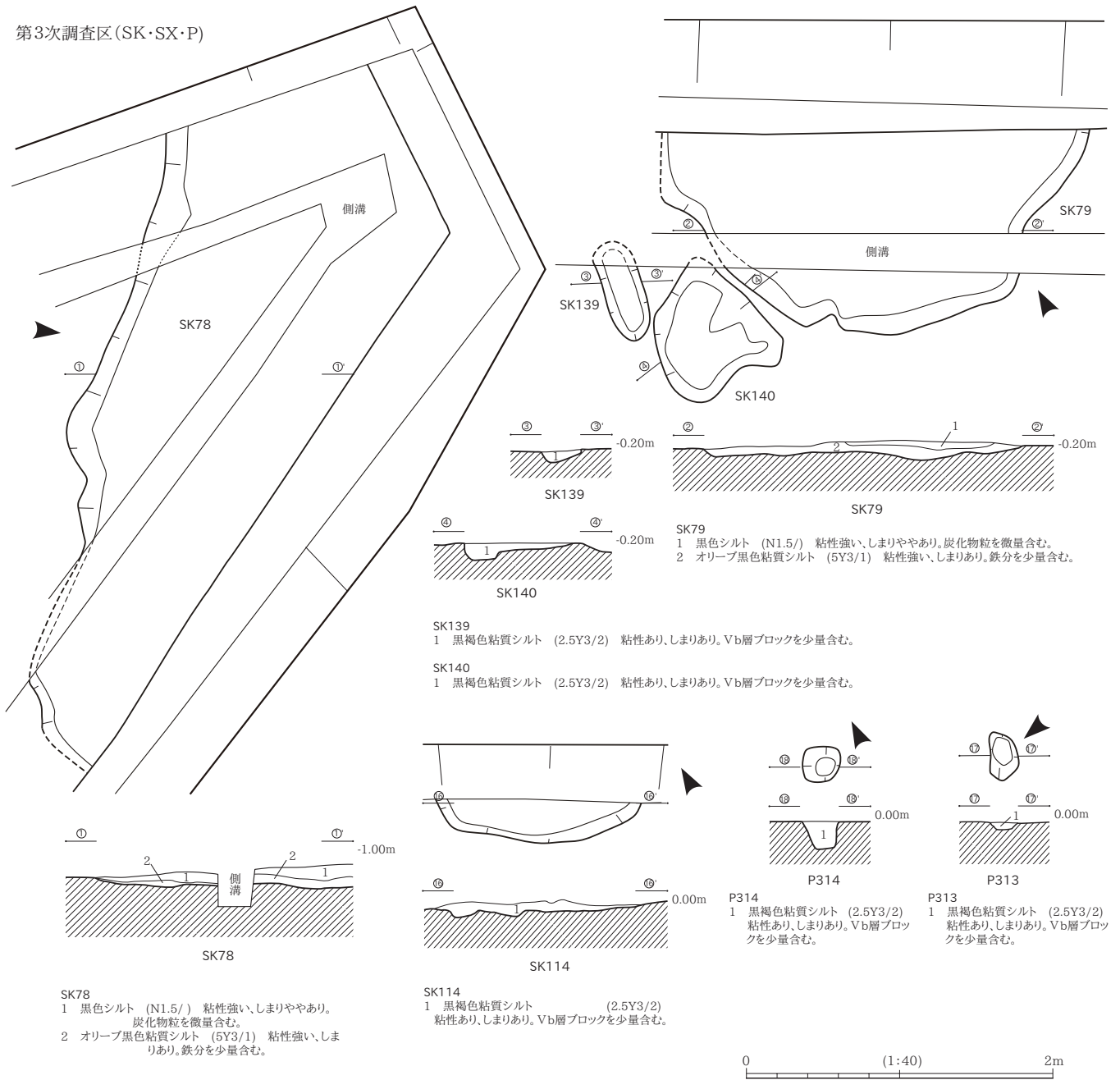






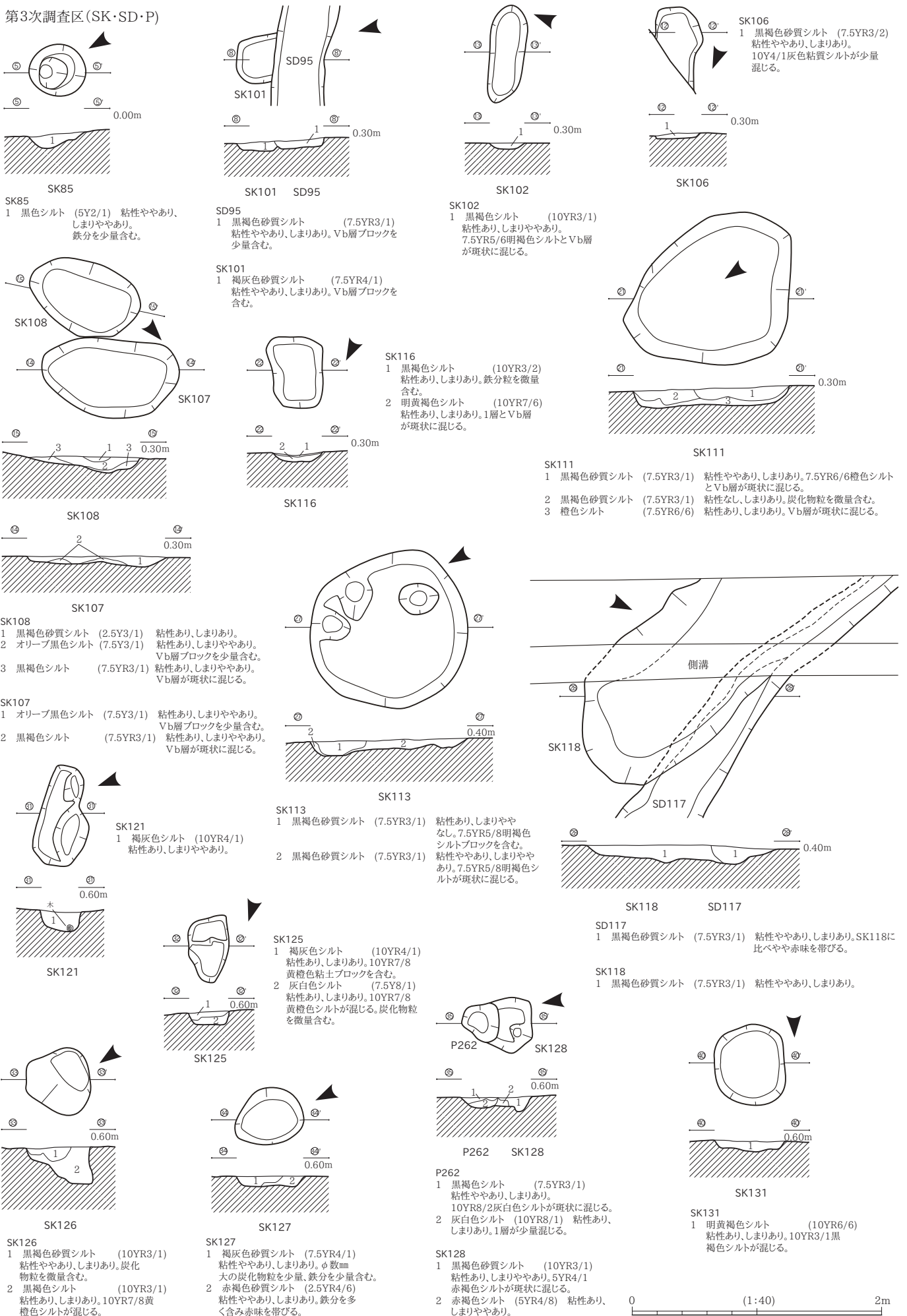


第3次調査区(SK・SX・P)

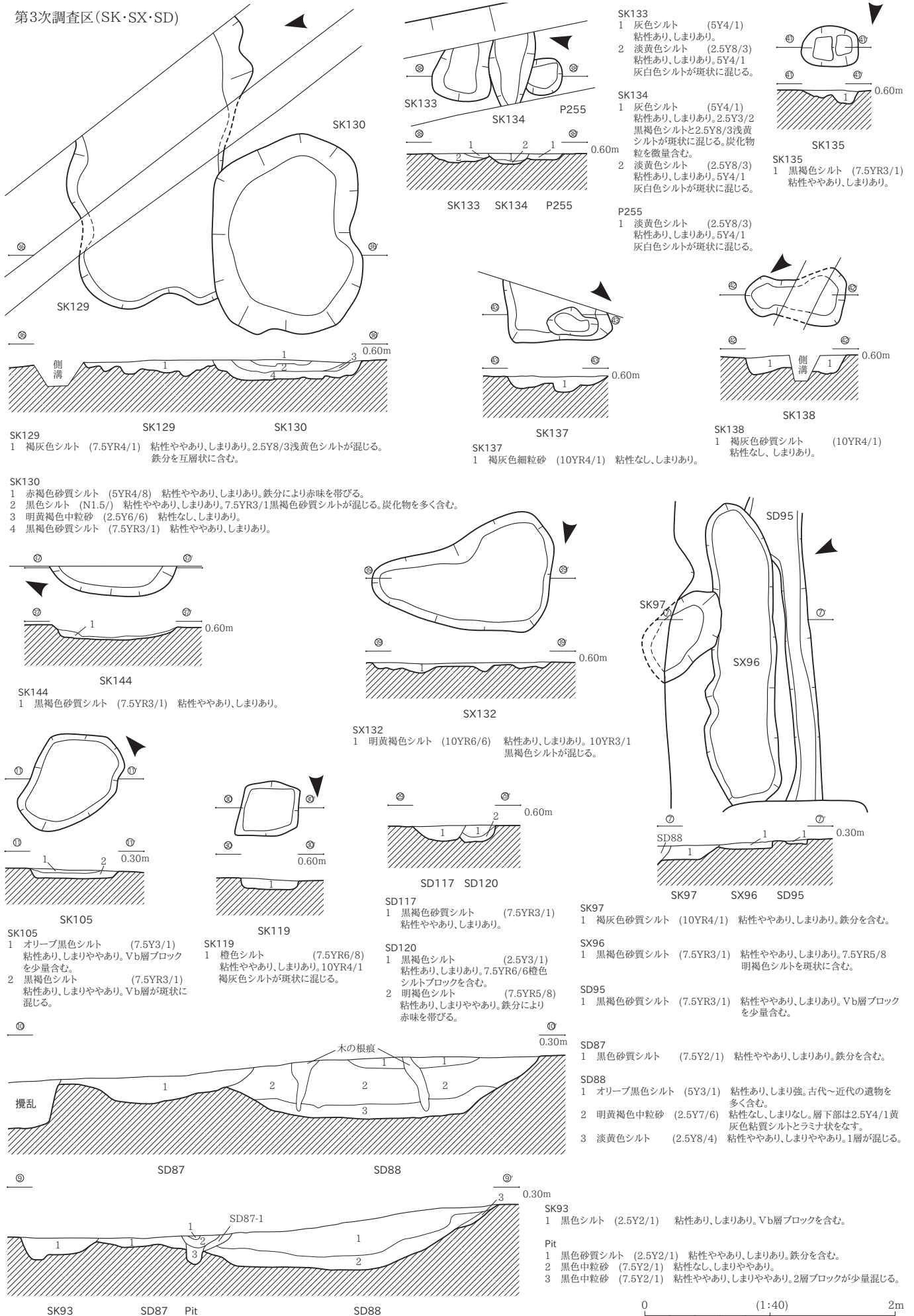




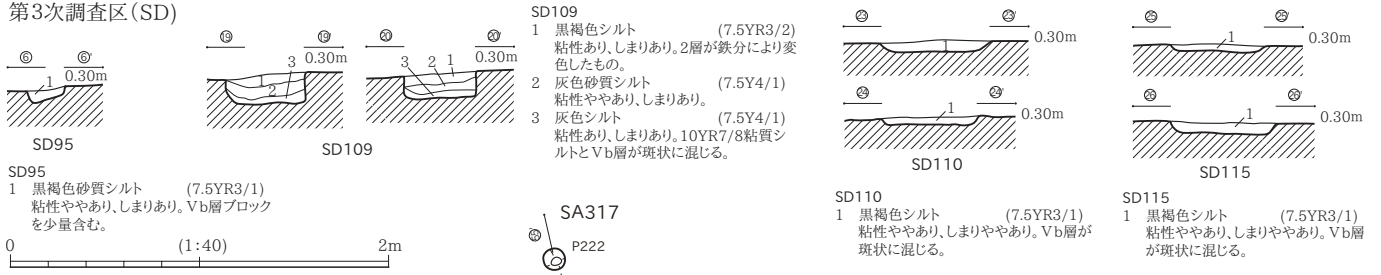
第3次調査区(SK・SD・P)



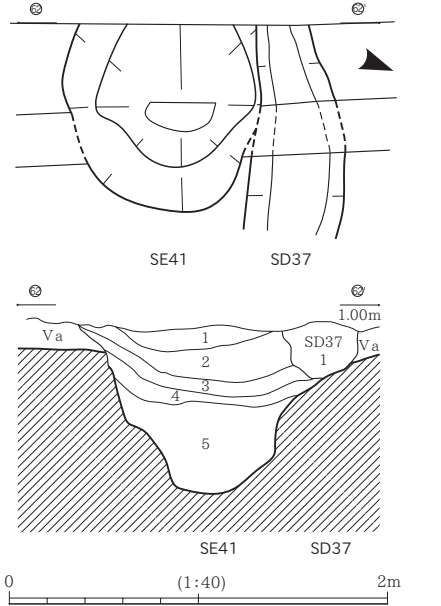
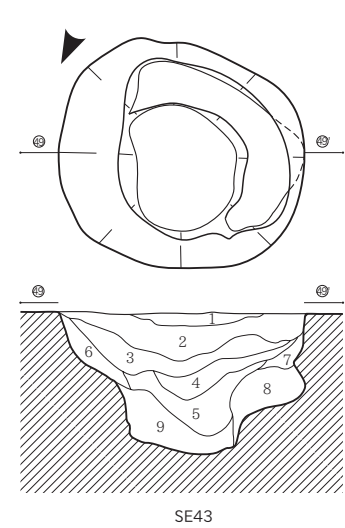
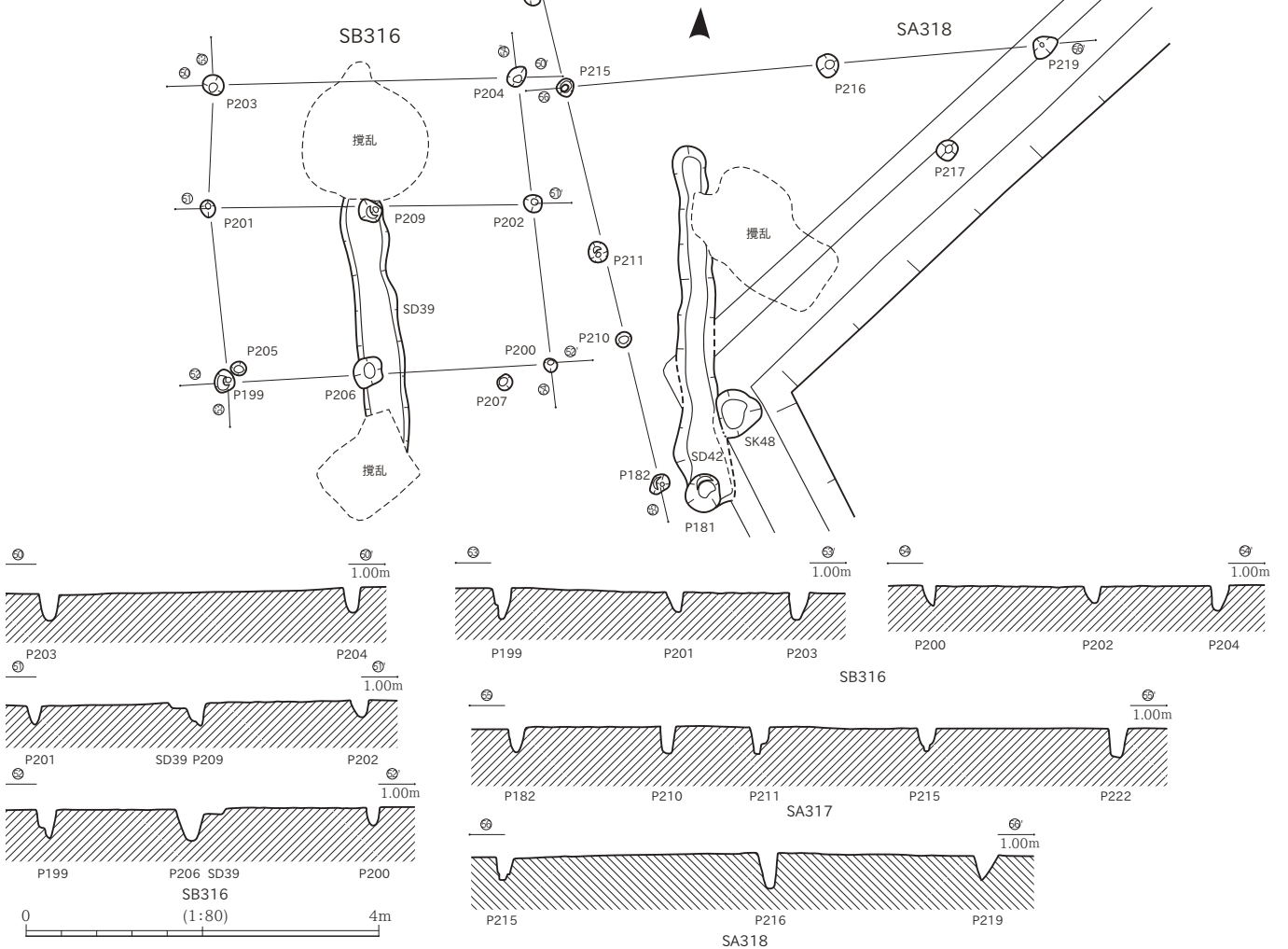
第3次調査区(SK・SX・SD)



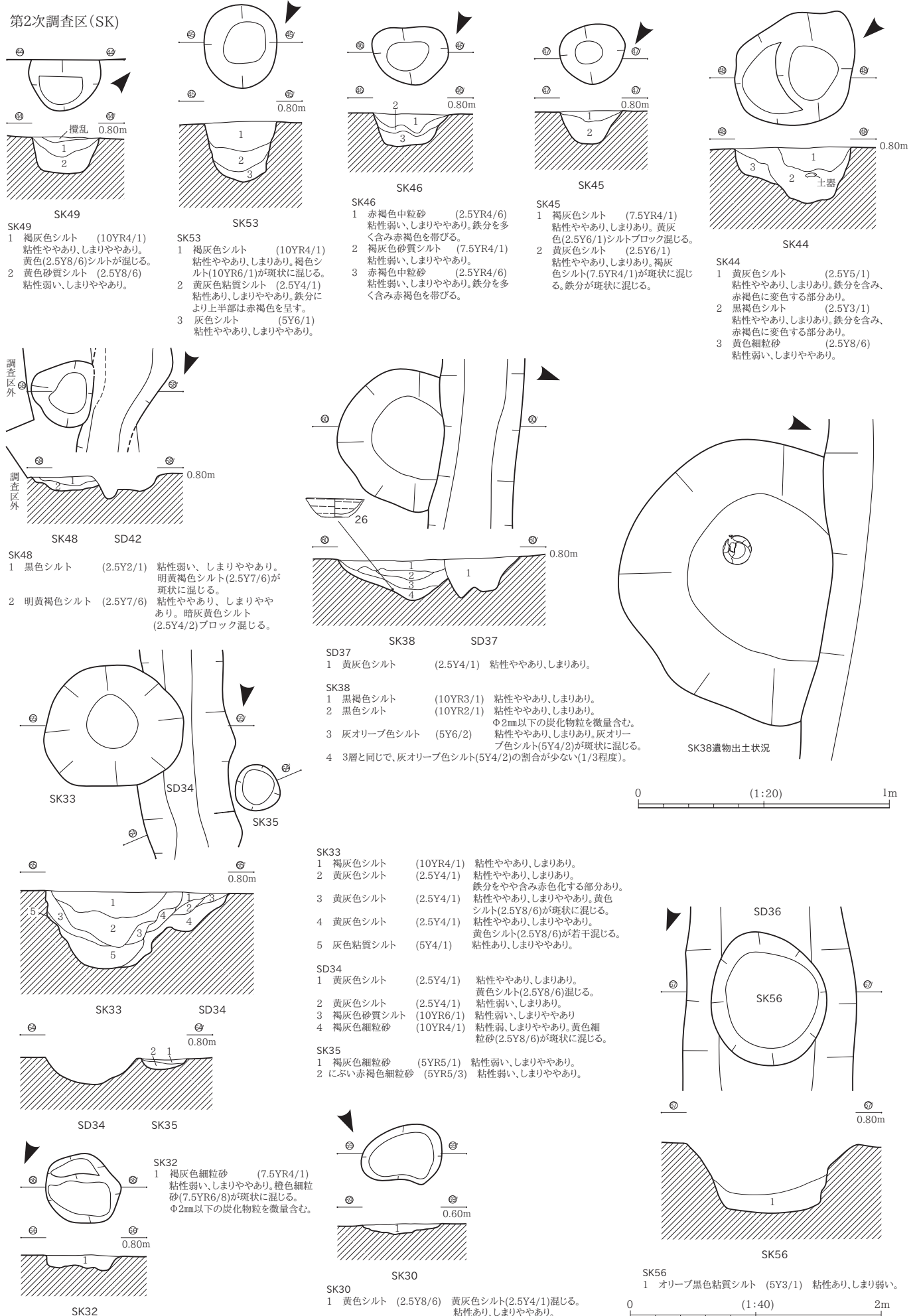
第3次調査区(SD)



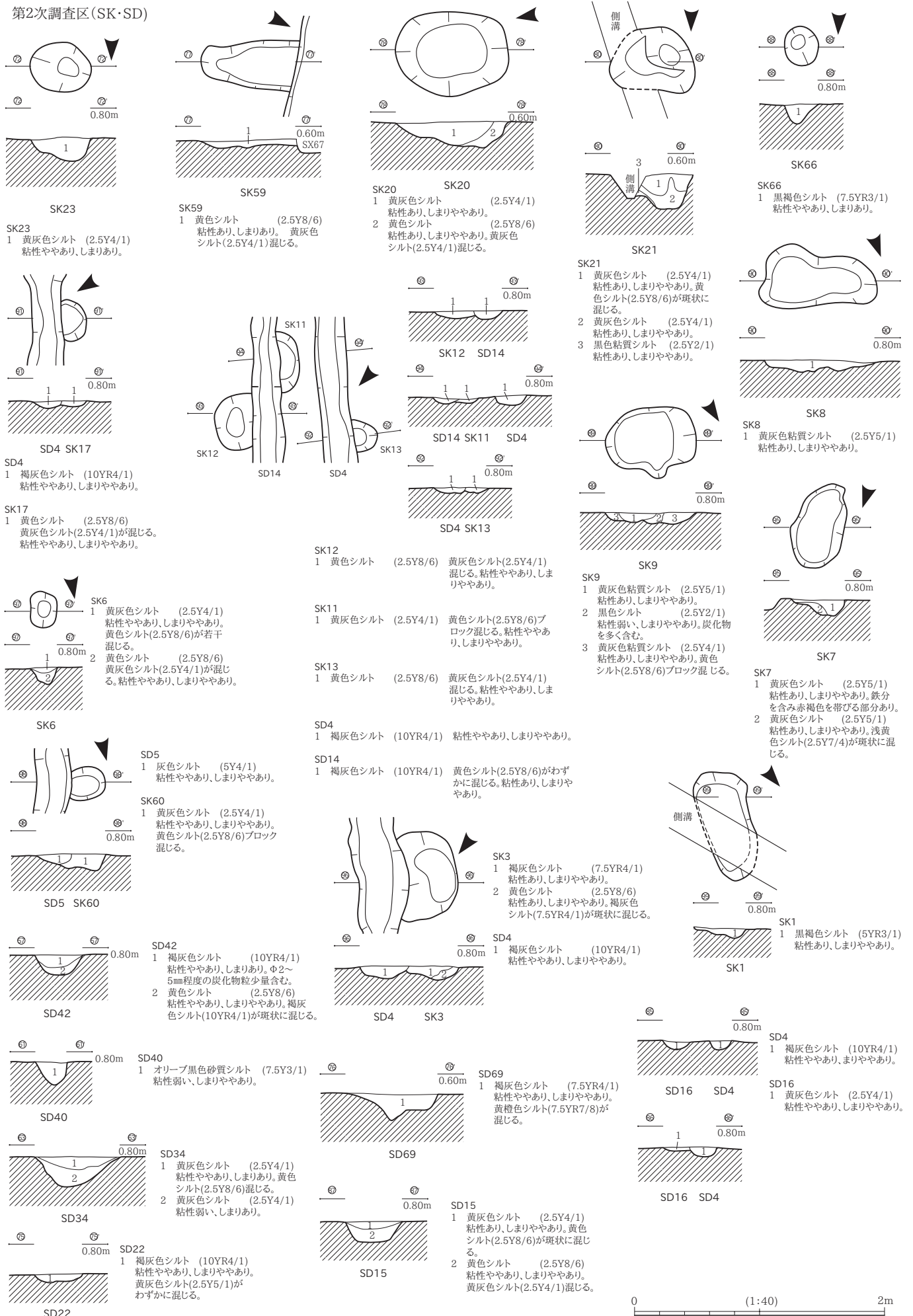
第2次調査区(SB・SE)



第2次調査区(SK)

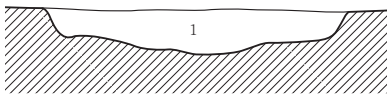
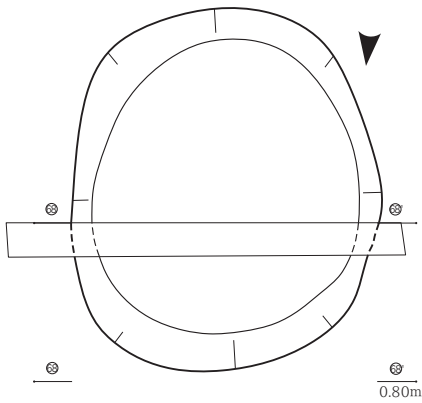


第2次調査区(SK・SD)



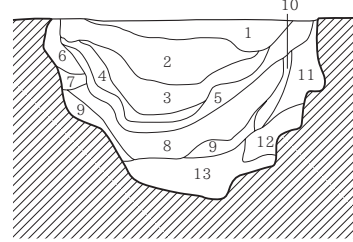
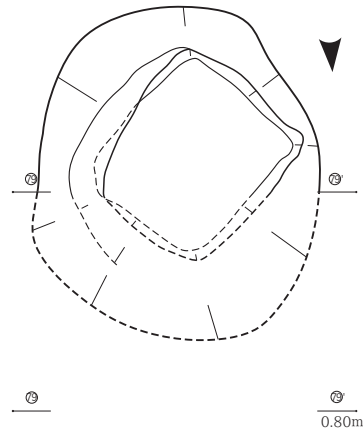


第2次調査区(SE・SK・SD・SX)



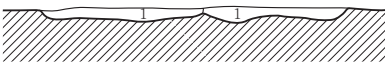
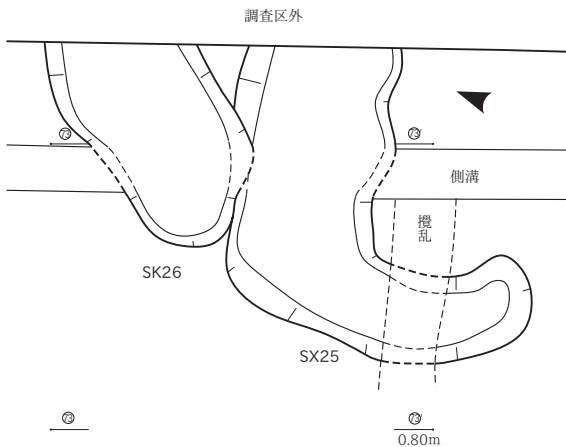
SE31

SE31  
1 灰褐色砂質シルト (7.5YR6/2) 粘性弱い、しまり弱い。



SE19

SE19  
1 褐灰色粘質シルト (7.5YR4/1) 粘性あり、しまり弱い。明褐色粘質シルト(7.5YR5/8)が斑状に混じる。  
2 褐灰色粘質シルト (7.5YR5/1) 粘性あり、しまり弱い。黄色シルト(2.5Y8/6)ブロック少量混じる。  
3 黄灰色粘質シルト (2.5Y4/1) 粘性あり、しまり弱い。  
4 淡黄色粘質シルト (2.5Y8/4) 粘性あり、しまりややあり。黄灰色シルト(2.5Y4/1)混じる。  
5 黒色砂質シルト (N1.5/) 炭化物層。粘性弱い、しまり弱い。  
6 黄灰色粘質シルト (2.5Y4/1) 粘性あり、しまり弱い。  
7 黄色粘質シルト (2.5Y8/6) 粘性あり、しまりややあり。  
8 黄灰色粘質シルト (2.5Y4/1) 粘性あり、しまりややあり。明緑灰色砂質シルト(10GY7/1)とオーリーブ黄色細粒砂(5Y6/3)混じる。  
9 黒色砂質シルト (N1.5/) 炭化物層。粘性弱い、しまり弱い。  
10 黒褐色シルト (2.5Y3/1) 粘性ややあり、しまりややあり。黄色シルト(2.5Y8/6)ブロック混じる。  
11 黒褐色シルト (10YR3/2) 粘性ややあり、しまりあり。  
12 淡黄色粘質シルト (2.5Y8/4) 粘性あり、しまり弱い。植物根による鉄分の影響で、縦筋状に赤褐色に変色する。  
13 黒色腐植植物(ガツボ)層(10YR1.7/1) 粘性なし、しまりなし。



SK26 SX25

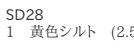
SX25  
1 黄灰色シルト (2.5Y4/1) 粘性あり、しまりややあり。黄色シルト(2.5Y8/6)が斑状に混じる。

SK26  
1 黄色シルト (2.5Y8/6) 粘性あり、しまりややあり。黄灰色シルト(2.5Y5/1)が混じる。



SK24

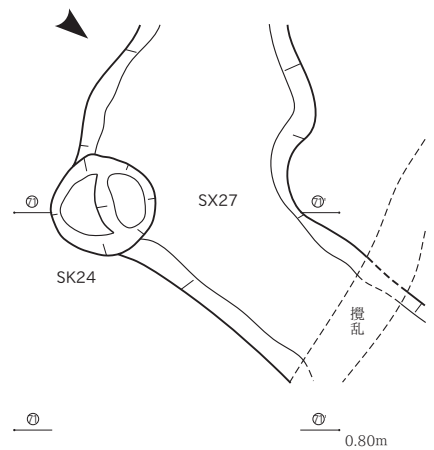
SK24  
1 褐灰色シルト (10YR4/1) 粘性ややあり、しまりあり。  
2 黄灰色シルト (2.5Y4/1) 黄色シルト(2.5Y8/6)混じる。粘性ややあり、しまりあり。



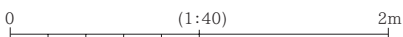
SD28

SD28  
1 黄色シルト (2.5Y8/6) 粘性あり、しまりややあり。黄灰色シルト(2.5Y4/1)が斑状に混じる。

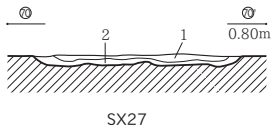
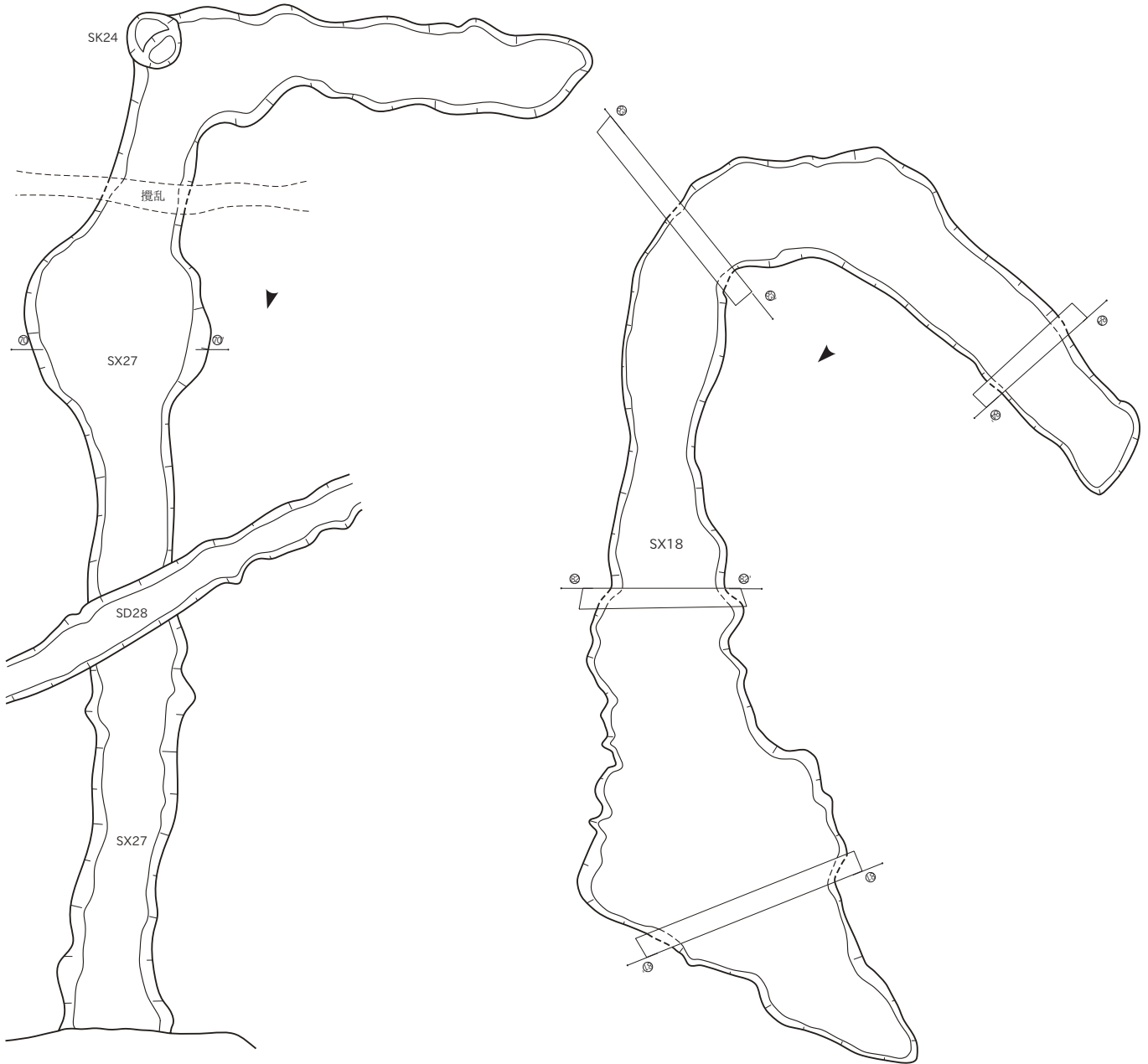
SX27  
1 黄灰色シルト (2.5Y5/1) 粘性あり、しまりややあり。黄色シルト(2.5Y8/6)が斑状に混じる。  
2 黄色シルト (2.5Y8/6) 黄灰色シルト(2.5Y5/1)混じる。粘性ややあり、しまりややあり。



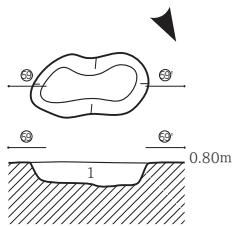
SK24 SX27



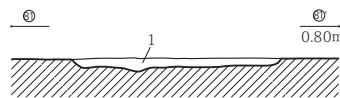
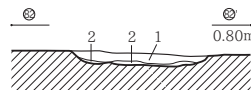
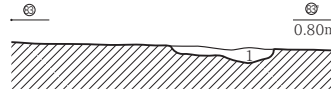
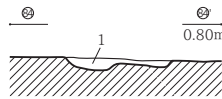
第2次調査区(SK・SX)



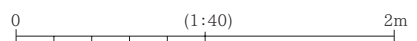
SX27  
 1 黄灰色シルト (2.5Y5/1) 粘性あり、しまりややあり。黄色シルト(2.5Y8/6)が斑状に混じる。  
 2 黄色シルト (2.5Y8/6) 粘性ややあり、しまりややあり。シルト黄灰色(2.5Y5/1)混じる。



SK77  
 1 オリーブ黒色砂質シルト (7.5Y3/1)  
 粘性弱い、しまりややあり。



SX18  
 1 黄色シルト (2.5Y8/6) 粘性ややあり、しまりややあり。黄灰色シルト(2.5Y5/1)が斑状に混じる。  
 2 黄色シルト (2.5Y8/6) 粘性ややあり、しまりややあり。黄灰色シルト(2.5Y5/1)混じる。

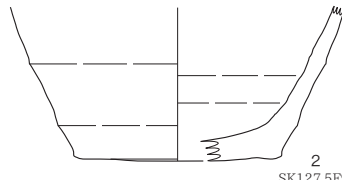


SK125(1)



1  
SK125.5E19

SK127(2)



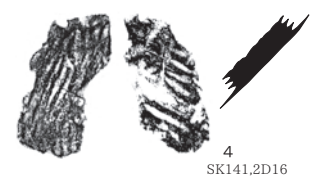
2  
SK127.5F9

P236(3)



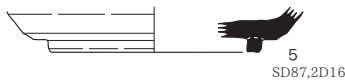
3  
P236.7F1

SK141(4)



4  
SK141.2D16

SD87(5~19)



5  
SD87.2D16



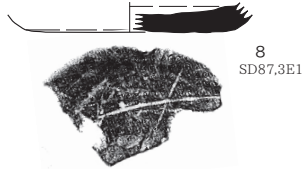
6  
SD87.3E8



7  
SD87.3E8



10  
SD87.3E3



8  
SD87.3E1



11  
SD87.2D16



12  
SD87.3E4



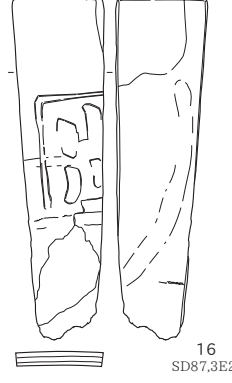
13  
SD87.3E10



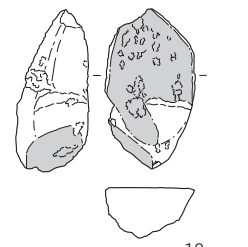
14  
SD87.2D25



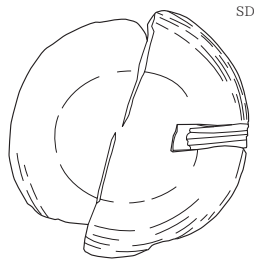
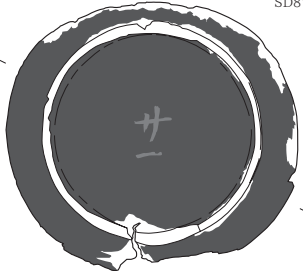
15  
SD87.3E9



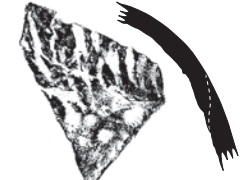
16  
SD87.3E2



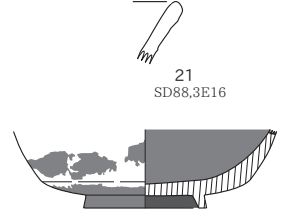
19  
SD87.3E14



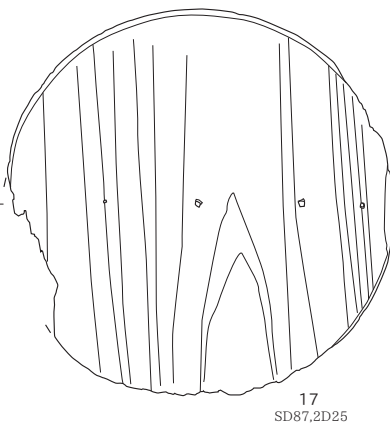
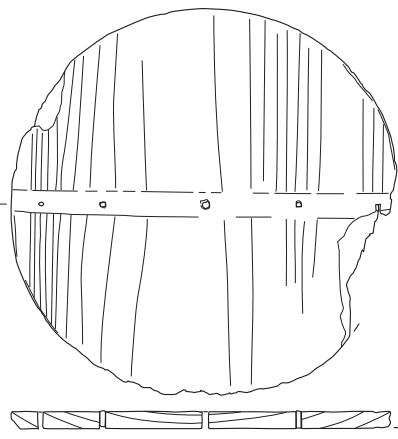
SD88(20~23)



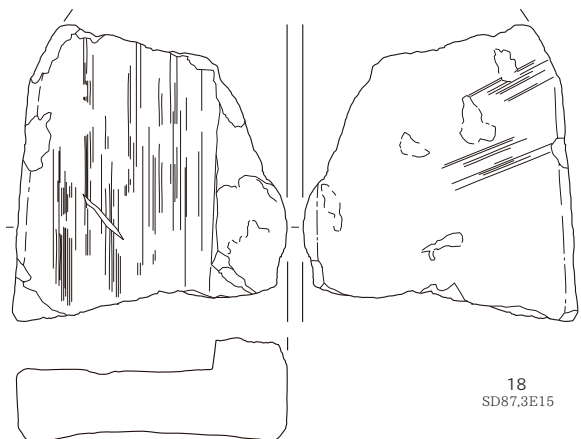
20  
SD88.2D17



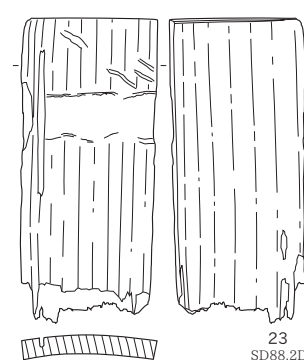
21  
SD88.3E16



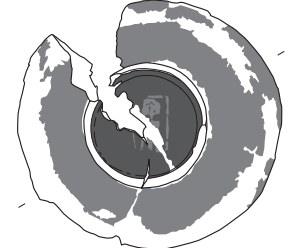
17  
SD87.2D25



18  
SD87.3E15



23  
SD88.2D23

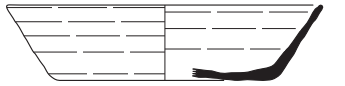


22  
SD88.1418

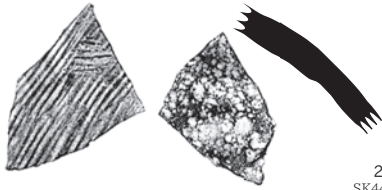
 軽石切断面  
 朱漆  
 黒漆

0 (1~15・19~22) 15cm (1:3)  
 0 (16~18・23) 10cm (1:4)

SK44 (24・25)

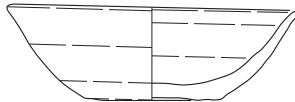


24  
SK44,9H3



25  
SK44,9H3

SK38 (26)



26  
SK38,9H23

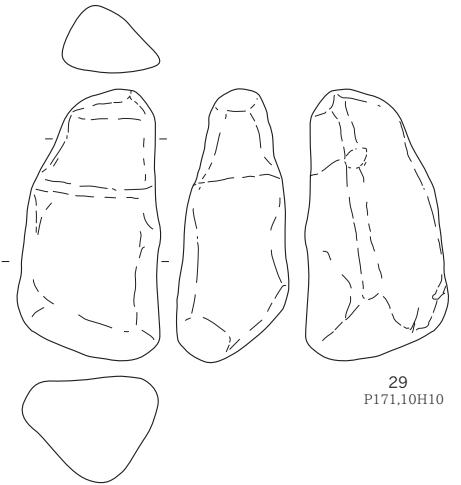


SK23 (27)



27  
SK23,13J17

P171 (29)



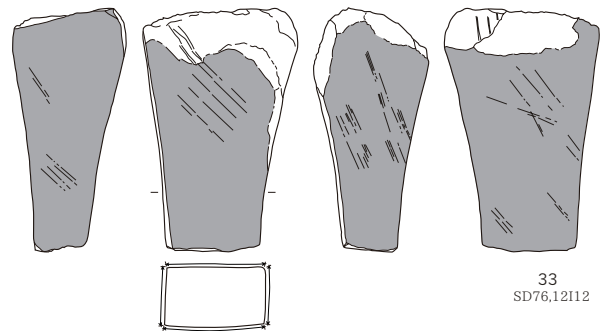
29  
P171,10H10

SD42 (28)



28  
SD42,9H18・23

SD76 (33)



33  
SD76,12I12

SD36 (30~32)

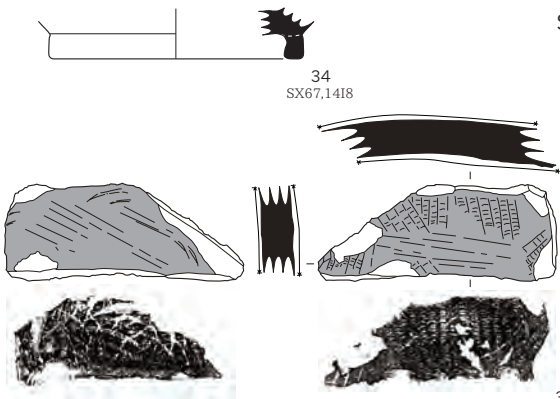


30  
SD36,10G9

31  
SD36,10G8

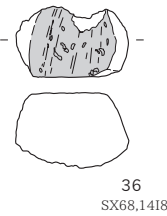
32  
SD36,11H1

SX67 (34・35)



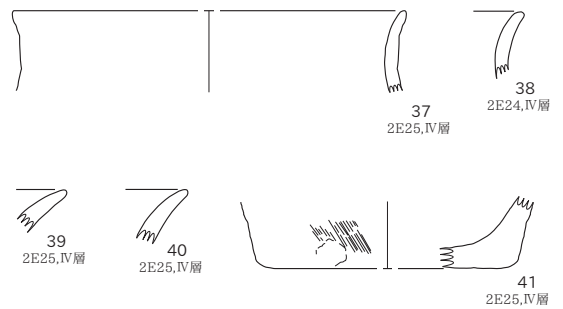
34  
SX67,14I8

SX68 (36)



36  
SX68,14I8

第3次調査区遺構外 (37~47)



37  
2E25,IV層

39  
2E25,IV層

40  
2E25,IV層

41  
2E25,IV層



42  
1D21,IV層



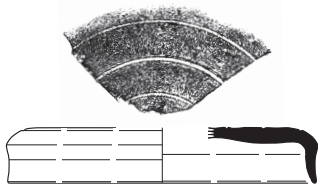
44  
2D19,Va層



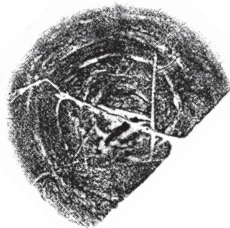
45  
2D19,Va層



47  
6F1,Va層

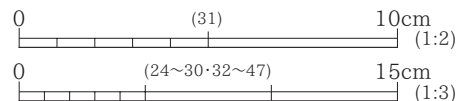


43  
7F8,Va層

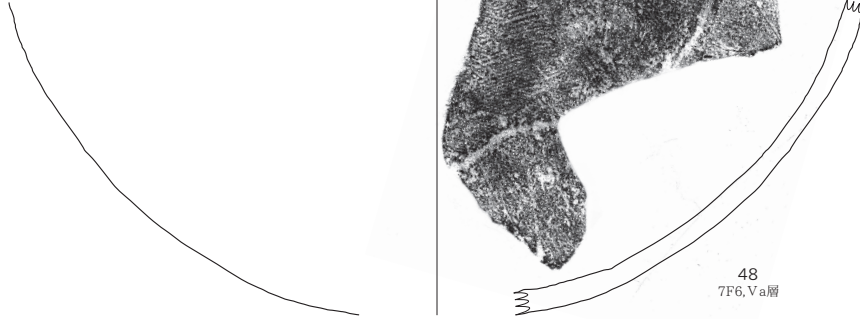


46  
5F16,攪乱

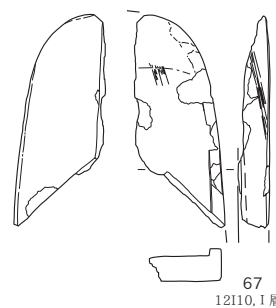
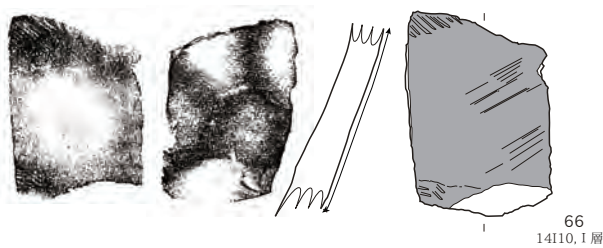
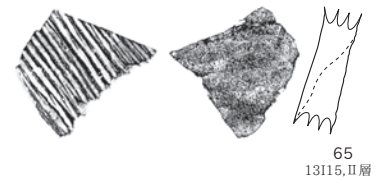
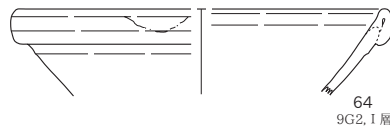
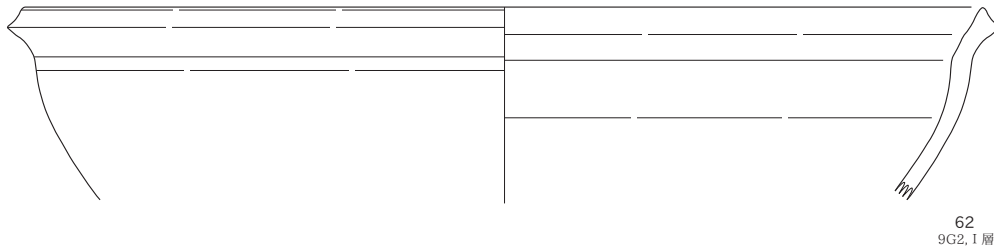
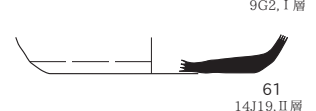
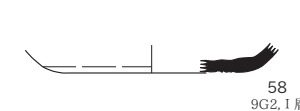
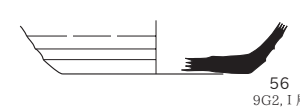
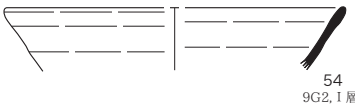
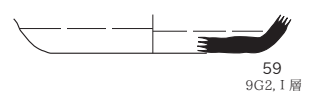
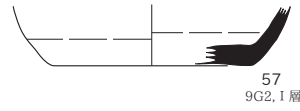
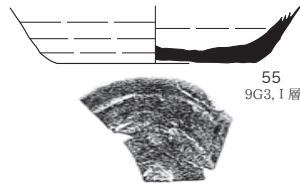
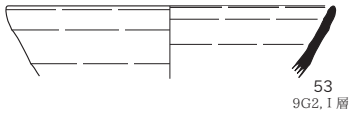
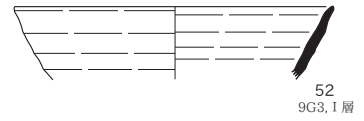
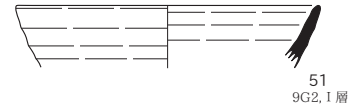
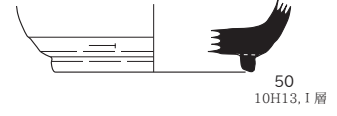
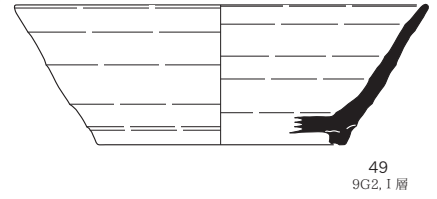
■ 軽石切断面  
■ 砥面



第3次調査区遺構外(48)



第2次調査区遺構外(49~67)



■ 砥面

0 15cm (1:3)





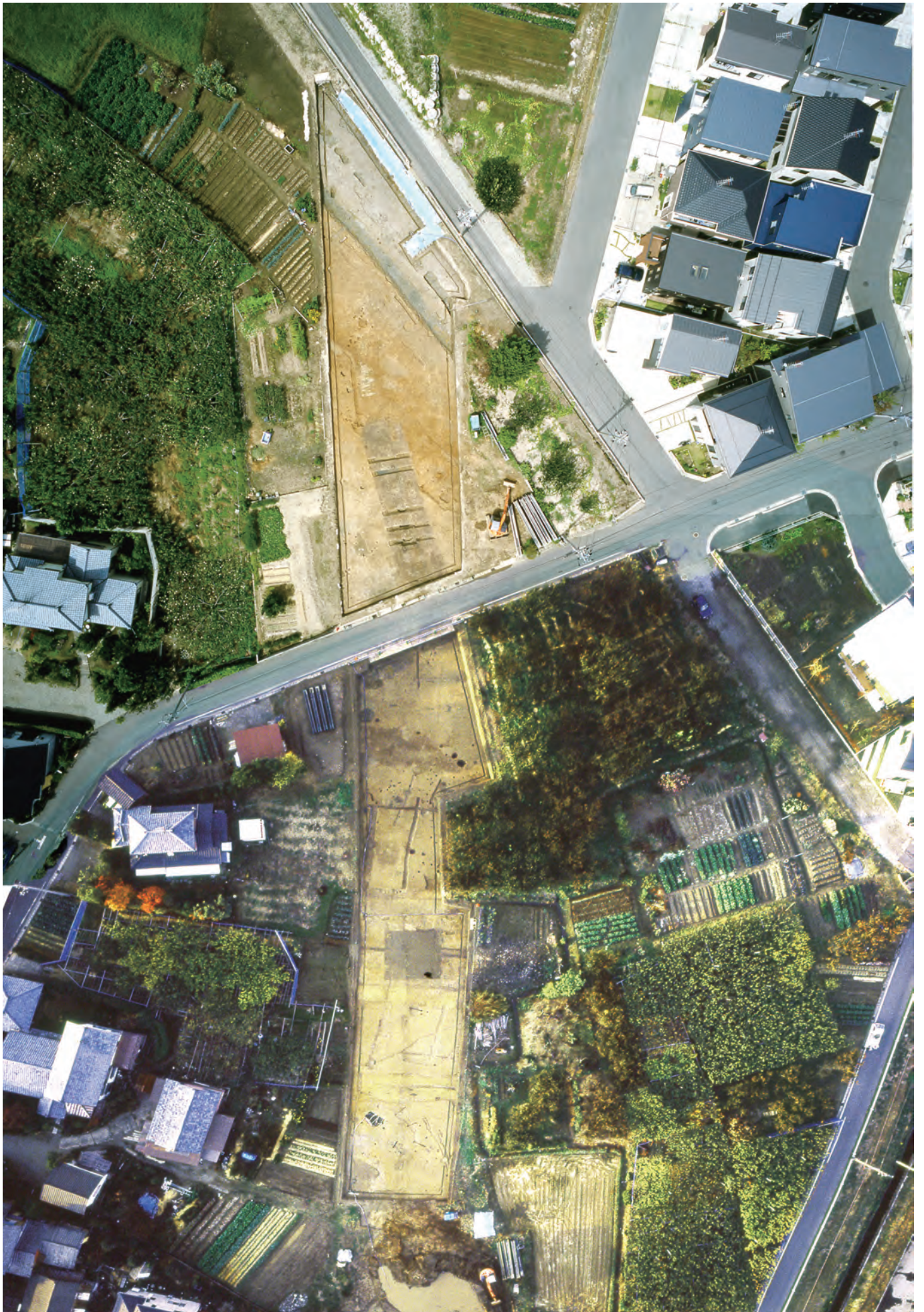




手代山北遺跡周辺空中写真

米軍撮影 1948年9月





手代山遺跡全景空中写真（上が北。第2次調査区と第3次調査区を合成）





第3次調査区全景（北から）

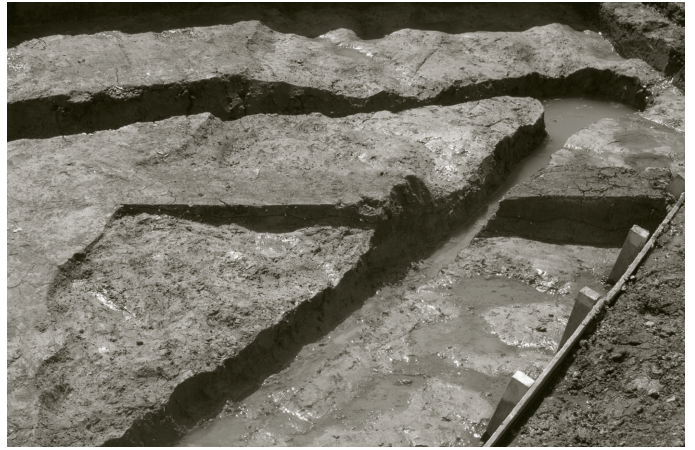


第2次調査区全景（北から）





基本層序2



SK78 土層断面（東から）



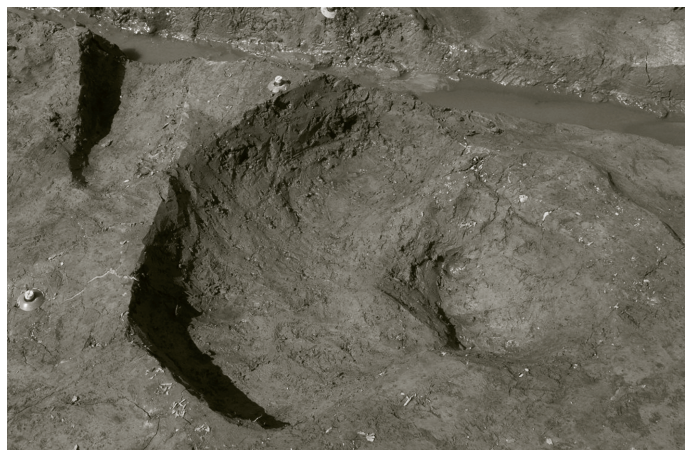
SK78 完掘（東から）



SK79 土層断面（南西から）



SK79 完掘（南西から）



SK139・SK140 完掘（南西から）



SK114 土層断面（南西から）

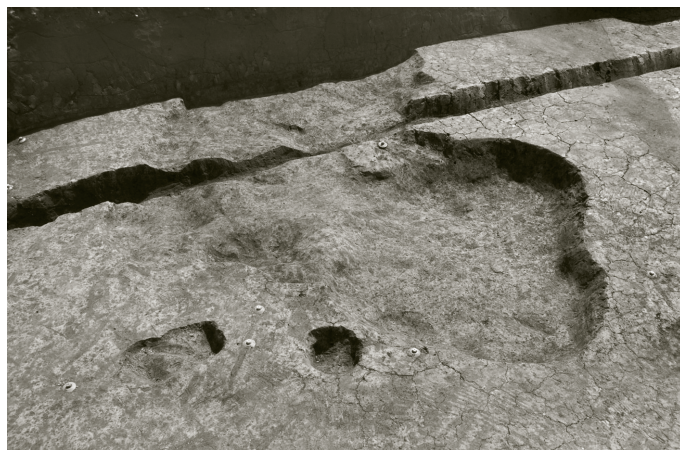


SK127 遺物出土状況（北西から）





SK129・130 土層断面 (西から)



SK129・130 完掘 (西から)



SD87・88 土層断面 (西から)



SD87・88 完掘 (西から)



SB316, SA317・318 検出状況 (北から)





SE43 土層断面 (北から)



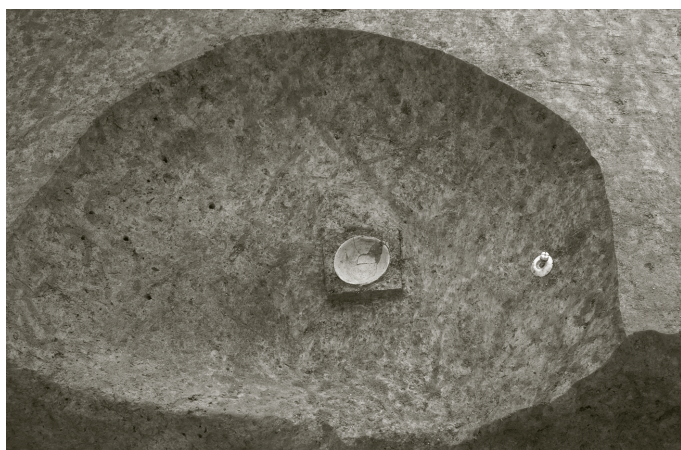
SE43 完掘 (北から)



SE41 土層断面 (東から)



SK38, SD37 土層断面 (東から)



SK38 遺物出土状況 (北から)



SK38 完掘 (北から)



SK33, SD34 土層断面



SK33 完掘 (北から)





SD42 遺物出土状況 (西から)



SD42 完掘 (北から)



SD 4・16 土層断面 (北から)



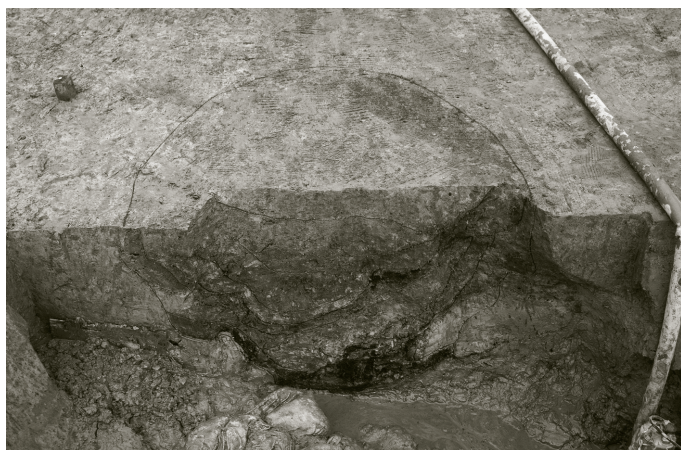
SD 4・16 完掘 (北から)



SE31 土層断面 (北から)



SE31 完掘 (北から)



SE19 土層断面 (北東から)



SE19 完掘 (北東から)





2



26

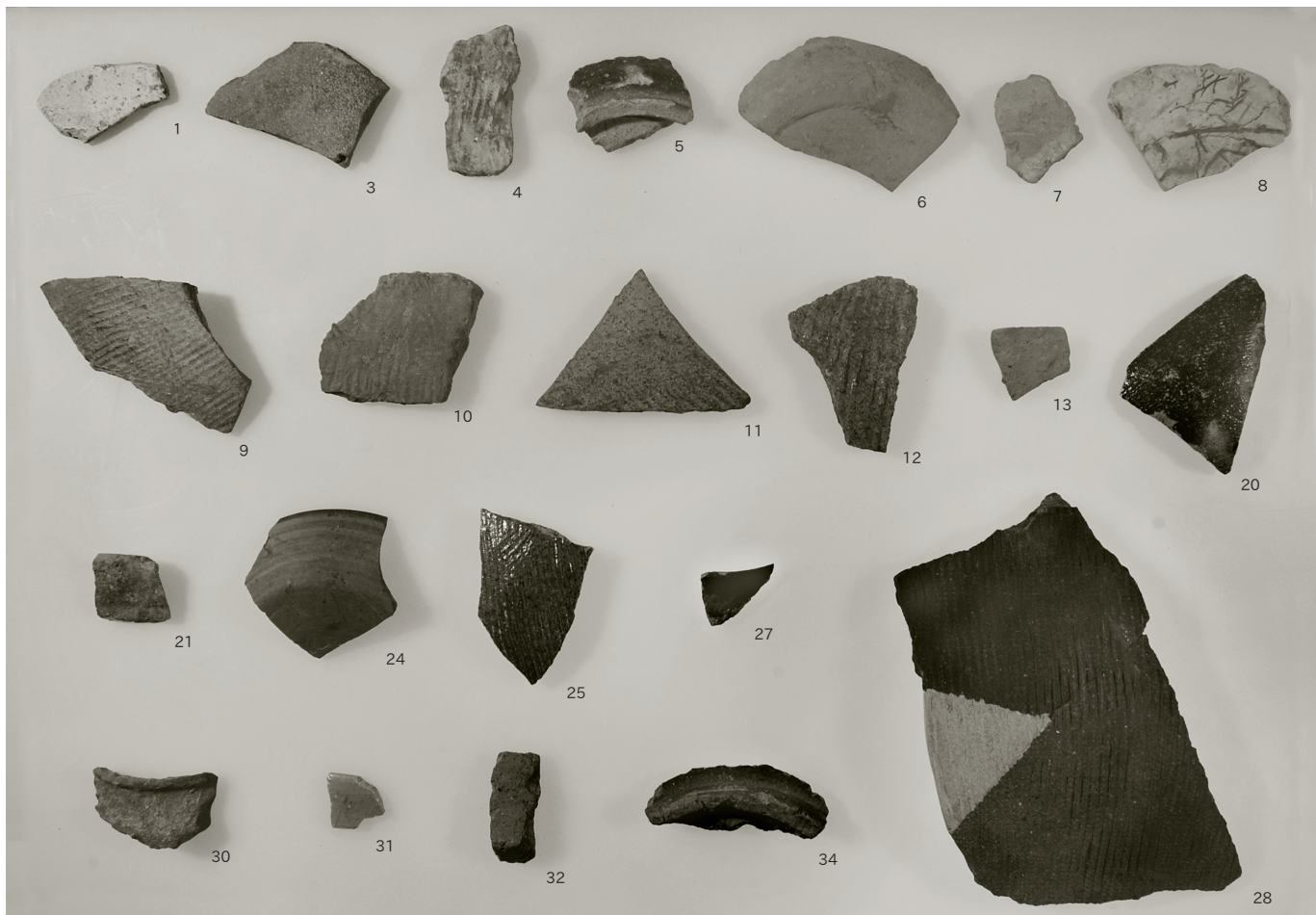


44



45

SK127 (2), SK38 (26), 第3次調査区包含層 (44・45)



SK125 (1), P236 (3), SK141 (4), SD87 (5~13), SD88 (20・21), SK44 (24・25), SK23 (27), SD42 (28), SD36 (30~32), SX67 (34)





第3次調査区包含層 (37 ~ 43・47・48)・攪乱 (46)，第2次調査区 I 層 (49 ~ 60・62 ~ 64)・II 層 (61・65)



土器転用砥石 (35・66)，石製品 (18・29・67)，軽石 (19・36)





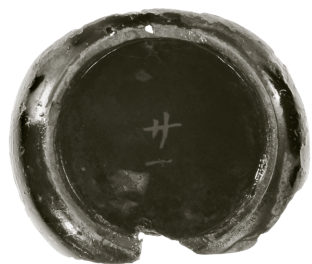
14 (SD87)



22 (SD88)



15 (SD87)



16 (SD87)



23 (SD88)



17 (SD87)

漆器碗 (14・23), 杓子 (15), 桶側板 (16・24), 桶蓋板 (17)

# 報告書抄録

ふりがな	てしろやまきたいせき だい2・3じちようさ							
書名	手代山北遺跡 第2・3次調査							
副書名	市道亀田南線建設事業に伴う手代山北遺跡第2・3次発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	新潟市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号								
編著者名	朝岡政康（新潟市埋蔵文化財センター）、丹下昌之・鳥越道臣（国際文化財㈱）、杉山真二（㈱火山灰考古学研究所）							
編集機関	新潟市文化スポーツ部歴史文化課埋蔵文化財センター							
所在地	〒950-3101 新潟県新潟市北区太郎代 2554 番地 TEL 025-255-2006							
発行年月	西暦 2009 年 3 月 31 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
てしろやまきた 手代山北遺跡	にいがたけんにいがたし 新潟県新潟市 江南区手代山 地内	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "	第2次調査 20070927～ 20071122 第3次調査 20080624～ 20080829	1384.1  896.8 計 2280.9	市道建設事業に伴う 本発掘調査
所収遺跡	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
手代山北遺跡	集落遺跡	奈良～平安 中世 近世以降(17世紀後半～ 19世紀)		掘立柱建物・井戸・ 土坑・性格不明遺構・ 溝・ピット		須恵器・土師器・石製品・ 土製品・木製品・鉄滓・ ふいご羽口		
要約	手代山北遺跡は旧流路（現亀田排水路）の自然堤防上に立地する。本発掘調査の結果、後世の耕作などによる攪乱により、良好な状態ではなかったが、奈良～平安時代前期と推定される遺構・遺物を検出した。その内容から当該調査地は集落の縁辺部に位置すると考えられた。自然科学分析の結果、調査区外近辺での水田耕作の可能性も推定された。同時期と推定されている同じ自然堤防上に位置する日水遺跡、また旧流路の対岸に位置する荒木前遺跡・中の山遺跡・貝塚遺跡など周辺遺跡との関係を指摘できる。これらを一つの遺跡群とみることでより一層、この地域のこの頃の様相が明らかとなるといえる。							

## 手代山北遺跡 第2・3次調査

市道亀田南線建設事業に伴う手代山北遺跡第2・3次発掘調査報告書

2009年 3月27日印刷

2009年 3月31日発行

編集・発行 新潟市教育委員会

〒950-8550 新潟県新潟市中央区白山浦 1-425-9

TEL 025 (228) 1000

新潟市埋蔵文化財センター

〒950-3101 新潟県新潟市北区太郎代 2554 番地

TEL 025 (255) 2006

印刷・製本 株式会社セビアス

〒970-8026 福島県いわき市平字作町 1-3-11

TEL 0246 (22) 6209

